

多摩川を溯った江戸・東京の民俗
「地口行灯と祭り」

2014年

岡崎 学
羽村郷土研究会

共同研究者：鳥丸邦彦

はじめに

自然界では、川は上流から下流に流れる。ところが、人間が関わる文化は、往々にして下流域の文化が溯って行く場合が考えられる。江戸市中から多摩地域へと伝わった文化の中でも山車や神輿が出る祭りを演出する地口行灯に焦点をあててみた。

江戸庶民の遊び心を表現したものの一つに地口がある。地域の産土神の祭りを彩り、盛り上げる役目を果たすのが地口を文字や絵に描いた地口行灯である。江戸市中にはじまり、時代と共に多摩地域へと浸透して行った。多摩川とその支流や玉川上水を遡るように調布市、国立市、小平市へ。そして、羽村市、福生市、あきる野市、青梅市等、多摩西部のいわゆる西多摩へと江戸から明治にかけて、ユニークなことば遊びの文化が伝わって行った。そして、現在もその民俗的文化が息づいていることに注目し、多摩川流域の各地に地口行灯を飾る祭礼を訪ねた。

多摩川が媒体となって文化がどのように上流に伝わり、どのように変化し、繁栄、衰退して行ったかを見つめ、さらに現状を調査・研究するだけでなく、地口行灯に書かれた文言や絵について元句を中心に調べた。

地口行灯は、ことば遊びの文化を灯籠という形で表現したもので、その起源は、江戸時代の中期と言われ、多摩地域では、「とうろう」と呼ばれている。地口行灯の絵柄を調べてみると、いくつかの系列に分けられる。現在、都内で描かれているものを江戸系。多摩地域の小平市や国立市に残る所沢市上安松の武藤押絵製作所の所沢系。同じ所沢系でも絵柄を異にする東屋人形店の地口絵は、現在、所沢市街に復活し、羽村市の羽村提灯店も同じ系列に属し、青梅市友田やあきる野市伊奈地区にも見られる。さらには、今回の調査で江戸時代後半の弘化年間から明治にかけて出版された地口絵手本の流れを汲むものが、あきる野市と青梅市小曾木に残っていることが分かった。江戸系をはじめ、武藤押絵製作所に係る所沢系については、足立区郷土博物館及び国立市・くにたち郷土文化館の展示図録をはじめ、研究者による文献により明らかにされているので重複を避け、地元羽村市とあきる野市、青梅市の地口行灯について、記録として残しておきたいと考え、詳細に調査した。

現在、23区内中心部で地口行灯を見る機会は少ないが、いわゆる江戸系の地口行灯が足立区を始め、台東区、江東区などに残っている。多摩地域では、調布市や国立市以西の地域、特に多摩川上流域には、江戸から明治初期に流行した地口ことばが灯籠絵として数多く残されている。

ここ数年来、神社の祭礼における地口行灯が年々歳々廃れたり、子供が描くマンガに変化し始め、府中市の大国魂神社や立川市の諏訪神社などでは平成に入ってから姿を消した。しかし、国立市の谷保天満宮や調布市の西光寺、玉川上水が流れる小平市の神明宮等に見ることが出来た。

さらに、西多摩地域に入ると、地口行灯を通して江戸から明治の文化が色濃く残り、資料の収集と研究の余地を見出した。江戸・東京のことばの文化が多摩川を溯り、さらに秋川や平井川などの支流域にまで及んでいることが分かった。

江戸時代、政権が安定し、人口が集中した江戸市中に建築ブームが起り、多摩川から青梅材、荒川から西川材が運び出された。多摩川を例にすると、普段でさえ、火災が多かった江戸市中のこと。常に建築材として樹木が切り出され、多摩川を下って行った。ここに多摩川を媒体として筏師を通して人と人の交流が繰り返された。もう一つ、玉川上水。江戸の役人が羽村にきた。これも言葉をはじめ多くの文化を運んできた。このようにして、江戸・東京の文化が川を遡り、やがて各地域へと浸透して行ったと考え、江戸時代に生まれ、現代まで残されている祭りと地口行灯に焦点を絞り、調査・研究課題として取り組んでみた。

目次

はじめに	1
祭りと地口行灯	3
羽村市の地口行灯	13
青梅市小曾木の	85
あきる野市穴沢天神社の地口行灯	107
あきる野市留原・八坂神社の地口行灯	130
あきる野市岩走神社の地口行灯	160
青梅市西分神社の地口行灯	182
多摩地域の祭礼で地口行灯や灯籠を飾る寺社一覧	189
参考文献・資料提供者	191

凡例

1. 本書は、公益財団法人とうきゅう環境財団の研究助成の一環として、研究課題・多摩川を溯った江戸・東京の民俗「地口行灯と祭り」と題して行った調査・研究の成果である。
2. 内容的には、研究成果ではあるが、江戸庶民の言葉遊び「地口」を念頭に平易で分かり易く、誰にでも気軽に読めるよう努めた。
3. 調査した地口行灯の絵紙に書かれた文字は、旧字体の筆文字で祭り用のため、文字が躍っていて解読困難なものもあり、誤読、誤解については、ご容赦願いたい。
4. 使用した表記は、原文に合わせたため、社会通念上、不適切用語とみなされるものを含むが、正しい歴史認識の上に立って記述した。
5. 末尾に地口行灯を飾る祭礼等を紹介したが、祭礼日、地口行灯の有無等が、地域の事情で変わる場合があるのでご承知おき願いたい。
6. 調査期間が2年間だったため、結果的には、多摩川流域の全地域の全寺社等に赴くことが出来なかったため調査漏れ、あるいは、小規模なものは、記述を割愛したものもある。
7. この調査・研究は、主調査・岡崎学と共同研究者・鳥丸邦彦の二人で行ったものである。

なお、本件調査にあたり、下記の公共博物館・資料館並びに関係者の方々に多大なご協力をいただいたので、この場をお借りして御礼申し上げます次第である。

記

羽村市郷土博物館	くにたち郷土文化館	日野市郷土資料館
岡部義重氏（奥多摩郷土研究会）	塩野貞雄氏（青梅市小曾木）	
清水征彦氏（青梅市柚木）	篠村好雄氏（あきる野市留原）	
中村清作氏（あきる野市伊奈）	南沢栄一氏（あきる野市深沢）	
(故)木住野又一氏（あきる野市留原）		

祭りと地口行灯

江戸時代は、庶民の時代と言われる。しかし、江戸に大田道灌が城を構えて以後、徳川家康が江戸に入り、開幕以来、早々に庶民が活躍したわけではない。そこには、士農工商などという言葉に代表される身分制度が存在していた。武家が政治の中心にあり、覇権争いに庶民が巻き込まれ、常に鬱積された環境の中で虐げられた人々の犠牲があったことを記憶にとどめておきたい。

江戸 300 年の歴史の中で特筆すべきは、戦乱のない安定政権の中で庶民の力が芽生え、蓄えられてきた結果、江戸っ子に代表されるような人々が生まれ育って来たことである。

民俗学者・柳田国男によると、日本人の生活の中には、独特の世界観があり、ハレ（非日常）とケ（日常）があるという。日常の生活の中に非日常的祭りというイベントを取り入れ、集団生活の中に共同体意識が生まれる。ハレの日は、年に一度のこともあれば、月に一度、あるいは、それ以上の回数もある。それが、正月や小正月行事や月の満ち欠けに関係したお日待や庚申、あるいは、3月、5月の 節句などがある。



神田祭

非日常的の祭りは、大きなものは、江戸を代表する、いわゆる江戸の三大祭り・日枝神社の山王祭、神田明神の神田祭、富岡八幡神社の深川祭があり、特に山王祭は、京都の祇園祭、大阪の天満祭とともに日本三大祭りに数えられている。これらの伝統ある祭礼は、かつては、「神輿深川、山車神田、だだっ広いが山王祭」と謳われたこともあるが、山車の神田は、交通事情で神輿祭になったが、21 世紀の現代でも盛大に行われている。

神田祭は、9月に秋祭りとして行われていたが、『江戸名所図会』にその様子が、詳しく描かれ、天保 12 年（1678）9月 15 日、神田雉子町の山車は、規模も飾りも豪華なことで有名で二頭の牛と大勢の引手により引かれている。

また、斎藤月岑の『東都歳時記』にも大伝馬町の大規模な鶏を載せた山車が描かれている。

一方、6月に行われた神田明神の天王祭の様子が、山東京山の『五節供稚童講釈』（天保 4 年・1833）に歌川国安の手で神輿とともに地口行灯が描かれている。文字や絵の内容を詳しく読み取ることにはできないが、側面に「氏子中」と書かれていて今でも場所によって地口行灯の側面に同じ文字を見ることがある。



地口行灯を飾る風習は、宝暦年間（1751～1762）、『我衣』に「二月初午の稲荷行灯、六月祇園の行灯時行」とあり、ちなみに、時行とは、流行る＝はやる、と読む。初午や祇園祭に行灯時行るとあるが、「地口行灯という言葉はない。ここで注目したのは、『我衣』の「六月祇園」とか『五節供稚童講釈』の「天王まつり」の文字。ともに祭神は、牛頭天王である。羽村（現羽村市）は、江戸時代から玉川上水の取入口として江戸市中と深いかかわりがあった。そのためか、祇園とか天王の言葉や地名が残る。現行の祭礼もかつては、旧暦六月に行われていたし、神社名が稲荷神社をはじめ、阿蘇神社や神明神社であっても羽村でいう「とうろう」の横には、八雲神社と書かれた文字を見る。また、地名では、天王台と呼ばれている地区がある。一説に地口行灯は、稲荷神社に始まるとされているが、江戸市中、どこにでもあった稲荷を祀った小詞は、「江戸で多いは、お伊勢、稲荷と犬の糞」と揶揄されたほど

で、牛頭天王社よりも数が多く、たまたま初午祭が文献に残っていたとも考えられる。稲荷といえば、初午や二の午に行われる行事がある。食べ物に関係があることから、祭礼では、非日常的なご馳走や、子供たちへのもてなしがあり賑わったという。中野区や渋谷区のような、江戸時代は、郊外だった地域でも地元の古老の話によると、裕福な名主や大きな商家では、初午には、赤い鳥居の前に、地口行灯を飾り、五色の幟を立て、近所の子供たちにお菓子やおもちゃを分け与えたので子供に限らず多くの人々が集まったという。

平成 25 年 (2013) 2 月、渋谷区の白玉稲荷神社では、初午の日に地口行灯を飾り付けていたが、毎年新しい絵紙を張り替えた様子はなく、地道な祭礼を継続していた。あまり子供の姿はなく、氏子である高齢者と主婦によりしめやかに行われている様子だった。

ユニークなものとして紹介しておく、歌舞伎座の二ノ午祭がある。旧歌舞伎座最後の地口行灯の写真である。当然のことながら、新歌舞伎座でもすべてを新調して継続している。



右側の絵は、縁起物の川柳「ふくふくとふく女ふき出すさきげん」。

江戸三大祭りは、都心の行事で、ほかに浅草の三社祭などがあるが、残念ながら、地口行灯は、見ることは出来なくなってしまった。都心のビル街に地口行灯は似合わない。これが偽らざる理由。花傘を飾り付けたり、箱行灯の規模を大きくする。あるいは、地口絵の現代化等々が考えられるが、現代人の目には、受け入れられそうにない。

● 23区内で地口行灯を飾る地域

現在、23区内で地口行灯を飾っている地域を訪ねると、イベントとして飾り付ける。一カ所にまとめて規模を大きくする。神社の境内や博物館・資料館での展示など、地域限定のものばかりだった。江戸市中に始まった地口行灯ではあるが、結果的には、台東区、江東区の両区では、資料館の常設展示や初午企画展などで地口を扱っていたし、台東区内では、浅草をはじめ、台東区竜泉の千束神社、同千束の吉原神社などが数多くの地口行灯を初午祭に飾り付けていた。

一方、都心の文京区本郷の五社稲荷神社で初午に地口行灯を飾っていたが、本来の飾り方ではなく、現代人好みの数を揃え、イベント性を強く感じさせられた。

足立区の場合は、千住に「絵馬屋」があり、現在も地口行灯絵を供給しているし、足立区立郷土博物館が都内で最も積極的に地口行灯を研究・展示し、地口行灯の展示図録も充実したものを発行している点を評価したい。民俗学的見地から地口行灯は、都心からほとんど姿を消し、今や、下町と多摩地区に残るのみとなってしまった感が強い。専門業者による供給は、足立区とその周辺に「絵馬屋」。23区内では、泪橋大嶋屋と北区滝野川のびら武。多摩地区では、びら武の地口絵を見かけることが多い。多摩西部では、印刷されたものや子供の絵が増えつつあるが、地元の氏子が描いたものもあり、地口の絵解きを楽しめるものが残っている。

23区内に残る地口行灯



浅草稲荷祭



台東区・千束稲荷



文京区・五社稲荷



北区・王子稲荷



渋谷区・白玉稲荷



台東区・吉原神社



江東区・白笹稲荷



江東区・深川江戸資料館



台東区・下町風俗資料館

多摩川に沿って祭りを追ってみると、大田区に穴守稲荷の夏祭り、多摩市に式内社の小野神社があり、府中市の大国魂神社のくらやみ祭、くり祭、国立市の谷保天神祭、立川市諏訪神社のお諏訪さま、多摩川右岸の稲城市、日野市、八王子市等々。

春から秋にかけて大なり小なり神社にまつわる祭礼が数多く行われ、非日常の世界が受け継がれ、人々の共同体意識、今流行りの絆が生まれ、育っている。

今回取り上げたメインテーマ・地口行灯を数多くの祭礼の中からピックアップして川が育む文化の伝播を多摩川流域に探し求めてみた。

●多摩川河口直近の大田区羽田・穴守稲荷神社



語る以上は、かつては地口行灯も飾ったものと思われるが、今や、その姿は、献灯祭という形で

2月の初午行事や11月3日の例大祭とは、別に8月に、献灯祭があり、800基ほどの行灯が灯される。氏子や各種団体から寄せられる行灯は、千差万別。しかしながら、地口及びそれらしきものは見当たらない。稲荷神社を

見るにすぎない。内容的には、手描きの物が多いが、中には、歌舞伎役者の絵や写真をコピーしたものや、神社にも関わらず阿修羅の絵があったり、羽田空港のお隣だけあって、航空機の絵もあった。結果的には、地口行灯が献灯祭の灯籠に進化したとも言えよう。

●稲城市の式内社・穴沢天神社



8月25日が例大祭で、行灯は飾り付けられるが、厳密に言えば、地口行灯ではない。宵宮の足もとを照らす行灯というよりも祭を象徴する飾り物として要所々々に立てられているにすぎない。都市化された地域では、いち早く地口行灯の描き手を失い、また、既製品を入手する手段も分からないまま廃れて行くようである。それでも、ここ穴沢天神の祭礼を司る神社役員の涙ぐましい努力が写真にあるような行灯を考え付いたものと思われる。ここでも地口行灯が

遊び心を失い、単なる照明としての灯籠に取って代わる運命にあるような気がした。

●日野郷の総鎮守八坂神社ほか

日野市は、多摩川右岸の地で最も地口行灯が残る地域である。いくつもの新興住宅や団地が出来た地域ではあるが、まだまだ畑地や雑木林が残り、里山風景をとどめている。しかし、最も歴史と知名度の高い八坂神社（旧社名：牛頭天王社）に地口行灯を見ることは出来なかった。日野市の神社のほとんどが9月15日前後を祭礼日としていて、早いところでは、8月下旬、子供たちの夏休みに合わせて行う川辺堀之内の日枝神社。昭和時代は9月に実施していたが、平成になってからは8月に定着した。古老の話では、天王様とか天王祭と言う言葉が聞かれ、7月に祭りを行い神輿もあったという。平成13年8月25日に訪れたときには、子供の姿はなく、大人だけ、しかも年配者だけの寂しげな雰囲気だった。しかし、子供たちが描いた行灯が参道に数多く飾り付けられ、祭を演出していた。話を聞くと、行灯とは呼ばず、「とうろう」と呼び、地口行灯の話は聞けなかった。



日枝神社



日枝神社のとうろう絵の書き手は子供たち



9月第一日曜日、この中では、三澤八幡神社に多くの地口行灯を見た。神社境内及び近隣はもちろんのこと、氏子の範囲内でも道端や個人宅にもあった。絵紙は、本格的な地口行灯で北区滝野川のびら武製品だった。中には、個人宅に見様見真似で書いたものもあった。



八幡神社の参道



田園風景と地口行灯



残された2基

また、熊野神社では、使い回しらしく、古いもの2基だけが残されていて拝殿の脇に立て掛けてあった（前ページの写真）。18年前に日野市内の民俗グループの調査では、数十基の地口行灯を飾っていたという記録がある。今では、入手困難となり苦肉の策でこの二つの地口行灯を大切に保管していこうとしているようだった。



上落川・大宮神社の地口行灯は、社殿に上る石段の左右に10基ほどあり、びら武と市販の印刷ものの2種類。百草の八幡神社には、宵宮の午前中に行ったため、飾りつけの準備中で6基ほどが部屋の片隅にあったが、いずれも市販の印刷ものだった。地口行灯が多かったのは、高幡の若宮愛宕神社で、びら武製のものが新旧合わせて20基ほどが道路脇に飾られていた。

新井の石明神社では、個人宅に子供が書いたもの1基のみ。平成7年には、100基を超え、40年も前から子供たちが書いていたという。上田の北野神社は、子供たちの作品展のように多くの行灯が飾られていたが、地口に相当するものはなかった。これも時代の趨勢でやむを得ないもの。ただし、入口には、写真にあるような道路をまたいで看板（またぎ）が取り付けられていた。



以上、日野市内では、本格的な地口行灯を飾る神社がある一方で市街地では、イベント的な祭りに移行し、地口行灯が姿を消してしまった。また、描き手がいなくなり、子供の絵が取って代わるところもあれば、子供不在で寂しげな大人社会の地味な祭りをして、古い地口行灯を使い回しているところもあった。

平成7年（1995）～8年に日野市歴史と民俗の会が市内の神社に残る祭幟についての調査した資料の中に地口行灯も合わせて調査した記録があり、地口行灯の衰退の道を理解するとともに、地口行灯の伝統を守ろうとする氏子をはじめ神社関係者の努力も垣間見ることも出来た。

日野市における平成7～8年の調査と現状を比較することから見えて来たことは、どこの地域にも当てはまることで、描き手、あるいは、供給者がいなくなることが地口行灯の衰退への道、そのものだと思われた。さらに、多摩川左岸の府中市、調布市、国立市等に目を向けてみよう。

●府中市・大国魂神社

くらやみ祭の名で知られる例大祭は、多くの人が集まり、多摩地区では、盛大なものだった。しかし、祭提灯ばかりで地口行灯は皆無。都心の江戸三大祭りのような規模ともなると、地口行灯はなぜか似合わないようだ。しかし、9月27日～28日に行われる栗祭では、市民が描いた200



基以上の行灯が奉納され、参道に並ぶ。地口行灯が姿を変えて絵灯籠として奉納されているともいえるが、どれも形のうえでは、江戸時代の傘付き地口行灯に似て非なるもの。大衆受けするだけで地口の良さ、楽しさが失せたことを残念に思う。

●調布市・西光寺四万六千日法会

正式には、「四万六千日観音会」と呼ぶ。浅草の浅草寺の四万六千日法会より1か月後の8月10日に行われる。この日にお参りすると46000日分の功德があるという。仏の世界は、規模が大きい。お地蔵さんなどは、釈迦入滅後56億7千万年もの間、万民を救う努力をしないと菩薩から如来になれないとか。だから菩薩は、努力の象徴なのだ。

西光寺境内には盆踊りの櫓も設置され、参道に50基以上の地口行灯が並ぶ。寺院に地口行灯とは、珍しい光景である。地口の中身は相当高度で、元句当てのクイズに挑戦しても、まずは、文字からして読めないし、正解を考えているだけで夜が明けてしまいそうだ。



●国立市・谷保天神社

地口流に言えば、「野暮天」と言っては失礼ながら、子供のころは、谷保天神＝野暮天だと思っていた。例大祭は、9月下旬。ここの地口行灯は、本格的なもので見応えがある。



地口行灯は、谷保天神社独自のもので、国立市内在住の森久保康男が描いているが、誤写と思われるものや、近年、レパートリーを増やそうとして、復刻版の地口絵手本を模写するようになってきたのは、地域の特性を失い、残念に思う。また、同じ国立市内にある青柳稲荷神社の例大祭でも地口行灯が見られるが、北区滝野川・びら武製のものを購入している。この青柳地区は、

寛文 11 年（1671）の未曾有の多摩川大洪水で青柳島が石田村とともに流失し、現在地に村ごと移転してきたという悲劇の村ともいえるが、地口行灯がよく似合う地域だ。国道 20 号線（甲州街道）から多摩川方面に向かう神社へ続く道の入口の左右には、「青柳稲荷五社大神」の提灯が架かる。以下は、その提灯と地口行灯。



小平市・神明宮

小平市は、多摩川流域からは、やや離れているが、玉川上水との関わりと神明宮に残る地口行灯並びに小平市主導で地口行灯を含めたとうろう祭りを実施している地域である。

神明宮の例大祭は、4 月下旬、青梅街道を挟んで盛大に行われ、地口行灯の数と種類がバラエティに富む。そして、色とりどりの花傘が楽しめ、江戸時代からの飾り付けが見られる。



地口絵紙は、隣接する東村山市のはなびや人形店から入手のもの、市販されている印刷地口絵、北区滝野川のびら武製品。最近では、美術大学生が模写したものも登場してきていると聞く。

なお、毎年子供たちの夏休み期間中の 7 月下旬には、市主催の「灯りまつり」が盛大に行われ、3000 個もの灯りが灯る。灯りまつりの原点は、市内にある神明宮の地口行灯で、この地域では、古くから神社の祭礼に地口行灯が各家々で飾り付けられていたという。小平市では、地域興しを目的に市と実行委員会との共同事業として始め、間もなく 10 年目を迎える。とうろう工作教室やコンテスト等により、夏休みのメインイベントとして定着してきている。



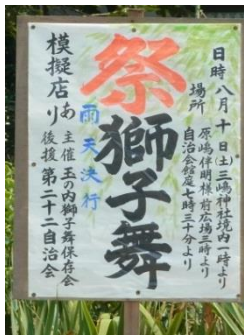
小平市灯り祭りの作品

●福生市以西（西多摩）の神社と地口行灯

今まで見てきた地口行灯を飾る神社の多くは、旧牛頭天王社で、明治時代以降、維新政府の意向で名前を変更させられ、八雲神社とか八坂神社を名乗り、素戔鳴尊（須佐之男命）を主尊としている。西多摩も同様で、たとえ、稲荷神社や神明神社を名乗っていても、地口行灯には、八雲神社と記されている場合が多い。

福生市の神社では、7月に八雲祭を行っているが、市販の印刷地口といわゆる江戸系のびら武の地口絵が主流で、数多くの地口行灯を見ることが出来る。なお、多摩川に近い旧福生村では、子供の絵、あるいは、自作の写真なども見受けられ、地口絵は見当たらなくなってしまった。

日の出町には、本格的な地口行灯はなく、白山神社、三嶋神社、毘沙門天などで灯籠を見たが、三嶋神社の祭礼は、獅子舞が有名で、灯籠絵を地元の書道家・宮田美子さんが川柳にユニークなさし絵を添えて描いていたのが印象深かった。



三嶋神社の祭礼案内ポスターと万灯

宮田さんの作品

毘沙門の天灯籠

●羽村市・阿蘇神社ほか全神社

羽村市内の神社は、4月第二日曜日に例祭を行い、各神社及び氏子宅で地口行灯を飾る。羽村に限らず、西多摩では、「とうろう」と呼んでいる。提灯店がなくなった今では、下絵の一部約45種を高齢者事業団・シルバー人材センターが預かり、色付けして販売しているので絶えてしまう恐れはない。市内にあった提灯店が所沢市の東屋人形店と関わりがあり、絵柄を引き継いでいるが、中には、古い原画を元にしたり、川柳などは、独自に開拓していたようだ。

羽村郷土博物館で収蔵している羽村提灯店から寄贈された地口絵および地口文については、別項目で解説を加えることとしたい。

●あきる野市の神社ほか

深沢・穴沢天神社、留原・八坂神社、伊奈・岩走神社の3神社については、江戸ないしは、明治の地口絵手本の影響が認められ、なおかつ、古い資料が残されているので詳述することとするが、ちなみに、市内留原で地口絵を描いていた故木住野又一氏の手本集の表紙には、「とうろう絵」と記されていた。

五日市憲法で有名になった深沢地区にも古い地口が残されていた。代々青年団が引き継いで元絵を残してあったので見ることが出来、大収穫だった。地元の人々の協力に大いに感謝。

そして、現在も盛大に祭を挙行している岩走神社。ここには、地元に残る下絵及び昭和時代の羽村提灯店の地口絵写真を参考にフォト・中村の中村清作さんによって描かれている一回り大きくて横長の地口行灯がある。その他、東秋留の二宮神社も新旧取り混ぜた地口行灯を見ることが出来るうえに、伝統ある花傘や、100年以上も前の地口行灯の古い木枠にも出会えるのがいい。



伊奈・岩走神社



留原・八坂神社



深沢・穴沢神社



ヨルイチ

その他、あきる野市内では、瀬戸岡・神明社と珠陽院周辺、油平・八幡神社、戸倉・神明社、草花・草花神社、旧五日市地区の夏の夜のイベント「ヨルイチ」等で見ることができる。

●青梅市の住吉神社と小曾木御嶽神社ほか

地口行灯を探し求めて多摩川の上流域まで溯り、青梅市に入った。神社の歴史と伝統では、式内社の虎柏神社や武蔵御嶽神社がある。虎柏神社は、「お諏訪様」の名で生まれ、今でも地口行灯を見るが、数は少ないし、武蔵御嶽神社にはない。

伝統ある祭礼としては、住吉神社を中心に行われる青梅祭がある。この住吉神社では、酉の市があり、数は少ないが、地元の氏子が地口行灯を描いているのみで紹介するには足りない。むしろ、住吉神社の裏手、宗徳寺ゆかりの妙見宮・西分神社の地口行灯に見るべきものがある。

さらに東に行き、勝沼神社にも地口ではないが地元の人たちが描く行灯が灯される。その他、隠れたところでは、塩船観音寺に近いところにある神明社。本格的な地口から子供の絵までいろいろ取り混ぜて見ることが出来、素朴なところがいい。

青梅市最東端の友田地区は、多摩川を渡れば、羽村市のため、羽村市と同じ地口行灯を使っている。友田から西へ、吉野梅郷のある柚木地区に入ると、木下八幡神社の関係者の中に地口絵を収集していた清水行彦氏が仲間とともに羽村の地口絵を参考に描き、祭に花を添えている。最北端の成木地区では、熊野神社の獅子舞や安楽寺の盆踊りにも行灯が登場する。

特筆すべきは、明治維新政府の目をかい潜って成木に牛頭天王社が残っていたことである。多くの神社が神様を牛頭天王から素戔鳴尊命に強制的に変えさせられてしまった時代があった。成木の牛頭天王宮は、まさに隠れた存在で、近くにある熊野神社に比べれば、素朴そのもので、そこに地口行灯が生き残っていたのは大収穫であった。



西分神社



成木・熊野神社境内社



勝沼神社



成木・牛頭天王宮





柚木・木下八幡神社

住吉神社・酉の市

塩船・神明神社

なお、小曾木御嶽神社及び西分神社の地口行灯については、別項目で詳しく紹介するが、近くには、小布市神社や虎柏神社があり、ここでもわずかながら地口行灯を見る。



小布市神社

虎柏神社（お諏訪さま）

虎柏神社の地口行灯

●その他の神社

多摩川流域から少し外れるが、同じ多摩地区で地口行灯を飾るところは、瑞穂町の須賀神社、武蔵村山市の日吉神社、熊野神社、東村山市八坂神社（天王さま例大祭）、野際神社、萩山八幡神社、清瀬市下宿八幡神社（とうろう祭り）、西東京市田無津島神社、東大和市の清水神社などがあるが、この中では、特に清水神社の地口行灯が注目に値する。なぜなら、この神社の地口を書いている峰岸人形店で特異なタッチで描いている峰岸さんの奥さんの絵がユニークでいい。ここには、古い下絵がたくさんあり、調査の必要があると思われたが、多摩川流域からややはずれるので次の機会に譲った。



写真：左から東村山市・八坂神社、萩山八幡神社、西東京市・津嶋神社、東大和市・清水神社

以上、都心から多摩地区に残る祭りや地口行灯を訪ね、さらに、江戸・東京の民俗や言葉の文化が多摩川をどこまで遡って行ったかを具体的に地域を特定して調べてみた。

羽村市の地口行灯

羽村（現・羽村市）は、江戸時代から玉川上水の取水口があった関係で人と人との交流があり、江戸・東京の文化が入りやすい環境にあった。

江戸時代以降、羽村→西多摩村→羽村町→羽村市と名称を変更してきたが、明治22年の町村制施行以後、自治体の面積は変わっていない。ちなみに、全国の市の中で7番目に狭い市域とされ、その中に阿蘇神社ほか3神社、禅宗の寺4寺院があり、提灯屋が2店あった。寺社と提灯屋とは、深い関係にあり、当然のことながら、地口行灯も扱っていた。平成のはじめまで営業していた羽村提灯店では、昭和30年代頃から地口絵の下絵をガリ版印刷で作成するようになり、大量の注文に応じていた時代があった。

現在、羽村市の場合、4月第二日曜日の祭礼の折、西から、松本神社、阿蘇神社、玉川神社、稲荷神社、五ノ神社、川崎神明社の各神社境内とその周辺の家々の庭先や玄関前に地口行灯を見ることが出来る。また、阿蘇神社では、10月1日の秋祭りにも境内に飾る。

地口行灯の呼称については、多摩地域のほとんどが「灯籠（とうろう）」というが、一般には、地口行灯と呼ばれ、祭りの宵宮には明日の祭りを待ちわびるように静かな中に楽しみな明るい夜を演出してくれる。宵宮という言葉も羽村の古老は、夜宮と言ひ、江戸時代に使われた言葉を使う。

地口とは一種の言葉遊びで語呂合わせや駄洒落を楽しむ。地口行灯には、面白い略画や文言を書いた絵紙を張って火を灯し、参拝者が歩きながら読んで解るようなものだった。しかし、時が変り今の時代、百科事典なしでは解読できなくなってしまったのが現実だ。

「だんご十五」＝三五十五（ $3 \times 5 = 15$ ）のように簡単なものから、人形浄瑠璃や歌舞伎の知識がないと元になった言葉やフレーズが判らないものまでいろいろある。さらに突き進めて調べていくと、元句になったと思われる出所なり出典が複数あり、どちらとも決めかねる場合もあり、答えは一つとは限らない。

ところで、地口行灯の絵の上部に赤や青の波線が描かれているが、これは、「瓶垂れ霞（かめだれがすみ）」（写真）と名付けられている。台所の片隅などで見かける瓶に描かれている黒い墨を垂らしたような模様に見えるからだ。行灯効果を高めるための装飾的なものと考えられ、古いものは、赤一色、新しいものでは緑色や色水を噴霧したものもある。



地口行灯は、現在でも国立市や小平市等の北多摩と羽村市や青梅市、あきる野市等の西多摩地区に色濃く残っている。かつては、各地域に提灯屋があり、祭礼用の地口絵紙を供給していたが、羽村市域では、羽村提灯店の廃業を最後に供給者はいなくなった。

その後、羽村提灯店の羽村盛雄氏から羽村市シルバー人材センターに48枚の地口絵原本のコピーが預けられたのを機会に、人材センターに登録している絵心のある人がコピーしたものに色彩を施し、売り出すようになり、現在に至っている。

羽村提灯店の資料については平成6年に、娘婿の西尾行夫氏から提灯製作資料とともに地口行灯関係資料658点が羽村市郷土博物館に寄贈された。この資料は、地口絵とその下絵を中心に、色見本帳や部分絵の見本などである。これらの資料の中には、江戸時代から明治、大正、昭和までの時代を反映した地口や各種の川柳が数多く含まれている。

以下、地口文の読み方から元句調べに至るまでを50音順に記述するが、原画と行灯は、カラー写真。下絵は、モノクロ写真で掲載した。

1. あいた口へおかもち

元句：あいた口へぼたもち



「岡持ち」と書く。取っ手の付いた蓋付きの桶で今でも寿司屋が出前に使っているのを見かけることがある。開いた口に岡持ちが入るはずはないが、「おかもち」と「ぼたもち」の語呂合わせが笑いを誘う。

左側の絵は、昭和時代のもので、着物の模様の特徴がある。右側の絵は、ごく最近のもので地口紙の貼り方も従来のものとは異なっている。古くは、一筆斎英泉の「じぐ地あんどろ」（天保13年・1842）に同じ文言がある。

2. 暁に祈る 武運長久

元句：祈願文言



第一次世界大戦へ突き進まんとする昭和15年（1940）、当時の陸軍省馬政課が作った軍馬PR映画の題名が「暁に祈る」。同名の主題歌は戦時歌謡として大ヒットしたもののひとつ。「あゝあの顔であの声で 手柄頼むと妻や子が ちぎれるほどに振った旗 遠い雲間にまた浮かぶ」という歌詞は戦中派にとっては懐かしくも悲しくもある歌だ。敗戦色濃く濃い昭和10年代後半、出征兵士を送る際に歌われ、「武運長久」の文字には励ましだけでなく、どこか寂しげなものを感じた人もあったという。地口行灯にも戦時色が蔭を落としていた時代があった。

3. あくび千里

元句：悪事は千里を行く



あくびと悪事とでは、まさに天と地の違いがある。そんなところが地口心を搔き立てられる。

中国、北宋時代の10世紀頃の人・孫光憲が著した唐時代以降の逸話集『北夢瑣言』に「好事不出門 悪事行千里」（好事門を出ず、悪事千里を行く）とあることから、一般的には、「悪事千里を走る」という使い方が多い。ほかに、「欠伸三里をそしる」（ぢ口あんどん）という地口もある。

4. 朝顔につるべとられてもらいみず

俳句：加賀の千代女



多摩地域の地口行灯の特徴として川柳が混じるとされるが、これは、加賀の千代女の名吟を書いたもの。しかも旧仮名遣いではないところが多少気になるが、後年、現代仮名遣い書きかえられたものと思われる。ここでは、美しい俳句に対して滑稽に描かれた男が朝の歯磨きをしているというところが笑いを誘う。

羽村は俳句が盛んだった所なので川柳に混じって、俳句もどきの地口や宝井其角など俳人の名前が地口に見受けられる。

なお、この下絵は、文言が鉛筆書きのため、不鮮明で読みにくい。

5. 朝顔の手入れはめしの出きるまで

川柳



早起きの好々爺の姿が目浮かぶ一句。これは、新聞や雑誌等に掲載された川柳記事を羽村提灯店の主人が地口行灯用に選び出したものと考えられる。羽村市郷土博物館に寄贈された地口行灯関係資料の中に雑誌『家の光』など、川柳を載せた雑誌が何部かある。

6. 朝顔は朝寝の人にしかみつら

早寝早起医者いらず

川柳と諺



前の句と同じだが、朝寝の人に「しかみつら」とは、日が当たりはじめて花がしぼんで来た状態をうまく表現している。「早寝早起医者いらず」は、地口文としては、蛇足そのもの。

7. 朝湯ハ其日の行水だ

元句：朝湯はその日の行水だ



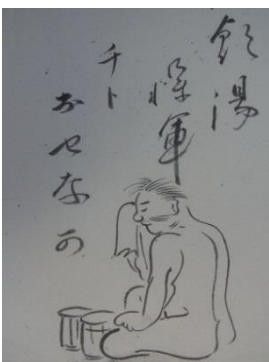
読み方：あさゆはそのひのぎょうずいだ。

「朝湯を使う」という言い方がある。もはや死語に近い言葉だが、行水が当たり前だった時代でも女性の朝湯には話題性がある。しかも、この絵では、女性が前向きに描かれているが、男の絵は「朝湯將軍ちとお背中を」の木曾義仲のように後ろ向きが無難。

福島県会津地方の民謡「会津磐梯山」の歌詞にある身上をつぶしたという小原庄助さんは、朝湯もその一因だったようだ。

8. 朝湯將軍ちとお背中

元句：朝日將軍 木曾義仲



読み方：あさゆしょうぐん ちとおせなな。

木曾義仲は、平安時代の末に倶利伽羅峠で平維盛を破って平家を京都から追放し、征夷大將軍に任ぜられ、朝日が昇るような勢いだったことから、朝日將軍の異名がある。

江戸時代の地口絵手本には、①朝湯賞観ちとお背中（滑稽地口鈍句集）②朝湯賞翫ちとお背中（初編似口絵手本）③朝湯相伴些お背中（じぐ地あんど）などの文言がある。

ちなみに、武勇伝で知られる巴御前は、木曾義仲の妾。

9. 足の蚊へ気をとられてる電話口

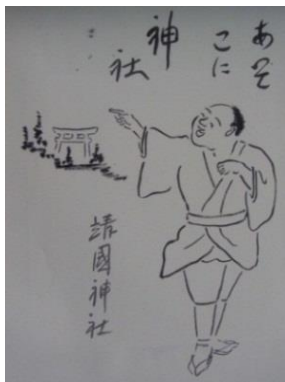
川柳



電話関連の地口としては、電話回線開通後、間もないと思われる「電話急げ（善は急げ）」があるが、足にたかった蚊を気にしながらの電話は、かなり普及後のものか。それにしても今にして思えば、ダイヤル式以前の交換台方式の電話を知る人は少なくなってしまった。この地口絵は、羽村市内では見ることはないが、隣接するあきる野市草花神社の祭礼時に見ることができる。

10. あそこに神社

元句：靖国神社



靖国神社の歴史は、明治2年（1869）、東京招魂社に始まる。明治12年（1879）に靖国神社と改称。それまでの招魂社という名前から改称当時、物珍しさからこんな言葉が生れたものと思われる。

明治18年発行の地口繪本〈東京地口〉には、「あそこに巡査」というものもある。日本各地にあった招魂社も昭和14年に護国神社と改称されているが、「招魂社」の名を知る人は意外と多い。

靖国神社と言えば、閣僚の参拝で問題視されることが多々あるが、桜の名所でもあり、東京の桜の開花宣言で話題となる桜の木がある。

11. あたり見廻し粋な所を娘あげ

川柳



辺りを見廻すということは、人目をはばかりなのか、それとも人目を意識しているのか、微妙な女心は計り知れないものがある。本を読みながらの行為だとしたら、源氏物語から江戸の浮世草子まで思いを馳せるだけでも気が気でないものがある。

12. 兄がかたぎで身をせめる

元句：姉は宮城野 妹はしのぶ



地口絵から想像できることは、堅気の兄が吉原の傾城になった宮城野を論しに訪ねたところかもしれない。

宮城野信夫の詳細は「姉のみやげを妹がしめる」を参照のこと。

13. 姉のみやげを妹がしめる

元句：姉のみやこを妹がしめる



安永9年（1780）1月に浄瑠璃、続いて4月には歌舞伎でも上演され、「姉は宮城野 妹はしのぶ」のフレーズで有名になり人気を博した。姉の宮城野は吉原の傾城。妹のしのぶは田舎娘。姉妹で父の仇討を果たす物語。宮城野しのぶの地口は、意外と多く、青梅市成木の熊野神社の祭礼に「みやげのしのぶ」というのがある。ここ羽村市の地口では、姉のみやげ（姉の都帯）を妹がしめるというもの。

羽村市には、「姉のみやこを妹がしめる」という地口があり、姉の都帯を妹が締めるという意味だ。人形浄瑠璃「碁太平記白石噺」の角書に「姉は宮城野 妹はしのぶ」とあり、作者は、紀上太郎、烏亭焉馬、容揚黛の合作。由井正雪の慶安事件と当時11歳と8歳の姉妹が苦難の末、父の仇を討ったという実話をもとに脚色したもの。姉の宮城野は吉原の傾城。妹の信夫は田舎出の娘。浄瑠璃や歌舞伎では、正雪事件よりも姉妹の仇討に重きがおかれ、別称の「宮城野信夫」が一人歩きしている感が強い。

14. あみに千鳥

元句：なみに千鳥



波にもいろいろ、漣（さざなみ）から津波（つなみ）まで。千鳥との組み合わせでは、青海波が良く似合う。手ぬぐいの模様にもある青海波。最近、セイカイハと読む人がほとんど。我が家のパソコンは、お馬鹿さん。「おばかさん」と打つと「おば加算」と答える。もちろん、青海波も知らない。正解は、セイガイハ。

15. 雨も降り風もふけふけ花の留守

川柳



花とは、奈良平安の時代から桜の花を指す。この川柳でも同じこと。この男は、留守居役になってしまったのか、花見に行けず、雨よ降り降り、風よ吹け吹けとやけっぱちになっているようだ。

16. あほうは寝てまつ

元句：果報は寝て待つ



因果応報という言葉や、同じような諺で「待てば海路の日和あり」というものもある。やるべきことは、全てやった後、寝て待つのが常道。阿呆は、ただ寝て待つからいつまでたっても阿呆そのもの。

話は違うが、木曾五木の一つでアスナロは、努力して「明日は檜（ヒノキ）になろう」とがんばる。

17. あやしいもゝだ

元句：あやしいものだ



怪しい桃とは、どんな桃？ 侍風の男が巨大な桃を前にして刀を手に身構えている。中身は爆発物か何か仕掛物か、まさに怪しい桃だ。

ここで、現代版の怪しい桃の話題をひとつ。先日猛暑の中、山梨県へ食べ放題の桃狩りに行った。気がつくと、付近では、蟬が一匹も鳴いていない。羽村市とは大違い。病虫害防除用薬剤で蟬も死滅したとしか考えられない。桃を思い切り食べられるのも1年に1回だけだから……と自分に言い聞かせてしっかり食べてしまった。原発のセシウムも怖い、プラムボックス病対策過の薬剤入り「あやしい桃」だったのかもしれない。

18. アラ ぬっさっさ

掛け声



この掛け声は、ご存じ島根県出雲地方の民謡『安来節』。おなじみの「どじょうすくい」で知られ、大正時代に広く謡われるようになったという。羽村市に残る地口の多くは、大正期のものが目につくようだ。

なお、この地口絵は、あきる野市の岩走神社で復元されているが、現在、羽村市内で見ることにはできない。

19. 新世帯うしろ鏡を亭主もち

川柳



「しんじょたい」とも読むが、ここでは、大正～昭和を意識して「あらじょたい」と読む。絵にある二人は、着物姿で大正～昭和時代が反映されている。このような場面は、新婚時代には誰しも心当たりがあるやも知れず。時代は変わっても何処も同じ秋の夕暮れなのか。

20. 新世帯大風呂敷の市戻り

川柳



読み方：あらじょたい おおぶろしきの いちもどり。

「買い出し」。戦時中の言葉だが、こんな言葉を知る人も少なくなった。ここでは、新婚さんが大きな風呂敷に家財道具を買い込んで帰ってくる風景。見た目、二人ともそれほど若くは見えないが、和服姿で男性は、山高帽子に外套を着ている。下駄ばきで奥さんの後から所帯道具を持たされて歩く姿は、もう既に尻に敷かれている様子が見てとれる。

21. あんじるよりもふぐがやすい

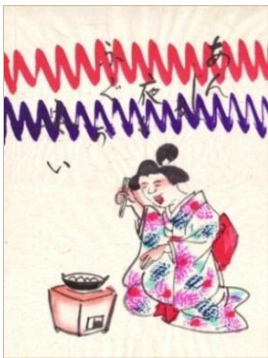
元句：案じるよりも産むがやすい



すべて、平仮名で書かれているが、漢字仮名交じり文に直せば、「餡汁よりも河豚が安い」となる。そもそもの元句は、子供が生まれるまでいろいろと心配するよりは、生んでしまえば何とかなるということから、あれこれ悩むより実行するほうが意外とたやすいという例え。

22. あんじる夜もふぐが安い

元句：案じるよりも産むが易い



餡汁よりも河豚が安いという意味。

あんじる(案じる)よりも餡汁と解したほうが面白い。ふぐは魚の河豚。食用の河豚と餡汁を較べたら、実際には、河豚が高そう。

一般的に言われていることわざは、「案ずるよりも産むが易し」。弘化4年の『地久知画でほん』に「寒じる夜にふぐがやすい」というのがある。羽村市内にある阿蘇神社に残る地口行灯には、「あんず(杏)より梅が安い」というのがある。

23. 案じるよりもふむがやすい (絵を欠く)

元句：案じるより産むが易い

24. あんずより梅がやすい

元句：あんずるより産むがやすい



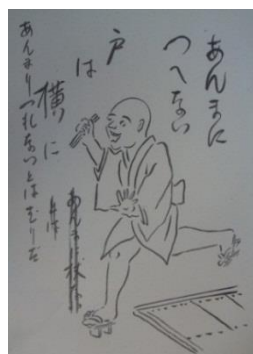
一般に、案ずるといふ言い方が多いような気がする。この場合、生のままの杏と梅を比較することになる。左の絵は、梅干しが描かれているが、これは市のシルバー人材センターが請け負って絵心のある人に描いてもらったため、梅=梅干しとの思いこみから描いた平成時代のもの。右は、昭和時代に描かれたプロの作品のため、青梅が描かれている。

25. あんまに杖ない戸は横だ

元句：あんまりつれないとはむりな

26. あんまにつへない戸は横に

元句：あんまりつれないとはむりだ



盲目の按摩、今で言う盲目の針鍼灸師。釣れないという意味と、連れがないの意味と、むごいとか薄情なという意味のつれないの三つがある。ここでは三番目。元句があんまりとあるから、按摩としたもの。江戸期の地口では、戸は横=胴欲としているが、羽村の地口では、無理と読み解いている。

27. あんまはうの上手

元句：あんま針の上手



現代では、差別につながるので使われない言葉だが、江戸時代には、意外と登場する按摩さん。手探りで這うのが上手と針灸師として針を打つのが上手とをかけたもの。

28. いい暮らし裸で嫁が天下り

川柳



昨今の天下りと言えば、役人天国・国家公務員から村役場のお役人までピンキリと言われているようだ。

大正時代、こんなことが話題になるほどだったのだろうか。いわゆる玉の輿という言葉が当たるのかもしれない。

29. いゝ声で来た新内の眼が一つ

川柳



こんな地口が罷り通っていた時代があったとも思えないが、眼が一つとは、何を意味しているか、解釈に苦しむ。

ちなみに、新内とは、浄瑠璃の一流派で心中道行物を語りながら町を流し歩いたので『新内流し』とも呼ばれた。

30. いかにかの身がかまじゃとて

元句：いかにこの身が海女じゃとて

一字違いでも鎌と海女では、大違い。

在原業平の兄、在原行平を慕う海女の松風・村雨姉妹の物語が出典。能にはじまり、浄瑠璃や歌舞伎にもとりあげられ、長唄「汐汲」にも「いかに此の身が海女じゃというて辛気辛気に袖濡れて……」とある。

加藤福次郎編の地口行燈語呂合には、本文（元句）は、「いかに此身があまぢやと云ふて」洒落（地口）は、「碓りおもみが鉄ぢやといふて」とあり、四方赤良の作となっている。

惜しいことに、この地口は、文言のみで絵を欠く。文言と絵が揃っているのは、あきる野市留原の八坂神社に残されている。

31. 粹な世界にわしや隅田川ぬしのお顔を都鳥 都々逸



この句は、まともな句で本来の地口なら隅田川→炭俵になるはずだが、七七七五調の都々逸である。このように、都々逸も身近にあったためか、地口の恰好材料として登場してくる。

32. 活けまして結構な花 元句：明けまして結構な花



読み方：いけましてけっこうなはな。
 地口としては、入門編。子供にも分かりそうな幼稚なものでも地口絵が不足を助けている。このように、羽村提灯店の地口は、身近な生活の中からテーマを取り上げたものが、目にとまる。

33. 生花をかへるの様な身ぶりで見 川柳



活花とも書くが、生きた草木の花を水鉢に挿して床の間や玄関などに飾る。床の間の前で手を着いてしげしげと眺めたり、ほめたりする様子をカエルの様と言ったもの。室町時代の人・山崎宗鑑は「手をついて歌申あぐる蛙（カワズ）かな」という面白い句を残している。
 ちなみに、寺社建築などにみられるカエル股とは、装飾を兼ねた補強材でカエルが前足を広げたように見えるので、この名がある。

34. 意見するのもお前のためよ 末をおもふておたしなみ 都々逸



七七七五調の都々逸風ことわざ「親の意見と冷酒は、後から効く。」と同じことを言っているようだ。絵にある男は、意見する側。今では、敬遠される嫌煙家の目の仇・煙管と煙草盆が描かれている。
 「親の意見と茄子（なすび）の花は、千に一つも無駄はない。」ナスの花は実付きがいいのでこのようにいうが、親の意見もしかり。

35. 異国の旗も風次第

元句：地獄の沙汰も金次第



日本人が異国を意識したのは、ペリー来航以来のこと。ここでは、幕末から明治にかけて米英露など各国が公使館を置くようになり、庶民が外国の旗を目にするようになった明治時代と思われる。「地獄の沙汰も金次第」という言葉が死後になりつつある現代では、元句を思いつく人は少ないようだ。ちなみに、死者に六文銭を持たせるのは、三途の川の渡し賃が片道六文とされているから。ところが、あの世でもこの世と同じようにもっとお金を積んだら閻魔様は、極楽行きを認めてくれるかも、と思うのは赤坂ならぬ、浅はかな考え方といわざるを得ない。

36. 医師様あきのつき

元句：石山秋の月



読み方：いしさま あきのつき

近江八景のひとつで名月観賞の景勝地とされる石山寺。琵琶湖南岸の近江地方の景勝地八景を選定したもので、元はといえば、中国流の八景をヒントにしたもので日本では、〇〇八景の先駆的存在。安藤広重の浮世絵『近江八景』のなかに「石山秋月」がある。

37. 医者とり大手

元句：飛車とり王手



医者と飛車をかけたところは、誰にでもすぐ分かる。将棋の世界では、よくある手だが、将棋を知らない人にとっては、王手の意味も判らないかもしれない。

描かれた大きな手、医者イメージを出すため、眼鏡をかけ、驚いた拍子に飛んだ帽子。洋風を装いながらも着ているものは和服。大正時代の雰囲気を感じさせる。

38. 板きりむすめ

元句：舌切り雀（地口絵を欠く）

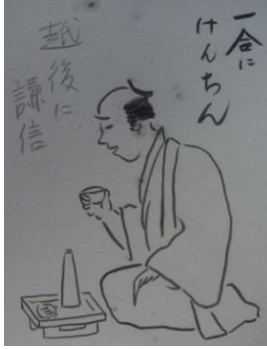


った絵は残されていない。

板は、板でも看板娘でもあるまいに、「むすめ＝雀」の共通点を思い浮かべてニヤリとする人は、地口の解る人。

左の絵は、あきる野市岩走神社の地口行灯。これを描いたあきる野市伊奈在住の中村清作さんは、羽村市の地口絵(西多摩での呼び名：とうろう絵)を参考に描いたとのこと。現在、羽村市内に元とな

39. 一合にけんちん



元句：越後に謙信

一合→越後、けんちん→謙信。現代の若者の中には、この四つの意味を知らない人もいたようだ。けんちん（巻煎・巻織）にも種類があり、ここでは、ごく当り前のけんちん汁のこと。一合から越後を連想し、越後から上杉謙信を思い浮かべることができれば、正解。

ちなみに、けんちん（巻織）汁とは、油で炒めた根菜類とくずした豆腐を入れた澄まし汁のこと。その昔、禅僧が中国からもたらしたとされている。

40. 一日の仕事たのもし野の夕辺

標語



生活密着型地口で、これも国策としての農業振興、まじめな日本人の育成、さらには、富国強兵への道筋につながって行ったのかもしれない。明治、大正、昭和と、世相を敏感にとらえてきた羽村の地口行灯の一端が窺える。

41. 一寸先はあみの世

元句：一寸先は闇



読み方：いっすんさきはあみのよ。

真っ暗闇の中では何も見えないことから、これから先、まったく予測がつかない場合などに使う言葉。闇の世を網の世にかけたもの。

ところで、世の読み方について、世論調査（よろんちょうさ）をセロンと読む政治家や学者の意外と多いことが気になる。元国立国語研究所長の岩淵悦太郎氏が嘆いていた。元の字をたどれば、輿論だったと。輿→世と読み替えたため誤読が生じたのだ。

42. 一寸先は雨の夜だ

元句：一寸先はやみの世だ



この地口は、夜と世を掛けたもので番傘を手にした男のスタイルは、散切りから抜け出したものの着ているものは旧態依然としている。手に持つ番傘も時代を象徴している。

43. 壺本もなひに志田ばを入たがり

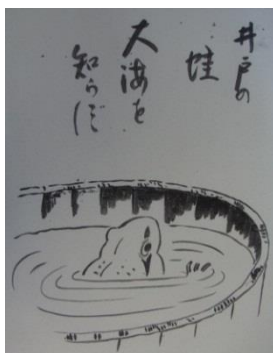
元句：不詳



この老人の絵から、想像できることは、「壺本もなひ」とは、歯が一本も無いということか。「志田ば」とは、下歯と思われる。しかしながら、地口本来の隠された元句に到達できない。

44. 井戸の蛙大海を知らず

元句：井の中のかわず大海を知らず



荘子の言葉「井蛙は以て海を語る可からずとは、虚にとらわれるれば也」「井の中の蛙大海を知らず」と訳した人に敬意を表したい。日本語は、いろいろな言葉や文字に訳せるが、このような簡潔で分かり易い言葉だからこそ、慣用句として日本に根付いたと言えよう。

描かれている樽のようなものは昔の井戸。多摩川から引き込んだ玉川上水の水が江戸に行き着くところには簡易な井戸。これが桶屋職人らが作った木を伐りつぼめ、板をつなぎ合わせた井戸枠なのだ。

45. 田舎物時計見物

元句：田舎者都会見物



振り子時計が描かれているので、明治時代以降のこと。杖をついた腰折れ老人は、わらじ履きで都会(東京)見物に。明治時代に、玉川上水の役人が東京に出掛け、新宿追分で追いはぎが出たという話がある。まだ新宿は都会ではなかったようだ。

46. いなりのおばさんお茶あがれ

元句：隣のおばさんお茶あがれ



子供の頃、「隣のおばさん、ちょっと来ておくれ、鬼が怖くて行かない、お釜かぶってちょっと来ておくれ」と遊んだことを思い出す。この地口絵は、羽村提灯店で描かれたものだが、羽村市内松本神社で使用後、剥がして保管してあるものの一枚。

地口行灯の始まりは、稲荷神社ゆかりの初午行事に起源があるという。そのためか、地口行灯によく狐が登場する。狐忠信、お狐八寸飛び、狐の読売等々。

47. 今坂喰うも口なれど

元句：今更いふもぐちなれど



読み方：いまさか くちなれど
ぐちも口も出どころは同じ。ここで言う「今坂」とは、今坂餅のことで七五三の祝いに贈答用として庶民には親しまれていた食べ物で今坂というだけで誰にでも理解できたもの。

48. 植木売りよくとなさけで水をやり

川柳



川柳だから許せるが、欲と情けだけでは商売は成り立たない。欲とは、欲が深い欲でもあるし、意欲と言えば、前向きにも取れる。近年は、ボランティアでさえも情けだけでは遂行しきれない時代だ。

49. うさぎ川ならすそまでまくれ

元句：浅い川ならすそまでまくれ



地口絵は、着物姿のウサギが川を渡ろうとしているが、会津民謡にある「浅い川なら腰までまくり、深くなるほど、エー、また帯をとく」と同じ意味合いを持つものと考えられる。深読みすれば、浅い川なら＝浅い仲なら、深くなるほど＝深い仲なら、と読み取れる。もう一枚の元絵には、「ひざまでまくれ」とあり、ウサギの脛毛が描かれているが、その昔、今昔物語に久米仙人は、空を飛びながら女性の白い脛を見て失速して落下したという。

50. うさぎの文字つき

元句：うさぎのもちつき



他愛ない地口ではあるが、子供には受け入れられそう。イギリスの絵本作家ビアトリクス・ポターのピーターラビットで育った子供も少なからずみて見ているはず。

思えば、ウサギと日本人の出会いは、その昔は月に住み、里山では、うさぎ追い、戦後はラビットに乗り、子供はピーターラビットで育った。

51. 臼から出たまぐろ

元句：うそから出たまこと



元句を解説すると、はじめは、嘘や冗談で言ったことが、結果的には、真実になってしまうことを言う。

臼からマグロが飛び出すとは、大嘘なれど、楽しめる地口だ。地口絵のない「まこも」が分かりにくい。沼沢に群生する水生植物で葉はむしろ(敷物)に、果実と若芽や食用にする。

52. 転た寝の頬へ畳の型がつき

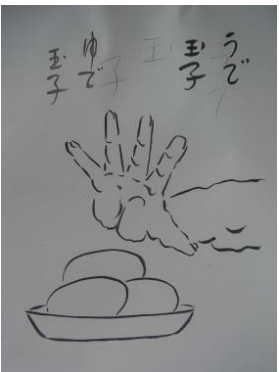
川柳



生活感たっぷりで誰にでも記憶にありそうな場面。多摩地区の地口行灯に特有の川柳が多く見受けられるが、羽村提灯店の地口関係資料の中には、雑誌「家の光」の川柳コーナーの切り抜きが大量にあり、常々川柳については、気遣いしていたことが分かった。

53. うで玉子

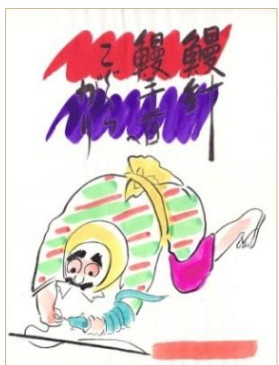
元句：ゆで玉子



大きな腕に三つの卵、ただそれだけのことに過ぎないが、迫力がある。卵を玉子と書いてあるのには、時代を感じる。大きな手が今にも掴まんとしているのは、これまた大きな卵。ゆでるとは、茹でるとも書くが、なかには、うでると発音する人もあり、国語辞典には、しっかりと掲載され、市民権を得ている。

54. 鰻針鰻手首へこぐらがり

川柳



「こぐらがり」とは、乱れからまることで、「こんがらかる」と同意。羽村では、多摩川でウナギを捕るときに地獄針と言って太い木綿糸にウナギ捕り用の釣り針にドジョウやミミズを餌にして数日間ウナギが居そうな深みに仕掛けて捕まえた。そして、仕掛けにウナギが掛かったときなど、暴れまわるウナギの姿は、糸に絡まり、捕まえようとする手からのりくらりと逃げまわる。まさにこの様子を川柳にしたもの。

55. うぬ惚れをやめれば外にほれてなし

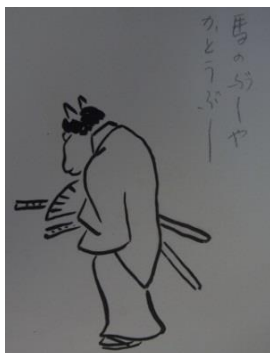
川柳



惚れた腫れたとは、若かりし頃のこと。色恋に気をとられていた頃がなつかしいの一言。

56. 馬のぶしや かとうぶし

元句：真の武士や黒田節



馬のぶし=真の武士 かとうぶし=黒田節、と考えれば、黒田節の一節“これぞまことの黒田武士”が思い浮かぶ。しかし、江戸時代に流行った河東節も視野に入れると、馬のぶし=馬の鯉節 かとうぶし=河東節とも考えられ、可能性を否定できない。

河東節は代表的な江戸浄瑠璃の一つで江戸太夫河東（1684～1725）が創始者。幕府公認の吉原遊郭との関わりも深く、富裕層に愛好された。

57. 馬の耳に念佛

諺（ことわざ）



馬が耳をそばだてている。手前に描かれているのは、木魚。まさに馬と念佛をイメージできる木魚からこのことわざが連想できる。しかし、実際のところ、馬は人間の言葉を理解できないし、馬耳東風とはよく言ったもの。馬の名誉のために言わせてもらえば、犬に論語、兔に祭文、牛に経文などみんな同じ意味。

58. 梅見りゃほうづがない

元句：上を見れば方図がない



ここでは、盆栽や庭木の梅を想像しても何の意味はなく、梅と上の語呂合わせすぎない。方図とは、際限とか範囲の意味があり、野放図とか方図が無いなどという言い方がある。

今では「上を見たらキリが無い」などと使うことが多い。

59. 運動とやらで一時若夫婦

川柳



読み方：うんどうとやらで いっとき わかふうふ
 生活密着型地口の一つ。運動と称して歳甲斐もなく和服でダンスができる時代が到来した。これは、大正時代の世相をとらえた祭の地口。

60. 衛生だかたき打つ気で蠅をとれ
 61. 衛生だ蠅を見たらばとりませう

標語
 //



この川柳も大正時代のものと思われるが、戦後の昭和 20 年から昭和 30 年代前半の同じようなもの。戦後、DDT や BHC などの有機塩素化合物を何の予備知識もなく使っていた時代があった。蚤、蚊、蠅退治に躍起となっていたとき、頭から DDT 粉末を浴びた経験者も多いはず。

62. 栄養の料理に妻は余念なし

川柳



大正から昭和にかけてラジオでも盛んに料理番組を放送し、いろいろな献立を募集したり、紹介していた。特に新妻にとっては、毎日の献立に気を使ったものと思われる。

63. 枝ばかり手にほろ酔いの花戻り

川柳



花といえば桜、さくらといえば酒。良寛和尚の歌「今日もさけさけ明日もさけ」を思い出す。地口絵からは、花見酒でほろ酔い気分を通り越して酔っ払いが桜の枝を折って担いで歩いているうちに花びらが散ってしまい、枝だけを持ち帰ったというもの。

64. 恵比寿だいこを食ふ

元句：恵比寿大黒



読み方：えびす だいこをくう。

七福神の中でも口に出して言い易く、恵比寿大黒がワンフレーズの様
聞こえるほど親しまれているお二人。恵比寿さんは、にこにこ顔で商売繁
盛を、打ち出の小槌と米俵がトレードマークの大黒さんは、大国主命と習
合し、恵比寿さんとともに台所などに祀られている。

なお、恵比寿が大根をくわえている地口絵は、各地各様である。

65. 絵馬あげ願ほどき

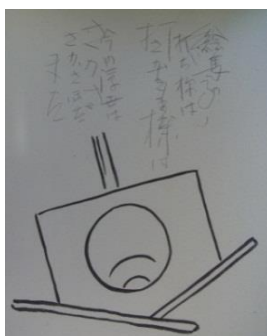
元句：胡麻あげ雁もどき



山崎美成（1700～1750）の随筆「三養雑記」〈天保 10 年・1850〉に「絵
馬あげぐわんほどき 胡麻あげ雁もどき」と地口と元句を紹介している。
がんもどきは、胡麻油で揚げたものが最上品とされていた。願ほどきとは、
神仏に願掛けして願いが叶うとお礼参りと称して絵馬を奉納して願解きを
することをいう。願ほどき＝願解き＝願い事が叶うと絵馬を奉納して願解
きする。がんもどき＝雁擬きは、雁の肉と同じくらい美味しいので、この
名があり、豆腐と細切れ野菜を混ぜて油で揚げたもの。油揚げのなかでも
胡麻油揚げが美味。

66. 絵馬の打ちようはさかさまだ

元句：今の浮世はさかさまだ



絵馬をさかさまにして、今の浮世を強調したところが面白い。絵馬奉納
の歴史は古く、その昔、馬を奉納して神様に乗って来てもらい、願いを叶
えてくださいと願った。その後、経緯はともかく、いろいろあって馬の絵
を描いて奉納するようになった。馬は神様の乗り物なのだ。だから、絵馬
の馬に乗って私の願いを叶えてくださいと願うもの。

67. 宴会は思はぬ人が唄い出し

川柳



どこにでも隠れた存在の人がいるもの。普段はおとなしくて、宴席で歌
を唄えるとはと周りの人がびっくり。これこそ、想定外ということか。

68. 縁日の角帽時事を憤り

川柳



かつては、どこにでもいた意気に感じた学生。平成時代には見たこともない。早慶戦で見た早稲田精神高揚会応援団の学生たちの姿が目につく。しかし、縁日で意気揚々と時事を語る学生は、昔語りとなってしまったようだ。

69. 縁の下の力持

諺（ことわざ）



縁の下に隠れるように大男が横になっている。縁を支えているのだろうか。この句は、そのまんまことわざだが、見た目子供にも分かるような単純なもの。

70. おいしくば尋ねきてみよ

元句：恋しくば尋ね来て見よ和泉なる
信太の森のうらみ葛の葉



「恋しくば」というところを「おいしくば」としたところから、名代くず餅の旗をかかげ、甘いもの好きの女性を描いたもの。元句の作者は平安時代の陰陽師・安倍清明。浄瑠璃や歌舞伎で一世を風靡した物語。地口絵は、葛の葉から葛餅を連想し、「名代くず餅」の絵柄がきいている。「うらみ」とは、葛の葉の性質から風に吹かれて裏を見せるので「恨み」にかけたもので、奈良・平安時代の恋の歌に多く見受けられる。元はといえば、浄瑠璃や歌舞伎で有名になった信太の森に棲む葛の葉狐の物語。安倍清明を主人公にしたとされているが、現在の大阪府和泉市に信太の森があった。

71. 老いては火にしたがへ

元句：老いては子にしたがえ



これからの世の中は、超高齢化社会へ突入しつつある。古今東西、いつの世も諺に、戒めに「老いては子にしたがえ」とはよく言ったもの。そして、寒い冬には、焚き火や炬燵、火鉢が年寄りにはありがたい。そこで老いては火にしたがえと地ぐった。

72. 老いも若きも花ざかり

川柳

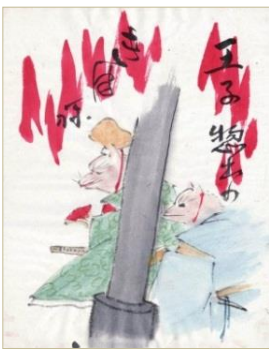


羽村市内にある八雲神社の祭礼は桜の季節に行われる。祭に繰り出す老いも若きも、まさに花盛りの中、祭を楽しむ。

羽村市内の六つの神社は、4月第2日曜日が例祭日。民家の玄関前に前日の宵宮から地口行灯が飾られる。その数は、100点を超え、恐らく多摩地域最多の数と思われる。羽村生まれの80歳代以上の多くは、宵宮を夜宮、地口行灯を灯籠と呼び慣れている。

73. 王子惣でのき津祢

元句：王子惣司のきつね



王子稲荷には、関東三十三ヶ国から大晦日の夜、狐火とともに狐が大集合するという言い伝えがある。それゆえ、関東惣司の稲荷神社を語り、時の幕府のお役人からクレームをつけられたという。そのようないきさつから惣司を総出と地ぐったもの。さらに王子の狐を有名にしたのは、歌川広重が大晦日の狐火を描いた浮世絵。現在でも大晦日～元旦かけて王子稲荷の氏子が狐の姿に扮装してイベントを盛り上げている。

74. 王手嬉しや別れのつらさ

元句：逢うて嬉しや別れのつらさ



夕涼みの縁台将棋の時代から、今やコンピュータ将棋の時代へと様変わりした今日この頃。勝負の世界は、相も変わらず厳しい。「王手は追う手」ならよいが王手をかけても逆襲にあい、挙句の果ては、「使い果たして二歩〈二分〉残る」では情けない。

75. 大かぶもち

元句：大株持ち



大きな蕪が描かれているが、大株持ち＝大株主を同じ音のカブで表現しただけの話。地口行灯は、言葉よりも絵で楽しむこともできる。現在、左の絵が使われているが、右の絵もなかなか味がある。

76. 大かめもち

元句：大金持ち



大甕もお金も誰もが手にしたいもの。大甕があれば、大金も貯められる。単純な地口ではあるが、縁起物として祭りには欠かせない一枚。欲張れば、「大かぶもち」の地口行灯とセットで飾りたいもの。ちなみに、羽村市の民家では、祭の日、玄関前や門前の左右に一对飾る風習がある。

77. 大きさの見本手真似が延び縮み

川柳

78. 大きさの見本手まねがのびちぢみ

川柳



左側の絵が古く、リアルに描かれているが、右側の絵は、簡略化して描いたものと思われる。二本の縦じまや渦巻き模様の着物の柄は、所沢系の地口絵に類似している。

79. 大きなわんくらわし

元句:大きな腕くらわし



大きな碗を抱えて右手を振り上げ、一発食らわそうとしているかに見えるが、実は、大きな番狂わせを意味しているという。しかし、鉛筆書きの元句「大きな腕くらわし」では、まさに腕力を振ってお碗を叩き壊そうとしている図だ。弘化4年の「地久知画でほん」に同じものがあるが、元句に対する見方が異なっている。

80. おゝぎのおかね

元句:ほうびのお金



「扇のお金＝近江のお兼」 あの手持ちのお兼を連想するのが本来かと思われるが、ここでは、元句を褒美のお金としているところが、現実的でそれもまた良し。この絵からは、どちらを地口とみなすかで意見が分かれる。多くの場合、右側に濃い文字で地口、左側に鉛筆書きで元句が書かれているが、ここでは、ほぼ真ん中にやや大きな文字で「ほうびのお金」とある。そして、扇には小判らしきものが描かれている。歌舞伎や浄瑠璃で有名になった近江のお兼から派生した地口とも考えられる。

81. おゝぎの黒いのに白ら帆が見へる

元句：沖の暗いのに白帆が見へる



江戸端唄『かつぼれ』の冒頭に「沖の暗いのに白帆が見ゆる」という歌詞がある。まさに、この「かつぼれ」が元句となっている。江戸時代の後半、座敷芸や大道芸でおなじみとなり、さらには、歌舞伎にも取り入れられ、だれもが口ずさむようになった。「カッポレ、カッポレ、甘茶でカッポレ」などという。思い出すに、明治時代、民俗学者の柳田国男が学生時代に奥多摩の鳩ノ巣の山の上から羽田の沖の帆が見えた『後狩詞記』(1909年)に記しているが、明治時代には、東京湾に浮かぶ舟の白い帆が見えたらしい。もちろん、望遠鏡か双眼鏡で見たと思われる。

82. 扇八景

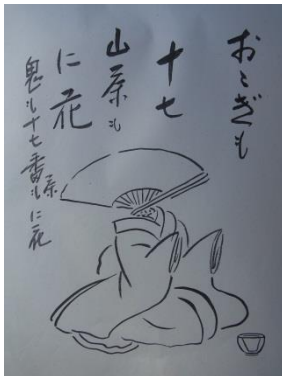
元句：近江八景



扇に描いた景色＝扇八景。地口あん登宇に「扇八卦」というのがある。琵琶湖南部にある8つの景勝地を近江八景と称した。元はといえば、中国の八景に倣ったものだが、全国に数ある八景の先駆的存在。①比良の暮雪、②矢橋の帰帆、③石山の秋月、④瀬田の夕照、⑤三井の晩鐘、⑥堅田の落雁、⑦栗津の晴嵐、⑧唐崎の夜雨。この景色は、歌川広重描くところの近江八景がPRの一翼を担ったことは否めない。

83. おゝぎも十七山茶もに花

元句：鬼も十七番茶もに花



「鬼も十八番茶も出花」といい、多少不美人でも年頃になれば、それなりに色気も魅力も出てくるもので粗末な番茶や山の茶でも一番茶が美味しいのと同じだと言う。

木材会社のHP・木のことわざ辞典に「鬼も十七山茶も煮端」というのがあり、地口そのままである。調べてみると、「鬼も十七…」は、江戸時代でも古い言い方で、後出の「鬼も十八…」に負けてしまったようだ。ところで、あまり聞きなれない、に花＝煮端＝煮花＝出花。この四つは同じ意味で、煎じたての香りのよいお茶を言う。

84. 大きい大きい

元句：三番叟の歌詞



磐津『祝儀子宝三番叟』に「おおさへ（大幸）、おおさへ（大幸）、よろこびありや、よろこびありや」という歌詞がある。大きな賽子（さいころ）を手をしているので「大きい（大賽）」といったもの。この地口は、縁起物として歓迎されるはずだが、現代社会では、受け入れる側や、それを見る人にその真意が理解されないのが残念だ。

85. 大たかげんこ

元句：大高源吾



大きな鷹に乗った男・大鷹源吾がげんこを振り上げている。今や、「げんこ」＝握りこぶし と説明を加えなければ、理解されないほど、時代が変化してしまった。現に、パソコンもげんこを知らないので、アンダーラインで警告している。

ところで、大高源吾とは、忠臣蔵で知られる浅野家の家臣。俗に言う赤穂浪士の一人だが、地口にも姿を現す宝井其角と親交がある俳人で茶をたしなむ文武両道の人。敵方・吉良邸の内情を探った人物でもある。

86. 大手にはな

元句：両手に花



絵を見ればま一目瞭然。筋肉隆々とした大きな手と鼻が描かれている。元句の両手に花。はなは、鼻ではなく花。はなにもいろいろあり、「はなっから、解らない」などと使うのは、最初からという意味。この場合には、端という意味で使われている。一般的には、二人の女性の間に男性が入ることを羨望の目で見ると言うような場合に使う。

87. 大なす売り 鯛は道づれ

元句：大安売り 旅は道づれ



二つの地口を左右に併記しているが、二つの元句の間には何ら関係はない。ここでは、鯛の大安売りに注目したい。魚屋が担いでいるのは、鯛だが、魚の頭よりも尻尾がナスというところが面白い。植物学の世界では、植物名を片仮名表記するが、茄子と書いたほうが分かり易い場合もある。

鯛は道づれとは、魚屋と鯛が一緒に行くという意味で大意はない。羽村には、ほかに「鯛は道づれ世はなんぎ」とか「おなす千十両」という地口もある。

88. おおやがけんかの真中で

元句：親がけんかの真中で



地口と元句の間に大差がないし、面白くも何ともない。これには、それなりの理由がありそうだ。実は、青梅市小曾木の御岳神社の地口「おらたげんかのまん中でから傘安坐でさしていた」(左の地口絵) から派生したのではないだろうか。だとしたら、元句は、「大阪天満の真ん中で唐傘枕してやった」となるからだ。

天保8年(1837)、大阪町奉行所の与力・大塩平八郎の乱の時、大阪東町奉行の跡部良弼が鎮圧にあたったが、銃声に驚いて大阪天満の真ん中で落馬して恥をさらした。これを見た人たちが「大阪天満の真ん中で馬から逆さに落ちたとき、こんなに弱い武士見たことない」とはやし立てたという。なお、残念ながら羽村提灯店には、原画は残されていなかった。

89. 大家さん此の子を大事

元句：大家さん店子を大事



読み方：おおやさん このこを だいじ。

江戸時代に書かれた地口絵手本には、多くの場合、元句が添え書きされている。左の地口に記されている元句は、やや小文字で「店子を大事」とある。ここで言う大家とは、家の貸主（家主・やぬし）、店子（たなこ）とは、借主のこと。

90. おかめのついたて

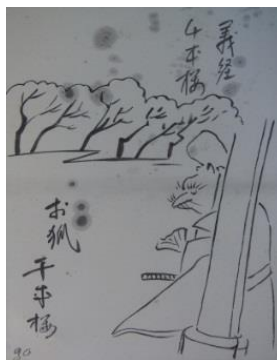
元句：お金の積み立て



低金利時代とはいえ、いざという時の蓄えは、必要だ。おかめ＝岡目。ついたて＝衝立。これだけのことだが、意外とこの謎かけは解けない。羽村市に隣接する瑞穂町で地口「毎年貯めえ門」と記され、力士が「一ヶ年定期」という証書を手にしてしている地口絵を見た。これは、力士を描くことによって「毎年貯めえ門」から「雷電為衛門」を連想することを期待しているもので、今どき、どこかの金融機関のPR用に使えるような地口に思えた。

91. お狐千本桜

元句：義経千本桜



読み方：おきつねせんぼんざくら。

義経をお狐と地ぐっただけのこと。義経千本桜は、延享4年(1747)初演の時代物。並木千柳等の合作による浄瑠璃。歌舞伎でも取り上げ、平家滅亡哀史に源義経や静御前が登場する物語で「狐鱈飲む」の地口にもなった佐藤忠信こと、狐忠信も登場する。

92. おきつね八寸とび

元句：義経八艘飛び



平安時代の末期の1185年、源平壇ノ浦の戦いは、平家滅亡への戦闘であった。その折、平家随一の猛将・平教経は、形勢不利と見て、同じ死ぬのなら敵の大將源義経を道ずれにと義経が乗る船に襲い掛かった。そのとき、義経は船から船へと八艘彼方に飛び移って逃げたという。これが世に言う『義経八艘飛び』である。地口の良さは、血生臭い戦闘も親しみをこめて狐が八寸飛んだとしたところが面白い。

93. おさん八おく

元句: 予算八億



日本の国家予算が8億円を超えたのは、大正5年(1917)。当時の話題が地口化され、「おさん八おく」になった。おさんとは、江戸言葉で飯炊き女、「おさんどん」のこと。おさんどんと播鉢が描かれ、おさんが八(鉢)を置くと言っている。

ちなみに、平成26年度(2014)の我が国の一般会計当初予算は、95兆円をはるかに超え100兆円が目前。今や、億円ではなく兆円になってしまった。

94. お七が雨に夜はひとり

元句: 五七が雨に四つひでり



地口の中でも難解もの。お七とは、八百屋お七のことで井原西鶴の「好色五人女」で浄瑠璃や歌舞伎に脚色され一躍有名になり、お七の生れた年が丙午だったことから丙午の女性は避けられるようになり、さらには、丙午の出生率まで影響しているという。

元句は、「五七の雨に四つ早六八風で九に病」というのがあり、地震が起きた時刻により天候が変わるという俗説があり、昔の時刻で五つ(現午前・午後8時前後)、七つ(現午前・午後4時前後)に地震があると雨になり、四つ(現午前・午後10時前後)だと日照りになるというもの。

95. お染久松せつない恋よ

詞



油屋太郎兵衛の娘お七と丁稚の久松の心中事件を元に脚色した物語。紀海音の浄瑠璃「お染め久松袂の白しぼり」、鶴屋南北の歌舞伎『お染久松色読販』のほか、新内、常磐津、清元など多岐にわたり上演されたため、多くの人々がこの物語を知っていた。

96. おなす千十両

元句: お夏清十郎



茄子を千十両も出して買う人はいない。元句のお夏に掛けておなすと言ったまで。宿屋の娘、お夏とその手代清十郎の恋の物語、清十郎はあらぬ疑いを掛けられて死罪。そしてお夏は発狂してしまう。この実話を元に脚色した井原西鶴の「好色五人女」、近松門左衛門の浄瑠璃「五十年忌歌念仏」、坪内逍遙の舞踊劇『お夏狂乱』などがある。

97. おのれひくいやつだ

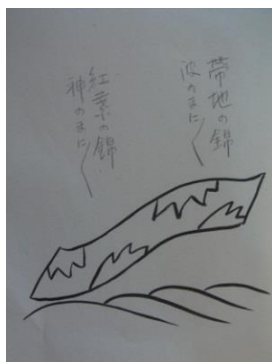
元句：おのれ憎い奴だ



誰にでも簡単に分かる初級の地口。絵も分かりやすいし、「ひくい」も「憎い」も同音異字。

98. 帯地の錦波のまにまに

元句：紅葉の錦神のまにまに



絵だけでは分からないが、帯と波の文字が絵を助けている。元句は、百人一首でおなじみの歌の下の句。

「このたびは幣もとりあへず手向け山紅葉の錦神のまにまに」は、古今集に載っている菅原道真の歌。

99. おもいおもいのおやぢどの

元句：おーいおーい親父どの



仮名手本忠臣蔵五段目の山崎街道の場 与市兵衛が娘・おかるの身売りを決め、前金の五十両を縞の財布に入れて家路を急いでいると、斧九太夫の息子・定九郎が「おーい、おーい親父どの」と呼びかかける場面がある。

歌川国芳の浮世絵『木曾街道六十九次之内 大井』（嘉永5年・1852）の場面は、呼びかける斧定九郎を大きく描き、風景そのものは上部の小判形こま絵の中に小さく表現しているにすぎない。さらに良く見ると、五十両を入れた縞の財布、笠、火縄銃、破れちようちん、杖と傘までが画題の周囲に描かれているのが見る者を楽しませてくれる。この浮世絵は、地名の大井と定九郎の呼び声「おーい」をかけたもので、まさに地口浮世絵。

100. おもい杵とわあんまりな

元句：思い切れとはあんまりな



江戸時代の心中物語に出てきそうなフレーズ。長崎の平戸節をはじめ、杵築市の盆踊り切口説「逢えば心も～御山御嶽」に似たものがある。「思い切れとは死ねとのことか」七七七五の都々逸調である。

中道風迅洞の『風迅洞私選・どどいつ万葉集』（徳間書店）に「思い切れとは死ねとのことか 死ねば野山の土となる」というのがある。新しくは、昭和32年（1957）大映映画『弥太郎笠』の主題歌に「思い切れとは死ねとのことか」というのがある。

101. おやおや雑兵能

元句：おやおやどうしようのう



地口行燈五編に「オヤオヤ雑兵かぼちやの胡麻汁」
→元句：「おやおやどうしよう南瓜のごま汁」というの
がある。また、あきる野市阿伎留神社の祭礼で見かけ
た祭り提灯に「おやおやどう志ようこしからない」と
いうのがあった。伝統ある阿伎留神社の祭礼で見た地
口提灯。曲亭馬琴の黄表紙「開帳地口提燈」（享和3年・
1803）があり、地口提灯は古くからあったようだ。

102. おわん長エ門

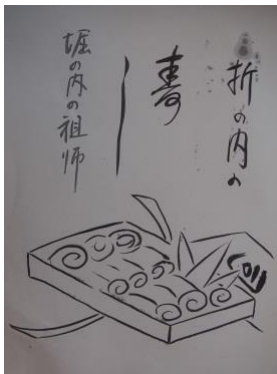
元句：おはん長右衛門



安永5年（1776）初演の浄瑠璃『桂川連理柵』（かつらがわれんりのしが
らみ）では信濃屋の娘お半（14歳）と隣家・帯屋の主人長右衛門が桂川で
心中する物語。お半と御椀をかけたもの。大きなお椀を持って立つ男、こ
れが長右エ門。江戸時代の1761年に起こった実話が元になっている。浄瑠
璃作家の菅専助作の悲しき心中物語「桂川連理柵」に描かれているのは、
妻も職もある四十男の長右エ門と隣家に住む14歳の娘おはんとの心中事
件。

103. 折の内の寿し

元句：堀の内の祖師



折の中に寿司が入っているのだから、「折の内の寿し」そのもの。
ところが地口は、「堀之内の祖師（妙法寺）」が元句だと分かってほしいの
だ。元禄5年（1692）目黒碑文谷の法華寺から日蓮上人の木像を堀之内の
妙法寺に移して以来、厄除けに靈驗ありとして大変賑わい、通称「堀之内
のお祖師さま」と呼ばれ、江戸市中から青梅街道を下って鍋屋横丁で左折
して妙法寺道に入る。現在、中野区の鍋屋横丁には、明治11年に建てら
れた道標がある。

104. かゝ様や此裏口のとをあけて

元句：高砂やこの浦舟に帆をあげて



元句は、能の「高砂」。かつて、一般庶民は、歌
舞伎や村芝居などからの知識が豊富だったとみえて、
「かゝ様や此の裏口の戸を開けて」から婚礼歌と理解
できたものと思われる。さらに元句をたどって室町時
代の猿楽師・世阿弥の能『高砂』にまで思い及ぶこと
はなかったであろう。なお、左側は元絵。右側の下絵
には、芝居先代萩と注記があるが、子供を鶴千代と見
たのかもしれない。

105. かかしがあるけばあやまろう

元句：わたしが悪けりゃあやまろう



これは新しそうで古い地口。弘化4年(1847)の『地久知画でほん』に「案山子が歩行ハあやまろう」というのがあり、文字は異なるが、言っていることは同じ。

106. 書の如くに御座候

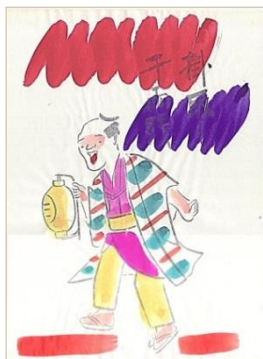
元句：斯如に御座候



下絵の右肩に「書の如くに御座候」とある。
提灯屋が書いているのは、御祭禮という文字。斯を消して晝と訂正してあるのは、御祭禮の文字を「書の如くに」掛けたものか。このような候文をどうやって庶民は知ったのだろうか。卑近な例を考えると歌舞伎や芝居。やはり忠臣蔵が思い当たる。赤穂四十七士が討ち入りのとき持参した『浅野内匠家来口上』の最後尾に「私ども死後御見分の御方御座候わば御披見願ひ奉り斯如に御座候 以上」とある。

107. 掛取千両残

元句：関取千両幟



近松半二ほか二人の合作で人形浄瑠璃、世話物のタイトルが「関取千両」。大坂相撲の猪名川政右絵衛門をモデルにした八百長相撲に命をかけた恋女房の話。今世紀では、元句の「関取千両幟」の意味だけでなく、地口に用いられている「掛取り」の意味でさえも理解できなくなってしまう。一般庶民の商売では借金取りで千両も残るはずはないが、そこは地口の楽しくも無責任なところ。
この物語の初演は、明和4年(1767)。



国技館前の幟

108. 語る述師の関の戸に

元句：不詳



読み方：かたるじゅつしのせきのとに。
常磐津の積恋雪関扉（つもるこいゆきのせきのと）は、通称を関の扉（せきのと）。この物語の登場人物は、平安時代の六歌仙で知られる小野小町や大伴黒主等。舞台は、京都と大津の間にある逢坂の関。話の内容は、江戸の天明期という。まさに述師の手の内で踊らされているような奇々怪々の物語。

109. 門に年始の禮阿里

元句：鳩に三枝の礼あり

110. 門に年始の礼あり

元句： 同上



鳩の子は、木の枝に止まるとき、礼節を重んじ、へりくだって親よりも三本下の枝に止まるという故事から。ちなみに、下の句の「鳥に反哺の孝あり」は、親に孝行せよということから、カラスは、老いた親鳥に餌を口移しで食べさせ孝行するという。人間社会でも超高齢化時代に向けてカラスを侮

る

ことなかれ。左側の絵は、瓶垂れ霞が赤色のみ、真ん中は、退色して青線が消え、右側の絵は、瓶垂れ霞を欠いたもの。

111. 叶わぬ時の神だのみ

川柳



自力でダメなら、他力本願でもと神仏にお願いするのは、いつの時代も同じようなもの。

この句からの発想で「叶わぬ時の蟹だのみ」という地口もある。

112. かにがはだして湯の中に

元句：金がかたきの世の中に



蟹が木製の盥（たらい）の湯の中に裸足で立っている。絵の右端に「かにだらい」とあるが、かにだらいとは、金盥のこととしたら絵と異なり辻褄が合わない。後世の補足であろう。

ほかに、蟹が鉄の藻の中じゃ（出たらめ地くち）というのものもある。

113. かにしやくもち

元句：かんしゃくもち



男が右手に蟹（カニ）を、左手に蝦蛄（シャコ）を持ち、笑って立っているだけで十分に地口行灯の役を果たすという簡潔なもの。

この地口絵の下絵は、ガリ版印刷で仕上げている。恐らく昭和30~40年代に大量生産するためにガリ版刷りを考案したものと考えられる。

114. 釜から権五郎

元句:鎌倉権五郎



読み方：かまからごんごろう

平安時代の武士・鎌倉景政は、平家の出で相模の国鎌倉の領主だったことから、鎌倉権五郎と呼ばれた。江戸時代になってから「歌舞伎十八番乃内 暫（しばらく）」でその剛勇ぶりが庶民の間で一躍有名になった歴史上の人物。

ちなみに、名前の権は、強さを表すが、五郎も五霊に通じ、強いという意味がある。

115. 釜みがゞれば光なし

元句：玉磨かざれば光なし



元句は、いくら素質があっても努力して勉学や修養を積まなくては優れた人間にはなれないということわざ。地口では、卑近な例として、鍋釜でさえ、使えばなしではなく、磨かなければ光らないよと教えているもの。

116. かめさんかかゝるなよせするな

元句：亀井、片岡、伊勢、駿河

117. かめへかゝるなよせするな

同上

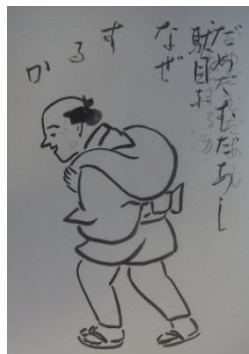
118. かれい片みで二朱するか

同上

119. だめなむだあしなぜするか

同上

上記の4点の元句は同じで、延享4年（1747）大坂竹本座初演の人形浄瑠璃「義経千本桜」が大ヒットし、その後、歌舞伎でも人気を博した。義経の四天王としては、諸説あるが、歌舞伎の影響が強く「亀井、片岡、伊勢、駿河」の呼び方が誰の口にも馴染んだものか、地口化された。上記の4人は、平安時代末期の武士で平家物語や源平盛衰記、義経記等にその名を見るが、一般庶民は、「義経千本桜」を通して知識を得たもの。



義経の四天王とは、下記のとおり。

1. 亀井六郎…亀井城主、熊野の豪族
2. 片岡八郎…下総の出
3. 伊勢三郎…筆頭郎党
4. 駿河次郎…駿河の獵師、下級武士

ほかに、下記の説もある。

武蔵坊弁慶、佐藤継信・忠信兄弟、伊勢三郎の4人
佐藤継信・忠信兄弟と鎌田盛政・光政兄弟の4人

120. から酒の夜の酒

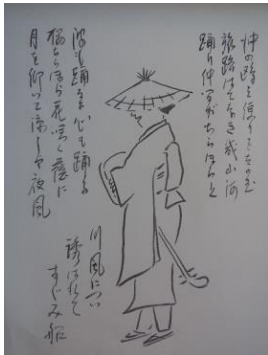
元句：唐崎の夜の雨



唐崎夜雨は、近江八景のひとつ。『地口あん登宇』に「から鮭の夜の網」というのがあるが、左の絵の男は酒の肴もなく、お銚子は、立っているが、中は空っぽで、唐崎どころではなく空酒。そして、うたたねが過ぎれば、白河夜船。かくして、正真正銘の空酒の夜の酒になってしまうのである。近江八景は、詩歌に歌われるほどの名所。当然のようにいろいろな場所が地口化され、唐崎、石山、堅田、瀬田の名前が思い浮かぶ。ほかにも、近江八景=扇八景 近江のお兼=扇のお金 などがある。

121. 川風につい誘はれてすゞみ船

俳句



地口行灯の中で最も文字数が多いので特異な例として取り上げてみた。記されている文言は、つぎのとおり。

〴〵沖の鷗に便りを頼む 旅路はてなき幾山河 踊り仲間がちらほらと
波も踊る心も踊る 桜ちらほら花咲く蔭に 月を仰いで涼しや夜風〴〵

中央に描かれている女性は、編笠をかぶり、三味線を抱えている。江戸時代に「鳥追い」と呼ばれる門付芸人いた。この鳥追いの謳い文句を書いたものと思われる。

122. かんざしよかろう

元句：神崎与五郎



神崎とは、忠臣蔵で名を知られた赤穂義士、浅野家の武将。神崎与五郎則休のことである。彼は、四十七士の中では、随一の酒豪といわれ、あきる野市深沢に残る地口行灯に「かんざけよかろう」というのがある。

123. かんは銚子

元句：関羽 張飛



読み方：かんはちょうし

この地口から三国時代の蜀漢の武将・関羽と張飛とは思いも及ばない。江戸時代の人があるはずもない大陸の武将の名前は、歌舞伎を通して得たと考えられる。歌舞伎十八番の一つ「関羽」では、景清が張飛の姿で現れ、畠山重忠扮するところの関羽とともに両雄が大活躍する場面が多くの人々の目を引いたようだ。

なお、地口行燈、五編に同じもの「爛は銚子」がある。

124. 勘平のはなきり

元句： 勘平の腹切り



赤穂浪士のひとり萱野三平は、仮名手本忠臣蔵では、早野勘平。お軽の夫で舅を誤って殺したと思い自殺する。そこで、地口は、はなきり＝腹切りとなったもの。

125. きかく浮世は芋に酒

元句： とかく浮世は色に酒



宝井基角：江戸時代前期の俳人で別名：榎本基角。松尾芭蕉の門人。芭蕉没後は派手な句風で知られ、俳句の世界に洒落風を取り入れた。江戸座を開くなど、一躍、時の人となり、基角の名前が地口にも登場するようになった。

126. 木曾を通れば釜二つ

元句： 人を呪わば穴二つ



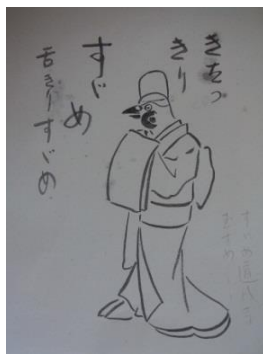
人を呪い殺そうとすれば、自分もその報いで殺されるから、葬る墓穴は二つ必要になるという意味。要するに、他人を傷つけば、やがて自分の身にも降りかかってくるということ。

127. 着たきりすぢみ

元句： 舌切り雀

128. きたつきりすぢめ

元句： 〃



元句が同じ地口でも老人が縁台に腰かけて羽織を着たままの夕涼み。方や着物を着たスズメが着たつきりで立っている。

最近でも、「着たつきりすぢめ」という言葉を聞くくらいだから、いつの時代でも、どこにでもだらしのない人はいるようだ。

129. 狐玉のむ
130. 狐たらのむ

元句：狐忠信
元句： 〃



狐忠信こと、本名：佐藤忠信は、平安時代末の武士。源義経が吉野山に隠れていたとき、攻められたが、忠信は自ら義経を名乗り奮戦したつわもの。浄瑠璃や歌舞伎では、義経千本桜に狐忠信の名前で活躍する。

131. 狐のお参り
132. 狐の米いり
133. 狐のよみうり

元句：狐の嫁入り
元句： 〃
元句： 〃

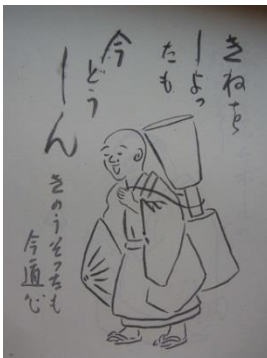


狐火から派生した狐の嫁入り三部作。狐の嫁入りとは、天気模様を言い、今まで晴れていたのに、雨がぽつぽつ降り出す、いわゆるお天気雨のこと。左側の絵は、鳥居の柱だけで稲荷神社を想起させ、紋付きを着た狐が手を合わせている。真ん中の絵は、嫁入り姿の狐が米を炒っている。右側の絵は、朝、受け取ったばかりのよみうり（新聞）を立ち読みしているところ。

そもそも狐火そのものは、未だに解明されていない部分があるとはいえ、太陽と大地が作り出す神秘に対して、人々は狐と結びつけたところが農耕民族の日本人らしいところと言えよう。

134. きねをしょったも今どうしん

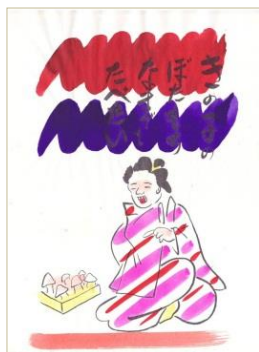
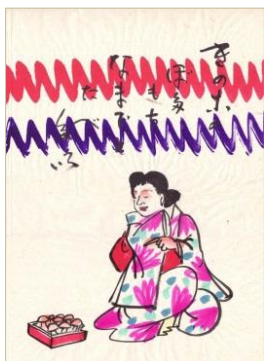
元句：きのうそったも今道心



説教節の『刈萱（かるかや）』より
無常を感じて出家した刈萱道心と父を知らぬその子石童丸との父子愛を高野山を舞台に切々と描いた物語。さらに浄瑠璃や琵琶で語られ、多くの人々に感動を与えた。そのため、当時は誰もが「きねをしょったも今どうしん」の意味を即座に理解していたはず。元句は、石童丸が頭を剃って仏門に入ったばかりなので今童心と言ひ、「杵をしょったも」は、昨日剃ったばかりという意味を地口ったもの。

135. きの古のぼたもちなまでもたべ田似
 136. きの子のぼたもちなまでもたべたい

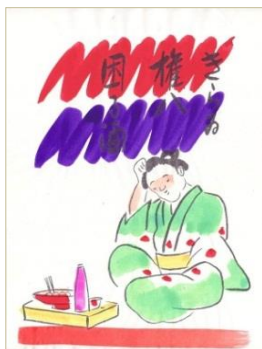
元句：黄粉のぼた餅なんぼでも食べたい
 同上



黄粉のぼた餅を茸のぼた餅と名前を変え、茸にどれだけの意味を持たせているかは、読む側の意識次第。同じ題材だが、左側の絵は下絵から描いたと思われ、右側の絵は着物の絵模様から所沢系の色使いが窺われる。

137. きらい権八困る酒

元句：白井権八小紫



平井権八は、江戸時代前期の鳥取藩士。吉原の遊女・小紫と馴染みを通じ、金に困って殺人強盗を重ね延宝7年（1679）に鈴ヶ森で処刑された。その直後に小紫は後を追って自害した。この事件を鶴屋南北が「浮世柄比翼稲妻（うきよづかひよくのいなづま）」と題して歌舞伎に脚色し、平井権八は白井権八の名前で登場する。物語の中では、幡随院長兵衛と白井権八との間で交わされた「お若えのお待ちなせえ」と問われ「待てとお止めなされしは…」と応える場面が有名になった。

138. きらくがどてでかさを買ふ

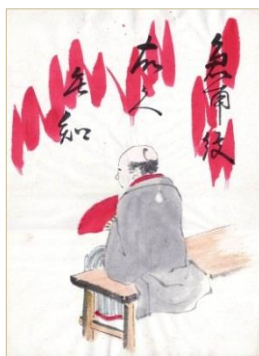
元句：其角が土手で傘を買ひ



きらく＝其角＝宝井其角。松尾芭蕉門下の俳人で蕉門十哲の一人。日照り続きの元禄6年（1693）の夏、三囲（みめぐり）神社を訪れた折り、乞われて「夕立や田を見めぐりの神ならば」という雨ごいの句を詠んだ。すると、たちまち雨が降りだしたというエピソードの持ち主。この話が江戸中に広まり多くの川柳を生んだ。その一つが、突然の雨に其角も傘を買ったという川柳となり、さらに地口行灯にまで発展したものの。

139. 急南紋古久も知

元句：中納言家持



読み方：きゅうなもんこくもち

急南紋＝急な紋→中納言。ここでは、紋所を話題にしている。古久も知＝黒餅→家紋に用いられる黒餅や白餅の「もち」は持つ、保つに通じる。しかも黒餅は、石持に通じるところから武士に歓迎されたようだ。中納言大伴家持は、奈良時代後期の歌人で万葉集の編者で知られる人物。家持と書くところから、古久も知＝黒餅＝石持＝家持となったもの。

地口絵は、大伴家持の後姿で、急南紋（急なもん）だから、紋を描く時間

がなかったので白紙状態。白抜きで描かれているところが面白い。

140. くいすぎけんちん

元句：上杉謙信



人名、地名の地口は、地口絵手本が出版されるほどあり、これもその一つ。けんちんとは、一般に「けんちん汁」の名で知られているもので、だいこんやサトイモ、にんじん等、根菜類たっぷりの冬の郷土料理的存在。けんちん汁は、建長寺汁が語源とする説があり、肉類を使わない点では、禅宗料理と一脈通じるものがある。

141. 杭てぬぐいのほうかむり

元句：冬手拭のほおかむり



水中に打ち込まれた杭。以前は、多摩川でもよく見かけた風景だ。簡易な橋の周囲や砂利留に打ち込んであった。

冬場の屋外作業の折、作業する人は、寒さしのごにほおを隠すように頭から手ぬぐいをかぶったが、いくら寒くても杭にまで手ぬぐいを巻くことはなかった。ここでは、遊び心でやったこと。とは言え、実際に冬手ぬぐいとは、立派な俳句の季語でもある。

142. 食わずとも 此の子だけほと腕を組

川柳



「欲しがりません、勝つまでは」と必死に生きた時代から敗戦を迎え、食うや食わずの生活を余儀なくされた世代。心身ともに強く、高齢化社会の真っ只中で頑張っている姿はりりしい。そして、苦勞して育てられた戦後育ち世代も70代に到達しようとしている。今にして思えば、祭という華やかな行事にこのような暗い地口行灯の灯りは、いっそう暗かったに違いない。これも時代を反映した地口行灯ということか。

143. 熊ヶ谷のあつもり

元句：熊谷直実 平敦盛

144. 熊ヶ谷の物あたり

元句：熊谷物語



武士が魚や野菜を入れた羹（あつもの）を食べている。おそらく熊谷直実と平敦盛の二人をごちゃ混ぜにしたものであろう。見方によっては、熊ヶ谷は、地名の熊谷で、あつもりは、平敦盛のようにも受け取れる。熊谷直実は、鎌倉時代の武将で一の谷の戦いで平敦盛を討ったことで知られ、野草の名にもクマガイソウ、アツモリソウと並び称されている。右側の絵は、物語

をもじって熊谷直実が怒りを露わにして物にあたり散らしている場面。

145. けいばみをたすける

元句：食へば身を助ける



読み方：競馬箕を助ける。 元句：くえばみをたすける。

かつては、競輪、競馬で身を滅ぼしたという話をよく耳にしたが、恐らくその時代のもの。ここでは、皮肉たつぷりに競走馬が大股を広げ、箕を踏み潰さずに助けたといたいのだろう。

あきる野市留原の八坂神社の地口行灯に「身を焦がす」というところを「箕を焦がす」というのがある。

146. 競輪は女選手に人気あり

川柳



競輪の歴史は、戦後間もない昭和 23 年 (1948)。その 2 年後には、女子競輪も開催され、昭和 37 年 (1962) をピークに下降線をたどり、ついに 2 年後に廃止された。しかし、オリンピックでの競輪採用に伴い女子選手の養成が始まっている昨今でもある。

147. 下駄のからはし

元句：瀬田の唐橋



唐風の橋という意味。滋賀県瀬田川に架かる橋で大津市瀬田橋本町から鳥居川町に通じる橋。かつては、「唐橋を制する者は、天下を制する」とまで言われ、京都を守る要衝だった。近江八景「瀬田の夕照」で知られ、日本三名橋のひとつでもある。現代では、琵琶湖マラソンの選手たちが走って渡ることによって知られている。

148. 剣戟の相手を下女はハタキでし

川柳



子供と大人の果し合い？ 厳密に言えば、「剣戟」は刀剣での切り合い。いわゆるお遊びとしてのチャンバラで、ハタキを使っているくらいだから、「剣劇」という表現が当たっているのかもしれない。

日本語の使い方は難しいが故に地口のような楽しみ方もできる。

149. 原稿料とるは亭主に子を抱かせ

川柳



女性の社会進出は、大正時代から昭和の初めにかけて顕著になり、今や、直木賞や各種文芸賞に見る名前は女性ばかり。この地口ができた頃からすれば、今の世は想定外といえようか。

150. 小犬の太刀のぼり

元句：鯉の滝のぼり



「鯉の滝のぼり」からは、多くの地口が生まれ、各地にあり、ポピュラーな地口のひとつと言えよう。羽村提灯店の地口は、立派な太刀を小犬が登ろうとしている。

151. 交通の違反で一寸叱られる

川柳



日本にもこんなにおおらかな時代があった。歩行者の右側通行や自動車・自転車の左側通行、いわゆる対面交通になったのは、第二次世界大戦以降のこと。慣れない通行で、当初は、ちょっと叱られる程度だったが、今、自転車でも罰金の対象になったり、自動車の一時停車違反でも物陰に隠れるように見張っている交通警察官からちょっと叱られるどころか、無情にも違反キップを突きつけられる時代になってしまった。

152. 肥は田舎のもの

元句：恋はいゝ仲のもの



「肥は田舎の作のたね」 元句：「恋はいい仲の癩の種」という地口もあるが、この下絵では、「作のたね」が消してあり、「田舎のもの」となっている。今の若い人がこの絵を見て何をしているのか、理解できない時代になってしまった。例えば、我々がまったく知らない江戸時代のことでも絵や文字で残してくれた先人がいる。江戸郊外の練馬、中野の住民が江戸市中まで下肥をくみ取りに行った頃は、この絵のようだったに違いない。自分たち百姓の下肥よりも市中の人々は美味しいものを食べていたので

下肥もよく効いたとか。

153. 五升桜

元句：御所桜

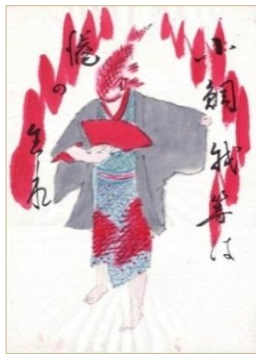


五升といえば酒、桜といえば花見。これは、あくまでも庶民の願い。元句の御所桜は、浄瑠璃や歌舞伎で当時はだれもが知っていた「御所桜堀川夜討（ごしょざくらほりかわようち）」、通称「堀川夜討」のこと。源頼朝が義経襲撃を命じた堀川夜討の段が中心で平家物語や義経記に題材を求め、義経、弁慶、静御前等の伝説を加えた物語。

今、我々が目にするのは、花の御所桜。五輪の花がまとまった八重咲きが美しい。また、絵にある正宗のラベルは、代表的な酒。文字だけでだれにでも酒と分かる。

154. 小鯛我等は湊の生れ

元句：自体我らは都の生まれ



読み方：こだいわれらはみなとのうまれ

扇子を手に鯛顔の男が立っている。この絵から「都の生まれ」を引き出すには、難問中の難問。小鯛ならば、「どだい無理な話」などと使う場合の土台に近い。自体も土台も意味は同じである。もう少し突っ込んで考えれば、「小一鯛一湊」の共通点今でも千葉県の小湊付近にある鯛の浦には鯛がたくさん泳いでいて、遊覧船から見る事ができる。まさにここの鯛は、鯛の浦の入江（湊）の生れである。

155. 此の柿一つがまゝならぬ

元句：この垣一重がままならぬ



奥州安達原三段目に「この垣ひとえが黒鉄の門より高う心から」という文言があるが、おそらくここからの派生と思われる。

類似句「将棋ひとりがまゝならぬ→障子一重がまゝならぬ」

地口絵は2種あり、着物姿の女性が柿の実を手にしているものと籠に盛られものがある。

156. 小判たごのむ

元句：碁盤忠信（佐藤忠信）

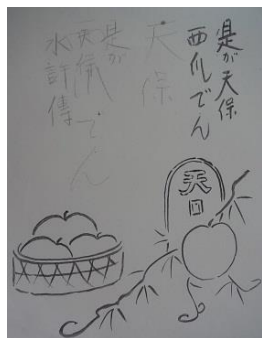


佐藤忠信は、平安時代の武将で源義経の家臣。義経千本桜で狐忠信こと、源九郎狐のモデルになった人物。忠信が女の裏切りで不意をつかれ碁盤を投げて応戦したという逸話を浄瑠璃や歌舞伎に脚色したものが「碁盤忠信」。国芳が浮世絵に武者絵としても描いている。左側の絵は、平成のもので瓶垂れ霞を欠くが、右側の

絵には瓶垂れ霞が描かれている。

157. 是が天保西瓜でん

元句:これが天保水滸傳



天保水滸傳と言えば、浪曲や講談でお馴染みの物語。笹川の繁蔵、飯岡の助五郎の名前は、後世に映画化もされたので、昭和の後半でもその名が知られていた。二人の争いは、天保15年の大利根河原の決闘が有名で浮世絵にも描かれ、標題にも天保の年号を入れ、利根川の河原が舞台なので水滸(水のはとり)としたもの。

地口では、水滸を西瓜とただけだが、絵では、天保銭を西瓜よりも大きく描いて強調している。

158. 咲いた桜になべ釜つるす

元句:咲いた桜になぜ駒つなぐ



江戸時代のはじめの民謡集『山家鳥虫歌』に「咲いた桜になぜ駒つなぐ 駒が勇めば花が散る」という都々逸が掲載されている。越中おわら節の古謡の中に「咲いた桜になぜ駒つなぐ 駒が勇めば花が散る 竹に雀は品良くとまる とめてとまらぬ恋の道」とある。

日本人と桜の話は数多く、話題は尽きない。古くは、在原業平の「世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」とか、仮名手本忠臣蔵で一般に知られるようになった「花は桜木人は武士」など、今でも耳にすることがある。

うになった「花は桜木人は武士」など、今でも耳にすることがある。

159. 咲くも花なら散るも花

川柳



哀愁を帯びた女性のまなざし。散る花を象徴しているかに見える。この絵が意味しているのは、桜ではなく、女性の人生そのもの。文言が鉛筆書きしてあるので、地口行灯としては、使われなかったものか。

160. 盃斗里よきものとなし

元句:暁ばかりうきものはなし



読み方:さかづきばかりよきものとなし

古今集の歌で小倉百人一首にも選ばれた壬生忠岑「有明のつれなく見えし別れより 暁ばかり憂きものはなし」が元歌。百人一首からの地口が数多い中で読み方から元句探しまで難解でこれを読み解くには上級クラス。

江戸っ子は、百人一首に対する知識が豊富だったとみえて元歌をまるまるもじったものや下の句からの地口が多い。

165. 座頭かめのぞき

詞



盲官の位に①検校、②別当、③勾当、④座頭というのがあるが、江戸期には、一般的に座頭といえは盲人をさした。目の不自由な人が瓶の中をのぞいても意味がない。だからと言って地口行灯になるには、それなりの意味があったに違いない。絵柄から考えられるのは、大きな瓶から想像すると藍染の「かめのぞき」がある。一般に藍染といえは、紺色だが、かめのぞきとは、ちょっと覗いた程度に浅く染めた浅黄色に近い、薄い青色で、のぞき色ともいわれるもの。もうひとつは、お酒。文字は違うが亀の口といえは、しぼりたての吟醸酒。ここでいう瓶のぞきとは、新潟県産で瓶の底まで飲み干したいほどの本醸造原酒。「甕覗」という名がある。

166. 砂糖たごのむ

元句：佐藤忠信



砂糖→佐藤 たごのむ→忠信

佐藤忠信については、「きつね玉のむ」を参照のこと。

167. 佐渡へ佐渡へと草木もなびく

元句：民謡「佐渡おけさ」



新潟県民謡『佐渡おけさ』は、九州の長崎から熊本にかけてハンヤーとかハンヤエーではじまる「はんや節」の流れを汲むという。都々逸や甚句と同じ7、7、7、5の調べが心地よい。おそらく日本海側を航路とする北前船などにより佐渡へ伝えられたものと思われるが、正式に『佐渡おけさ』を名乗ったのは、大正時代からといわれている。

168. 差配のつぼやき

元句：さぶゑのつぼやき



歌舞伎や浮世草子の世界でしか出合いがない言葉かと思いきや、再放映されている時代劇や落語で見聞きすることがある。この絵にある差配は、長屋等の貸家を管理する人で、落語に出て来る差配さんとか、大家さんを想像してほしい。ここでは、差配が「かしや」と書いた張り紙をしている。最近では、見かけることはないが、貸家の張り紙は、絵にあるように斜めに貼るのが定番だった。一説に借り手が家の選択時に考えるとき首を傾げ

るので読みやすいのだという。

169. 実が有なら質ぐさ貸な指も気せうもわしゃいらぬ

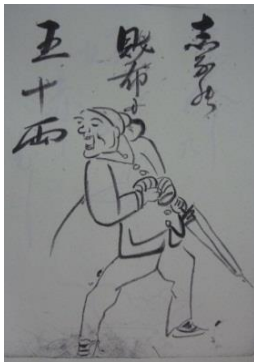
元句：不詳



見た目、気風がいい文字が並んでいるが、残念ながら元句にたどり着かない。質ぐさも指印も起請文（誓約書）も私は、請求しないと言う格好いい男が立っている。

170. 志なの財布に五十両

元句：縞の財布に五十両



浅草伝法院通りの街路灯には、「ひまの大工に五十両」とある。仮名手本忠臣蔵から歌舞伎・仮名手本忠臣蔵で人気があった五段目、六段目。ここで言う五十両とは、お軽の夫・早野勘平が舅（お軽の父親）とは知らずに奪った五十両の大金が入った縞の財布にこと。「縞の財布に五十両」という有名な台詞を残した。そこから、志な（支那）の財布とか、暇の大工の地口が生まれた。

171. 銃後の護りは我等の力

標語 戦中物



「銃後の護りは我等の力」と出征兵士を送り出したものの、若者は、みんな戦争に駆り出されてしまった。後に残るは、女性と子供。銃後の守りは……と強がりを持ってみたところで、食うや食わずでは、勝ち目はなかった。この絵にあるように、力仕事も女性たちが担っていた。

172. 朱に交はれば赤くなる

諺（ことわざ）



中国のことわざ「近墨必緇 近朱必赤」というのがあり、これを翻訳すると「朱に交われば、赤くなる」となる。人は人間関係や環境で良くも悪くもなるというもの。

173. 将碁ひとりがまゝならぬ

元句：障子一重がままならぬ



江戸期風俗・事物史の基本文献とされる喜田川守貞の『守貞謾稿』の卷之二十三に「虎は千里の藪さへ越すに ノウコレサ 障子一と重がまアまなアらぬ」という歌詞があり、寛政 11 年、江戸で流行し、幕末に再興した旨の記述がある。また、越中おわら節の歌詞に「虎は千里の藪さえ越すに障子一重がままならぬ」というものもある。

なお、左側の地口は「将碁」、右側は「将棋」。

174. 四わん投げくび気をいるばかり

元句：思案なげくび しをいるばかり

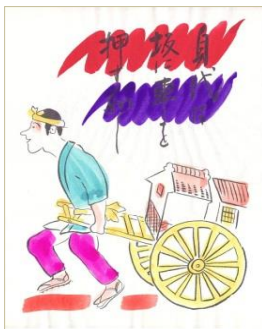


「しょげる」を辞書で調べると、人が元気をなくす様子とか、「青菜に塩」という言葉が出てくる。しをいる＝塩入るとか、しおれると解釈すれば、元句の思案投げ首と連動する。

左の地口絵は、所沢系のものではなく、古いもので羽村提灯店ではこの絵を元に同じような絵を描いていた。

175. 身代は坂に車を押す如し

元句：道歌



読み方：しんだいは さかにくるまを おすごとし

仏教の教えや道徳をわかり易く読み込んだ和歌を道歌という。類似句に「手習いは坂に車を押す如し」があり、身代も手習いも油断すれば、元に戻ってしまうとの教え。

176. 新聞漢文でわからない

元句：ちんぷんかんぷんで分からない



「ちんぷんかんぷん」とは、話の内容や言葉がまったく判らない場合に使う。江戸時代に庶民の間で使われ始めたという説があり、ちんぷんかん+ぷん＝ちんぷんかんぷん 漢字を当てると、「珍粉漢粉」とか『珍糞漢糞』など江戸っ子の遊び心が読み取れて楽しい。

177. すいか身を喰ふ

元句：粋が身を喰う



あまり粋がっていると身を持ち崩すよと忠告しているもの。そんな輩に対して西瓜の身を喰うと言ったところが面白い。

世の中には、粋な人（いきなひと）とか、いなせ、通人とか言われ、特に花柳界や芸事等の社会でもてはやされ、つつい深入りして身を滅ぼす輩がいる。そんな人を地ぐって「すいか身を喰ふ」と言ったもの。反意語的なものに「芸は身を助く」がある。

178. 寿祢ずとどてらをぬぎやしゃ舞せ

元句：すねずとこちらを向かしゃんせ



読み方：すねずとどてらをぬぎやしゃんせ

やっとの思いで読み解いてみれば、日常茶飯のこと。しかし、難問は、「寿祢寿登」や『登て羅』など解読に苦勞する変体仮名。「登て羅」は「どてら」と読む。防寒用の部屋着で丹前のこと。地口部分は少ないが変体仮名を使うことで読む人の目を意識している点を評価したい。

179. 生存競争

標語



核のような人殺しの武器に頼る生存競争ではなく、ジャンケンのようなゲーム感覚で楽しむ生存競争を歓迎したい。

180. せきとり千両のこり

元句：関取千両幟



明和4年(1767)、大阪竹本座初演の浄瑠璃「関取千両幟」と言うのがあった。実在の関取をモデルにしたものだったが、歌舞伎にも脚本化され、実名で演じられた八百長相撲の物語。歌舞伎界などでは、通称「千両幟」とも言い、相撲幟に関わる題名がつけられたもの。右側の写真は、国技館前に立てられた大相撲の興行幟で一般に相撲幟と呼ばれている。

181. 選挙権誰に入れると妻に問ひ

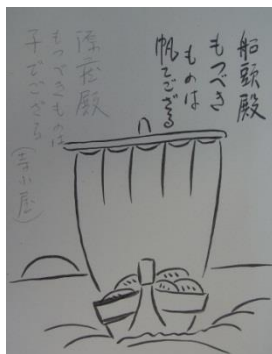
川柳



昭和 21 年（1946）、日本国憲法制定とともに 20 歳以上の男女に選挙権が与えられた。このような会話が夫婦の間で行われたというもの。「妻に問ひ」が情けなく感じるところにユーモアがあって楽しめる。

182. 船頭殿もつべきものは帆でござる

元句：源蔵殿もつべきものは子でござる



菅原道真にまつわる物語『菅原伝授手習鑑』は、浄瑠璃の時代物として竹田出雲、並木宗輔、三好松洛らの合作。道真の配流、梅王、松王、桜丸の三兄弟そして武部源蔵の忠義と苦はをあますところなく描いた作品は、多くの人々の共感を呼んだ。浄瑠璃に引き続き、歌舞伎でも上演され、現在でも多くのファンを集めている。武部源蔵が道真の子・菅秀才の身代わりに松王の子小太郎を切る寺子屋の場面が観客の涙を誘い松王丸の「持つべきものは子でござる」のフレーズが有名。

183. そだの御用チョコキ舟

元句：曾我の五郎時致

184. 楚ばの大めん

元句：曾我の対面

185. そまの鏡台

元句：曾我の兄弟



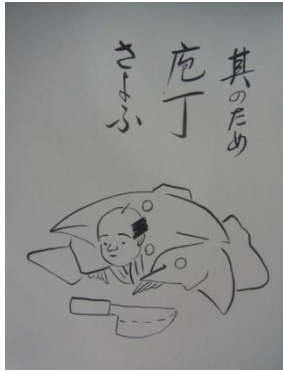
そだ＝粗朶＝切り取った木の枝。チョコキ舟＝猪牙舟＝舳先のとがった屋根根のない舟。とりたてて粗朶を運ぶような御用は考えられないが、チョコキ舟といえば、隅田川に行く吉原通いの遊び舟をイ

メージしていただければそれで十分。ほかに羽村市に残る曾我兄弟に関する地口は、次の 5 点がある。①楚ばの大めん 元句：蘇我の対面。②そまの鏡台 元句：蘇我兄弟。曾我兄弟の敵討ちに登場する富士の巻狩りも地口の材料となっている。③ふしのまきわり。④富士の巻紙。⑤武士のまきわり。

ちなみに、曾我兄弟の名前は、兄が蘇我十郎祐成（すけなり）、弟は蘇我五郎時致（ときむね）。仇討をテーマにした「曾我物語」が幸若、能、浄瑠璃、歌舞伎等多くの舞台で取り上げられ、江戸の人気となり、いくつもの地口を生んだ。

186. 其のため包丁さよふ

元句：其の為口上さよふ



「そのため、口上、左様」と読む。歌舞伎や人形浄瑠璃で「とざい、と一ざい」と東西声に続いて配役を述べた後、「そのため、口上左様ッ」と短く結ぶ。この普段使うことのない独特のフレーズが誰もの耳に残っていたほど江戸時代には、歌舞伎や人形浄瑠璃が一般化していたので、地口として市民権を得たものと思われる。蛇足ながら、東西声だけは、歌舞伎の世界に馴染みのない人でも大相撲の結びの一番で聞くことができる。立行司が「番数も取組みましたところ……」と結びの一番を告げる前に、呼び出しが「とざい、と一ざい」と振れるのを聞き覚えがあるはず。

187. だいこく巡禮

元句：西国巡礼



西国巡礼の歴史は古く、養老2年（718）に奈良長谷寺の徳道上人が創設者。多摩西部地区でも江戸時代の年号が記された百番供養塔や西国、坂東、秩父の観音霊場巡りの記念碑、いわゆる巡拝塔が相当数見受けられるが、ここでいう西国巡礼は、近畿2府4県と岐阜県に点在する三十三箇所の観音霊場を巡ると極楽往生できるというもの。

188. たいこう日ではす

元句：太閤秀吉

189. 大楚う提燈精出す

元句：太閤朝鮮征伐



読み方：たいそうちょうちんせいだす

元句：たいこうちょうせんせいばつ

豊臣秀吉は、通称：太閤秀吉ともいう。上記は、太鼓を日で干すという意味。一方、提灯作りにこつこつと大層精出す提灯屋さんもいれば、国内で満足せず朝鮮半島まで覇権を夢見た男もいた。

190. 鯛は道づれ世はなんぎ

元句：旅は道連れ世は情け



鯛は、目出たいに通じるが、なんぎ＝難儀でしめくくるとは、いささか解せないが、背負っている大きくて重そうな鯛では、難儀といわざるを得ない。

191. 鯛はよいものつかいもの

元句：旅は憂いものつらいもの



地口では、良いとし、元句では憂いといい気持ちの上では天と地の差がある。吉事に使われる鯛、ここでは、遣い物としている。この地口行燈は、祭りに歓迎される地口のひとつだ。

交通機関のない昔の旅は、誰も頼れる人がいないため、思うにまかせず憂鬱だし、辛いことと受け止められていた。それに引き替え現代社会は、旅にあこがれを求め、旅に喜びを感じ、旅がビジネスになっている。

192. 大利大利のお雛様

元句：大事大事のお主さま



読み方：だいいりだいいりのおひなさま

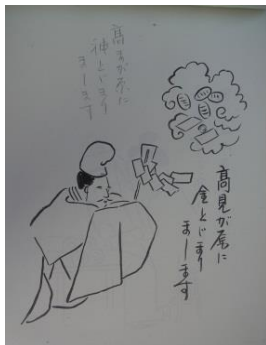
元句： だいいだいいのおしゅうさま

お内裏様とか内裏雛という言葉から縁起良く「大利大利」の文字が使われ、江戸時代、女性が男性に対し、尊敬の念を持って呼ぶ場合、「お主さま」と表現したというが、現代では死語に近い。

元句をたどると、文政8年(1825)初演、鶴屋南北の清元『お染久松』に「子飼いの内から、ご恩を受け、大事、大事のお主さま」というのがある。

193. 高見が原に金とゞまりまします

元句：高天原に神とゞまりまします



高天原と書いて「たかまのはら」と読む。一時代前は「たかまがはら」と読んでいた。神主さんは、どのように言うのだろうか。今も昔も高天原には、神様がおわします。いわゆる神々が住む天上の国のこと。

地口で言う高見が原は、茨城県や群馬県の高見原とは、直接関係なく、単に高みの見物などと使われる高い所の意味ととりたい。金(かね)は神(かみ)を地口ったもので高嶺の花という意味に近く、我々庶民にはなかなか手に入らないからであろう。

194. 竹の内のかつね

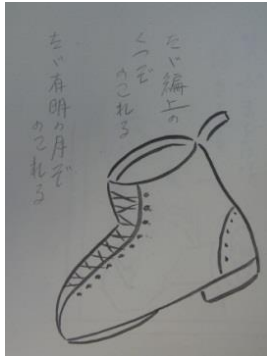
元句：武の内宿禰



人の名前を元句にした地口は、地口集ができるほどある。竹の中〈内側〉から顔を出している狐で「武の内宿禰」と言いたいのだ。近年の事典には、武内宿禰(たけうちのすくね)と記されているが、その表記では地口にならない。百科事典によれば、大和朝廷の初期に活躍した伝承上の人物とあり、ぐだぐだと解説があるが以下省略。羽村市や青梅市に現存する山車の上に載る飾り物の中に神宮皇后と武内宿禰の大きな人形があるので、この地口行燈も祭りには欠かせないものだったに違いない。しかし、近年この絵を見ることはないのが残念だ。

195. ただ編上のくつぞのこれる

元句：ただ有明の月ぞ残れる



小倉百人一首でおなじみの後徳大寺左大臣の作「ほととぎす鳴きつる方を眺むれば ただ有明の月ぞ残れる」が元句。平安歌人は、風流を求め、徹夜して朝一番にほととぎすの声を聴いたという。有明の月とは、陰暦16日以降の月で明け方でも空に残っている月のこと。地口でいう「ただ編上げの靴」には、なぜか、軍隊の編上げの靴が思い当たるのは、歳のせいだろうか。編上靴（へんじょうか）と読むと、旧陸軍の兵隊用の軍靴のことだが、ここでは、「ただ編上げの靴ぞ遺れる」とは読みたくない。

196. 玉五両

元句：多摩御陵



玉（宝珠）が5個で五両。しかし、元句多摩御陵とは、八王子市にある大正天皇陵のことで昭和2年（1927）奉葬。江戸時代から明治に変わった時点で貨幣制度も変わったはず。そんなことはどうでもいいと、地口の世界では5両と無責任なところが楽しい。

197. 玉の内の権助

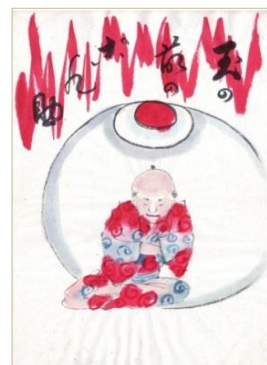
元句：玉の落の権助



大きな宝珠の中でうつむき加減に座す男。「玉の内の権助」をネタに権助を宝珠の中に取り込んだところに違いを見せたものか。あるいは、近隣の日の出町内に獅子舞で有名な玉の内という地名があることからヒントを得て玉の内の権助となった可能性も否定できない。日の出町玉の内会館の前に巨大な玉石と鐘子石が並べて置かれている。この巨石は、新編武蔵風土記稿にも記事がある。

198. 玉の前のごん助

元句：玉藻前の狐？ 釜の前の三助



平安時代に鳥羽上皇に仕えた絶世の美女の名前が玉藻前（たまものまえ）、あるいは玉藻御前と呼ばれた。実は白面金毛九尾の狐が化けた伝説上の人物という設定。玉藻前を扱った人形浄瑠璃や歌舞伎は数多く、近松半二や式亭三馬なども筆を染めている。このような事情から、江戸の庶民の間で大いに関心が持たれたものと思われる。玉の前＝玉藻前、ごん助→こん助＝狐 と解すれば、元句にたどり着くのでは？

ところが、歌川国宅描くところの地口繪手本に「玉の前の三助 元句：釜の前の三助」というのがあり、稲荷でおなじみの大きな宝珠の前に風呂屋の三助（釜焚き男）が描かれている。ごん助と三助の違いだけで九尾の狐とは関係なく、深い意味はないのかもしれない。

199. たらいに顔を見合せて
200. たらいの底を打あけて

元句: たがいに顔を見合わせて
元句: 互いの心を打ち明けて



201. だるま大酒

元句: 達磨大師



達磨大師は、禅宗の始祖。偉い坊さんと言えども、江戸っ子にあっては適わない。大酒呑みにされてしまう。良寛和尚の「今日もさけさけ 明日もさけ」(これは下の句)が思い出される。ちなみに、良寛様の面目にかけても、上の句を書き加えておくと、「お酒呑む人 花ならつぼみ」を忘れてはならない。

“お酒呑む人花ならつぼみ 今日もさけさけ明日もさけ”

202. たわらあやしやなあ

元句: あらゝあやしやなあ



伊達騒動を扱った『伽羅先代萩 (めいぼくせんたいはぎ)』は、歌舞伎や人形浄瑠璃で演じられた。その一場面・床下の場で巻物をくわえた大鼠が現れる。それを見つけた忠臣・荒獅子男之助が大声で「あらら、怪しやなあ」と叫ぶ場面がある。大鼠が姿を消し、煙の中に実は敵方の仁木弾正が現れる。この荒事の場面、歌舞伎役者も観客も一体となるクライマックスだったに違いない。このような経緯があり、地口が作られ、行燈になり、祭を彩るに至ったのである。

(注) 伽羅: 上等の香木にちなんで上等品の意味。一説に、伊達家の主が伽羅下駄で遊郭に通ったと言う。 伽羅=銘木 (めいぼく) か?

203. たわらとんだ

元句: 俵藤太

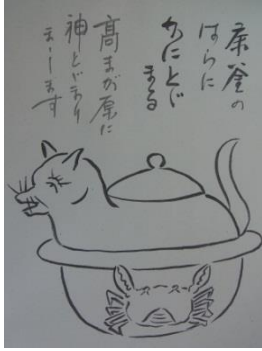


この地口絵は、身体に羽が生えた男の頭部が俵になっているのがユニークで面白い。あきる野市深沢には、類似句で「飛んだ平八郎 元句: 本田平八郎」というのがある。江戸時代には、人名地口や地名の地口が数多く見受けられ、歌舞伎役者や江戸名所が読み込まれている。

なお、阿蘇神社の東京都指定天然記念物のシイノキは、藤原秀郷、またの名を俵藤太が植えたという伝説がある。

204. 茶釜のはらにかにとどまる

元句:高まが原に神とどまりまします



茶釜の腹に蟹を描いて「茶釜の腹に蟹」と言っている他愛ないものだが、上半身は、たぬき。ぶんぶく茶釜をイメージした面白い絵になっている。高天原については、No.290 高みが原…を参照。

205. 朝鮮飴

元句:朝鮮飴



鉛筆書きで「朝鮮阿免」と添え書きがあるので、朝鮮飴を調べてみると、九州熊本市に天正年間創業という元祖朝鮮飴の老舗があった。朝鮮飴由来記によると、元の名は、長生飴だった。加藤清正が保存食として朝鮮に携行して以来、朝鮮役を記念して朝鮮飴と名前を変えたとのこと。この地口ができた頃、実際に西多摩の片田舎で朝鮮飴を食したかどうかは不明。

206. 月とスッポン

諺 (ことわざ)



どちらも丸い点では、似ているが大きな差がある場合に用いる比較用語。英語で表現すると「Day and night」。なんとも味気ない表現だ。それにしても月に対してスッポンとは、じつに楽しげな表現といわざるを得ない。

スッポンは、決して丸くないということから、「月とぎぼん」が訛ったものとする説もある。このほうがどちらも丸くて黄色で類似点がありながら、大きな差がある点で説得力はある。

207. 月に投げ草に捨てるや踊りの手

川柳



「俳風柳多留拾遺」に載っている川柳「月に投げ草に捨てるや踊りの手」が元句。「俳風柳多留拾遺」とは、10編10冊からなる川柳集で、古今前句集(寛政8～9年・1796～97)刊の改題本。文言の違いを比較すると、「捨てるや」と「捨てる」とでは、前者が勝っていると思う。

多摩地域に残る地口行灯の中に、川柳が登場するのは、さほど珍しいものではない。むしろ、地口ではない川柳が入り込むこと自体、多摩系行灯の特徴ともいえる。この川柳がどのようなルートで羽村に入って来たのか気になるところだが、「俳風柳多留拾遺」の文化が羽村に根をおろしたことに驚きを隠せない。これを盆踊りと見れば、踊り手が月に向かって手をかざしたり、月影が映し出す踊り手の蔭が草むらに走り、詩情豊かに描き出された秀句である。

208. 鶴の昼まで朝寝坊

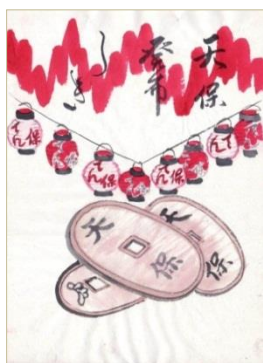
元句：露の干ぬ間の朝顔を



浄瑠璃では「傾城筑紫琴」、「生写朝顔話」の名前で。歌舞伎では「生写朝顔話」あるいは「生写朝顔日記」として上演された通称「朝顔日記」の中に熊沢蕃山の作といわれる「露の干ぬ間の朝顔を照らす日陰のつれなさにあわれひとむらの雨のはらはらと降れかし」という歌が元になっている。

209. 天保発布式

元句：憲法発布式



読み方：てんぼうはつぶしき

日本帝国憲法は、明治22年（1889）2月11日に発布式典が明治21年に旧江戸城西ノ丸に竣工した明治宮殿でおこなわれた。式典の様子は揚州周延の浮世絵「帝國萬歳憲法発布略圖」や「憲法発布式之圖」に描かれている。明治の人々にとっては、憲法発布という言葉は、新知識だったし、天保銭でおなじみの言葉「天保」に置き換えるのは、ごく当たり前だったに違いない。

210. 道具屋おつな玉見てほめる

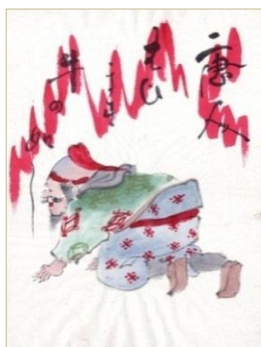
元句：十五夜お月様見てはねる



元句は、誰でも知っている童謡「うさぎ うさぎ」から。むかし、道具屋。今、骨董屋、あるいは、アンティーク店の主人が骨董価値のありそうな赤い玉をつまんで見ている絵が添えられている。似たような地口で嘉永2年（1850）の地口画手本に『道具屋お月様見てほめる』がある。なお、羽村提灯店には、もう一枚下絵がある。表具屋が刷毛を片手に月に向かって跳ね、「表具屋お月さん見てはねる」というもの。

211. 唐人はひます牛の如し

元句：提灯たいまつ星の如く



唐人とは、唐の国の人という意味。体格の良い外国人が四つんばいになって這っている様子から提灯や松明とは思ってもよらない文言。ちょうちんやたいまつが遠めに星のように見えてもしたら、京都の大文字焼きや真言宗の星祭り風景でもあろうか。

212. 徳利と思案

元句：とくと思案



読み方：とくりとしあん

「玉の内のごん助」と同じキャラクター。とっくりを手前に一升ビンのように大きく描き、ご本人が大きな玉の中に納まっている。ごん助は、玉の前に描かれていたが、こちらは、玉の中で思案中。

213. とろろの摺古木置き処に困り

川柳



とろろとは、自然薯や山の芋本体を播鉢で摺るが、播粉末を用いて播り潰す場合でも粘着質性のあるとろろがまとわり着いて処置に困る。

普段の生活の中の出来事でさえ、川柳となり、地口行灯にまでなるところがおおらかでのんびりしている。これも大正時代の産物か。

214. 戸蹴ったばあさん

元句：とぼけたばあさん



戸を蹴り挙げた元気な婆さん。古くから「とぼけた婆さん小桶で茶あ飲み」という言葉があるくらいだから、とぼけた婆さんは、身近なところにいたのかもしれない。青梅市小曾木の岩蔵温泉に近い御岳神社の地口行灯にも「戸をけたばあさん」の地口絵がある。

なお、とぼけた婆さんの出典を調べてみると、いくつかの地口絵手本に書かれているが、古いものでは、幕末の弘化年間のものもある。

215. どんなり正午

元句：論より証拠



読み方：ドンなり正午 ろんよりしょうこ

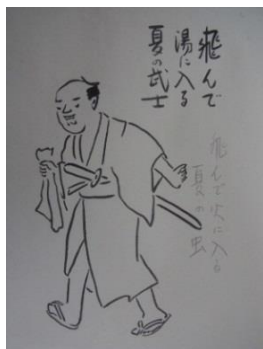
明治時代の1871年、午砲の制度により皇居内で正午に大砲(空砲)を撃って時を知らせた。その音から丸の内のドンと呼ばれた。

ちなみに、午砲の元祖は、イギリス。世界中に植民地をもつイギリスは、船舶に正確な時間を知らせるために港湾に午砲台を設置して空砲を撃ったという。なお、針が正午を指している時計は、誰にでも分かるが、手前に描かれている丸い蓋付きの容器は、「お櫃(おひつ)」。朝炊いたご飯を冷め

ないように入れておく。今でいう炊飯ジャーのジャーにあたるもの。小さな台は、「お膳」。茶碗とお椀がのっているが、箱前などと呼ばれ、これで昼ご飯を食べることになる。

216. 飛んで湯に入る夏の武士

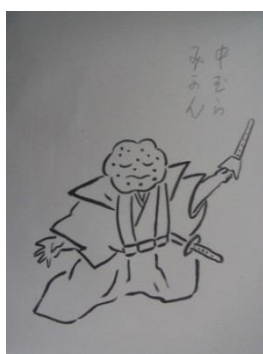
元句：飛んで火に入る夏の虫



元句本来の意味は、夜間、火をともしていると、灯りに引きつけられてロウソクの火などに虫が飛び込んで焼け死ぬことから、自ら渦中に身を投じることを言う。ここでは、飛んで湯に入るのは武士。浅草伝法院通りにある地口街路灯の武士はまさに空中を飛んでいるが、羽村の地口絵では、常識の範囲内。飛んでと言ってもいろいろある。急いでという意味で走っている。ちなみに、①とんだ、②とんでもない、③とんでもないこと、④とんでもございませぬ。これら四つについて使い次第で意味が違うから日本語は難しいやら、ややこしい。うまく使い分けたいもの。

217. 中むらみかん

元句：中村芝翫(なかむらしがん)



男の顔は、まぎれもなく、みかんそのもの。地口絵には、顔がオシドリだったり、鈍豆、ナス、ひょうたん、梅の花、中には馬面まである。「中むらみかん」というフレーズとみかん顔の地口絵から判断して考えられるのは、武士か役者。しかし、中村と言えば、歌舞伎役者が思い浮かび、中村芝翫に行き着くことになる。

明治、大正、昭和初期に活躍した中村姓は、5代目中村芝翫と思われる。5代目は、後に中村歌右衛門を襲名している。

218. 長生きのおかげでテレビ面白い

川柳



NHKのテレビ放送開始は、昭和28年(1953)。昭和30年代に相撲やプロレスを街頭テレビで見たという方も多はず。この川柳にある長生きのおかげで面白いというテレビは、おそらく昭和30年代であろう。

219. なたまめのつな

元句：渡辺の綱



鈍豆と書く、福神漬けでおなじみのマメ科の果菜で、その大きさからこの地口では、すべて韻を踏んでいるのが特徴。

元句の渡辺の綱とは、平安時代中期の武士で源頼光の四天王のひとり。大江山で源頼光が四天王とともに酒吞童子を退治。御伽草子をはじめ草双紙、浄瑠璃、歌舞伎などで多くの人々が渡辺の綱の名前を知っていたし、羅生門の鬼を退治した有名人でもあることから、地口上の人物としては、誰もが簡単に元句と結びついたものと思われる。

220. 夏の夜みち扇ももとう
 221. 夏の夜道おゝぎの夜燈
 222. なすの用心扇のまど

元句：那須の与一扇の的
 同上
 同上



平安時代末期の武将で、弓の名人とされ那須与一（なすのよいち）は歴史上、名のある武将ではあるが、後世に書かれた平家物語や源平盛衰記に名前が出てくるのみで一種謎の人物とされている。源平合戦の折、源頼朝軍にあって屋島屋島の戦いで平家方が掲げた扇の的を見事射て名を挙げた

ことで知られる。なお、男の名前は、一郎から始まり十郎までであるが、11番目は余り一の意味で与一と名付けられた。

223. なっば六十四

元句：八八六十四（ $8 \times 8 = 64$ ）



掛け算から地口を考えると、三枝十二、獅子十六、午後二十五など、いくつでも考えられる。初心者の地口遊びの手本になりそう。

224. だんご十五

元句：三五十五
 ($3 \times 5 = 15$)

225. 七転び八起

諺（ことわざ）



地口絵は二つ。左の爺さんは、素直に「ヤッター」という感じだが、なぜか右の絵は、意地悪ばあさんのイメージがあり、心持ダルマさんにも元気がない。

226. 七転び八起は人の浮世なり

諺（ことわざ）



七転八起とも言い、七回ころんでも八回起き上がり、たび重なる失敗でもがんばって奮起すること。このようなことは、人生には必ずついて回るものだ教えている。これは、地口ではなく、本音の話。

地口絵としては、だるま以外は考えられないが、羽村市周辺の瑞穂町、青梅市、八王子市には、だるま職人が健在。

227. 浪花節ポンと叩けば二十年

228. 浪花節ポンと叩けば十余年



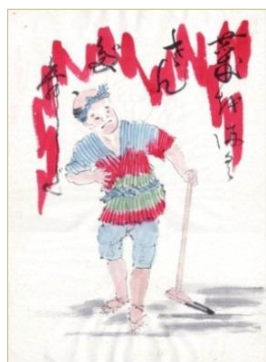
川柳

〃

明治時代の初期に大坂の芸人・浪花伊助の名が有名になり、演者の名前から浪花節と名づけられたという。古くからの浄瑠璃や説教節等が大道芸として広まったとされている。ポンと叩けば20年とは、年月の移り変わりを扇子一つで演出する技を意味しているもので10年でも30年でも同じことだが「浪花節ポンと叩けば十余年」というのもあり、文字数と聞き心地のよい20年に収まったものと思われる。

229. 菜をまくさんだ舞だ

元句：のうまくさんまんだ

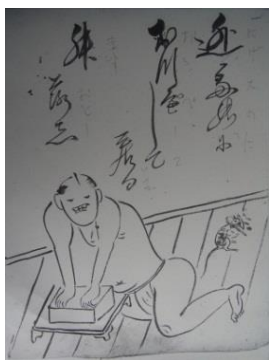


読み方：なをまくさんだんだ

真言密教での唱え言葉で釈迦如来や、大日如来、不動明王等に祈願するとき唱えるもので何度も繰り返して唱えることから耳に残り、親しみやすさから地口言葉として「菜を蒔く算段だ」となったものと考えられる。

230. 逃たのにおっぺして居る枡落し

川柳



読み方：にげたのにおっぺしているますおとし

おっぺす=押すの協調語。最近では耳にすることがなくなった「おっぺす」とか「かんまあす(かき回す)」という言葉、これも江戸っ子が使っていたのだろうか。埼玉県越生町に行くと河川標識に越辺川(おっぺがわ)というのを見るたびに「おっぺす」を思い出す。

枡落し=枡を利用した簡易なねずみ捕り。昔のねずみは、人間同様、のんびりしていたのか。枡でねずみが捕れたようだ。

231. 煮たものふうふ

元句：似た者夫婦

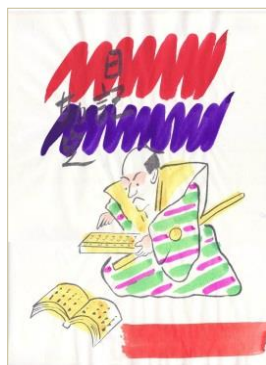


左の下絵には、鉛筆書きで「似たもの夫婦」と元句が添えられている。右の絵は、昭和時代のもので着物の柄に所沢系の特徴がみられる。

けんちん汁の大根の味見でもしているのか、それともつまみ食いなのか、ふうふうと冷ましている女性の様子が様になっている。江戸期のもので「煮たもの豆腐」というものもある。

232. 日記勘定

元句：二木弾正



読み方：につきかんじょう　にきだんじょう
帯刀姿で算盤ばちばち。手前に日記らしきものが描かれているのでさしずめ勘定方の侍か。

元句の二木弾正は、浄瑠璃や歌舞伎で有名な伽羅先代萩（めいぼくせんだいはぎ）に出てくる悪役。三大お家騒動のひとつ、伊達騒動をを題材にしたもので田舎芝居でも取り上げられるほどポピュラーだったために多くの人が「につきだんじょう」の名を知っていた。

233. 盗人の腹

元句：白浪五人男の台詞



白浪五人男の正式名称は、河竹黙阿弥作の歌舞伎脚本「青砥縞花紅彩画（あおとぞうしはなのにしきえ）」。そもそも白浪とは、盗人のこと。「問われて名乗るもおこがましいが…」ではじまり、「さてどんじりに控えしは…」の南郷力丸の台詞（セリフ）に「太えか布袋か盗人の腹は大きな肝っ玉」というのがある。

ちなみに、羽村提灯店の資料の中には「さてどんぶりに控えしわ」と言う地口があり、現在でも祭礼時に行燈を見ることができる。

234. ぬらされた雲を峠で踏みのめし

元句：不詳



残念ながら、元句は解けないが、地口をまともに読んでも楽しい一句。旅人が野路を歩いているとにわかには雷雨に襲われ難儀したが、やっとの思いで峠にさしかかると雨を降らせた雲の高さまで登ってきた。この雲め、と踏んづけて憂さを晴らしたというもの。

235. ねへあなたいんげんはなぜにるのでせう

元句：ねへあなた人間はなぜ死ぬのでせう



読み方：ねえ、あなた、いんげんは、なぜ煮るのでしょうか。
いんげんとは、一説に隠元禅師由来の「隠元豆」のこと。下絵の隅に（小説ホトトギス）とあるのは、徳富蘆花の代表的家庭小説『不如帰』に題材をもとめたもの。この小説には、モデルがあり、大山巖元帥の長女と相手の子爵との実話と言われ、日清戦争が舞台で明治31年（1898）から翌年にかけて国民新聞に掲載されたもの。

小説の中でヒロインの浪子が「ああ、人間はなぜ死ぬのでせう」とか、「ねへあなた早く帰って頂戴」と言う場面がある。

236. ねこをしようとお姿を

元句：回向しようとお姿を



読み方：猫をしよう（背負う）とお姿を。

下絵の隅に（二十四孝芝居）とあることから近松半二らの合作の浄瑠璃「本朝二十四孝」にヒントがある。中国の二十四孝にならって、本朝とは、日本のという意味で日本版二十四孝。この作品は、明和3年(1766)初演で後に歌舞伎化された。武田・上杉の争い、斎藤道三、山本勘助、勝頼、八重垣姫らが登場する複雑な人間模様を描いたもの。元句は、八重垣姫が勝頼の絵姿に十種香を手向けて回向している様子を地口にしたもの。

237. のどのかに野ぎつね

元句：能登の守則経（教経）



地口絵では、狐の喉に蟹がはさみでぶら下がり、能登守をじぐって「のどのかに」となっているところが見どころ。

官位が能登守でノリツネと同音の者は、平家一門の武将として平家物語に出てくる平教経（たいらののりつね）しかいない。彼は、武勲の誉れ高い武将で源義経のライバル的存在だった。教経については、平家物語の記述が主で倶利伽羅峠の戦いや六箇度合戦に名前が残っている。

238. 呑む大酒三升五合

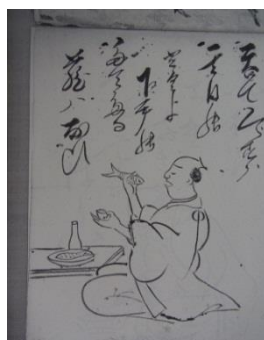
元句：南無大師遍照金剛



元句の南無は、信じる心を開いて帰依するとかお任せするという意味で、大師とは弘法大師のこと。遍照金剛は、大日如来の別名とされ、弘法大師は、大日如来との縁で出家したので大師遍照金剛とは、弘法大師空海のこと。徳の高い僧侶に贈られる大師号は、「大師は弘法に、大公は秀吉に」と揶揄されるように大師といえば、空海の名前そのものになってしまったもの。それにしても、弘法大師が大酒のみだったかどうかは別として、恐れ多くも大酒三升五合とは、いささか口が過ぎるかも。

239. 呑んでくらすが其日のとくよ下戸がたてたる蔵はなひ

元句：世間胸算用



井原西鶴の『世間胸算用』に「世の中に下戸が建てたる蔵はなしと歌ひて又酒をぞ飲みける」とあり、下戸即ち酒を飲まない人が建てた蔵はないと酒飲みに都合のいい言いぐさである。左の地口絵の男は、右手に肴、左手に盃を持ち、まさに呑兵衛の代名詞・左利きである。

井原西鶴の西鶴は俳号。俳諧師ながら好色一代男で浮世草子作家デビュー。世間胸算用は、副題に「大晦日は一日千金」とあり、商人とそこに住む町人たちの暮れの様子を20章に分けて描いた短編小説集。全編を通して西鶴流の笑いとペーソスが読む人を楽しませてくれる。

240. はだかの弁慶

元句：安宅の弁慶



鎌倉幕府の史書『吾妻鑑』に源義経の従者に武蔵坊弁慶の名があり、『義経記』には詳細な経歴が記されているが、実在の人物としての確証はない。

歌舞伎十八番の一つ「勸進帳」で広く知られ、左の地口絵もはだかとあたかをかけたもので、裸の弁慶が安宅関で勸進帳を読み上げている姿が描かれている。

241. はなし家はさ湯をのみのみ浮れ出し

川柳



落語演芸もなかなかがんばっている昨今、「はなし家」という言葉も死語になりつつあるようだ。古今東西、落語家は話芸だけでは食っていけないのがご時世。身ぶり手振りがものをいうし、扇子や手拭いの使い方までもが評価される。特に湯茶の飲み方、酔っ払い方で観客から拍手が起こる場面がいい。

242. 花嫁だんご

元句：花よりだんご

243. 花より酒だ

元句： 同上

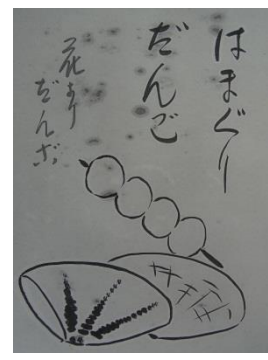
244. 花よりだんご

元句： 同上

245. はまぐりだんご

元句： 同上

花よりだんご四部作。誰にでも分かり易い地口の代表的なもので、花嫁が団子に目をやり、酒だと言ってひょうたん徳利と酔っばらって目が座ったお面、大口開いて今まさにだんごを頬張らんとしている女性。「はまぐりとだんご」これがいちばん地口らしい。



246. 花をたつねて日もすがら

元句：花を訪ねてひもすがら



この句を川柳とすれば、夜もすがらに対して日常ではあまり使われていない日もすがらという言葉在意図的に使ったものかもしれない。終夜と書いて夜もすがらと読ませるが、終日と書いて日もすがらとも読む。「すがら」には終わるまでという意味があるので一日中とか夜通しというときに使われることが多い。同じように、一日中とか終日という意味でひねもすという言葉がある。与謝蕪村の「春の海ひねもすのたりのたりかな」という俳句は、ひねもすをうまく表現している。

247. 放れ馬 大手をひろげては逃げる

元句：駒が勇めば花がちる



元句ではないが、「駒が勇めば花が散る」と添え書きがある。実は、こんな話がある。もちろん江戸時代の物語。八王子に住む馬喰の娘「いく」が江戸へ花見に来た折り、暴れ馬を大手を広げて止め、おとなしくさせ、その馬を桜の木につないで、素知らぬ顔して去って行ったという。この話が巷に広まり、「咲いた桜に……の唄が生まれたとか。

なにぶんにも、江戸初期にまとめられた山家鳥虫歌集に掲載されている歌詞のことを百数十年後に書かれた「黒甜瑣語」という随筆にあるという。司馬遼太郎「竜馬がゆく」にもこの唄が引用されている。

248. はなればなれを丸くする

川柳



職人が桶づくりをしている絵柄。その昔、桶屋といえば、自ら木を仕入れ、刻んで割り板を作り、組み立て、そして売るまで全工程を担っていた。この絵では、すでに組み立てつつある桶の形になっているが、離れ離れの割り板を接着剤も使わずに竹釘でつなぎ水も漏らぬ桶に仕上げる技に注目している。今や、桶づくり職人は、日本の伝統工芸では、無形民俗文化財の継承者として貴重な存在。

249. 腹よりだんご

元句：花よりだんご



腹と花の違いだけだが、絵をよく見ると、腹からだんごの包みを出している絵だ。そこに笑いを求めて描かれたもの。

羽村市内神社の祭礼は、4月の桜花咲く時期なので、花よりだんごの地口が5種類もある。

250. はらよりほかにへるものはなし

元句：花よりほかに知る人もなし



地口は、いささか通俗的過ぎるが、元句は、なんと、金葉集に載っている平等院前大僧正行尊の和歌。しかも小倉百人一首にも選ばれた知る人ぞ知る秀作「もろともに あはれと思へ山桜 花よりほかに知る人もなし」である。下絵は、同じでも左側の絵は昭和、右側の絵は平成時代に描かれ、甕垂れ霞の意味を知らない書き手が描いたもの。

251. 判官のつつく

元句：判官の切腹



仮名手本忠臣蔵四段目に判官切腹の段がある。塩冶判官高貞（浅野長矩の役名）が命により切腹させられ、残った大星由良助（大石内蔵助）が主君の仇・高師直（吉良上野助義央）を討つ物語。

一般に言われている『忠臣蔵』は、時代背景や人物配置が複雑で後世の者には分かりにくい。仮名手本忠臣蔵は、寛延元年（1748）初演で竹田出雲、並木宗輔らの合作。当時の江戸幕府は、このような事件を扱うことを固く禁じていたので、その目を逃れるため、鎌倉時代の実在した人物名や時代背景を設定して物語を創作した。江戸の町人たちは、判官のつつくから忠臣蔵と結び付けることは、いとも簡単なことだったと思われる。

252. 半帖買って銭とらず

元句：勘定あって銭たらず

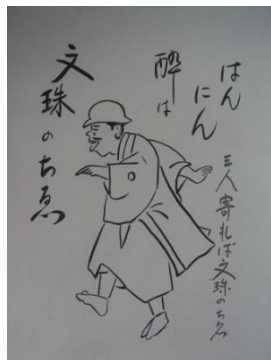


元句は、勘定は合っているが現金が足りない。社会生活の中では、理論と実際とは理屈通りにはいかないという意味。半帖（はんじょう）の帖とは、紙や海苔などを数えるときの単位。美濃紙は 48 枚、半紙は 20 枚、海苔は 10 枚を 1 帖と数える。

※ 正しくは、銭とらず→銭たらず

253. はんにん酔いは文殊のちゑ

元句：三人寄れば文殊の智恵



地口の「はんにん酔い」とは、理解に苦しむが、絵から分かることは、酔っぱらって一人前には歩けない様子。下の句があるからこそ、「三人寄れば文殊の知恵」と結びつく。我々凡人でも三人で考えれば、いい知恵が浮かぶと昔の人は言ったが、同じ三人でも「三人寄っても下種は下種」というものもある。ところで、文殊菩薩だが、釈迦如来の脇侍で大陸から獅子に乗って日本にやってきた仏様。知恵をつかさどるとされている。ついでに釈迦如来の脇侍の普賢菩薩、白い象に乗って来た。それ故、日本の仏教建築には、獅子と象の彫刻が見られるのだ。

254. 人は見目よりたゞこゝよ

元句：人は見目よりたゞ心



この絵をまじめに見れば、人を見るときは、見栄えではなく、ただ心だよと言っている。しかしながら、地口心を發揮して、執拗に絵から読み取るとしたら、女性の右手がゆび指しているのは、左ひざを上げたその先を「ただここよ」と言っている。江戸っ子は、意外とストレートなところが、男心をくすぐるところが面白い。

255. 独り者蚊帳をまるめて仕舞なり

川柳



21世紀、我が国では、ほとんど蚊帳（かや）を使う家は無くなったというが、絵にあるような蚊帳は畳み方がむずかしい。心当たりのある方も健在のことと拝察する。ところが、このご時世、薬漬けを嫌ってか、徹底的な薬剤散布が行われなくなったので、自然豊かな環境下では、蠅は少ないが蚊は健在。そこで一人用の蚊帳に意外と人気があるらしい。

お目にかかることの少ない蚊帳ではあるが、「蚊帳の外」という言葉は今でも聞くことがある。こちゃえ節、あるいは、お江戸日本橋ともいう遊び唄に「お前待ち待ち蚊帳の外…」というのがあり、地口にもなっている。

256. 日なしかりたら一分の高利

元句：東上総は夷隅の郡



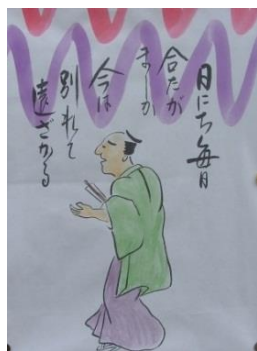
元句の読み方：ひがしかずさは いすみのこおり。

千葉県房総の東上総地域とは、茂原市、東金市、いすみ市など。文化年間（1804～18）に大道芸として四つ竹節が流行し、「東上総の夷隅の郡…」と歌われたという。

ところで、「日なし借りたら一分の高利」とは、金を借りるのに利息が一日一分とは高利だと言っているもの。ことのついでに、その昔、ヒバリは天空のおてんとう様にお金を貸したが返してくれないので、今でも太陽に向かって空高く舞い上がり、「ヒイチブ、ヒイチブ、リイトル、リイトル」と鳴くとか。漢字で書けば、「日一分、日一分、利取る、利取る」。

257. 日にち毎日合たがましか今は別れて遠ざかる

都々逸



下絵は同じだが、左は灯りを灯したもので、瓶垂れ霞を欠く。左は、平成時代のもので瓶垂れ霞の描き方が大胆ではあるが、雑な描き方と見た。

258. 百人の帳本をする定家卿

元句：不詳



定家卿とは、藤原定家のこと。百人一首の選者であるが故に、地口では、百人の帳本としたもの。張本なら、元句を悪人の張本（事件の元）と読み替えたいところ。

259. ひょうたんかんざし買ひに来た

元句：ぼんさんかんざし買ひに来た



江戸時代末の安政2年（1855）、明治になる2年前のこと。純信という坊さんが銚掛屋の娘・お馬に恋をした。高知城下のはりまや橋のたもとにある小間物屋で毛のないはずの坊さんがかんざしを買ったことが発覚し、巷の話題となった。そして、「土佐の高知のはりまや橋で坊さんかんざし買うを見たよさこいよさこい」と、ついには、座敷歌として全国に知れ渡り、今では、れっきとした高知県民謡となっている。

260. ひょうたん徳利と

元句：相談とっくりと



ひょうたんの形をした徳利で飲む酒は格別だという酒好きの御仁には、悩み事は皆無かもしれないが、仕事や人間関係でつまづいたら、酒ぬきでとっくりと相談してみてはいかが？
ひょうたん→相談。徳利と=とっくりと。 簡潔で判り易いのがいい。

261. 屏風の急からみすまもる

元句：上手の手から水がもる



読み方：びょうぶの絵から御簾まもる

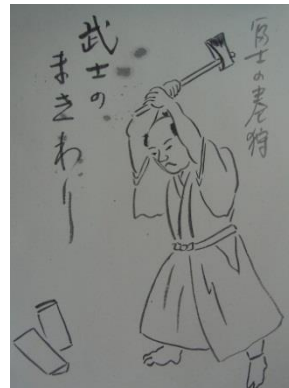
どんなに上手な人でも失敗はある。巧者の手から水が漏れるとも言う。早い話が、猿も木から落ちると同じこと。

この地口絵では、武士が屏風の前に座って御簾を見つめている。御簾とは、神殿や御殿などで用いる簾のこと。ここでは、屏風に描かれた御簾の絵を守るとりたい。

江戸期の地口繪手本には、「女郎の手から水がもる」とか「坊主の手から水がもる」などと言うのもある。

262. ふしのまきわり
 263. 富士のまき紙
 264. 武士のまきわり

- 元句：富士の巻き狩
 元句： 同上
 元句： 同上



左：ふし(節)とは、樹木の枝が出て節となった部分で男が手斧で薪を割っている。
 中：富士山と巻紙を描いて、文字がなくても当時の人には理解できたようだ。
 右：武士の薪割り。これが最もじぐち(似口)に近い表現だ。

元句の富士の巻狩りとは、建久4年(1193)5月、源頼朝が富士山麓で催した大規模な狩猟のことで当時にしてみれば、軍事訓練みたいなもの。狩猟場を四方から取り巻き獲物を捕らえるので『巻狩り』と言う。謡曲・夜討蘇我に「富士の巻狩りをさせられ候」とあるように、巻狩りの折に曾我兄弟の仇討が行われた。600年以上も前の事件に江戸庶民が関心を持つようになったきっかけは、曾我物語を歌舞伎化したことによる影響が大きかったことは言うまでもない。

265. ふで見加藤

元句：不死身加藤



加藤清正は、安土桃山時代~江戸時代初期の武将。豊臣秀吉に仕え中国征伐に従軍。因幡、備中、摂津山崎、丹波亀山へと転戦勝利し、不死身の名を築いた。

地口絵では、槍を持った武士が筆を見つめている。ふで見=不死身。これで見る人に加藤清正と分かってもらえることになる。

266. 筆見さいぎょううしろむき

元句：富士見西行後ろ向き



加藤清正が筆を見て不死身なら、こちらは、西行の後姿を描き、筆を見て富士見と言っている。

西行法師は、平安時代初期~鎌倉時代の武士・僧侶・歌人で京都や高野山に居を構えることはあったが、多くは諸国を行脚し、鎌倉で源頼朝にも会い、奥州に2度も旅しているのが当然のことながら、富士山を見ているはずだ。

267. 太いやつから先にしばれ大根あみ

元句：太いやつから先にしばれ大根河岸



大根を干すときに縄で結わえて何本もつるす場合の編み方は、太いものから先にしばれと教えているもの。ここで言う大根河岸は、魚河岸に対して川岸の青果市場のことで通称“やっちゃば”とも言う。言ってみれば、築地の中央卸売市場の前身のようなもの。現在、京橋三丁目に京橋大根河岸青物市場跡の碑がある。

268. 肥り娘のすゞみが上手

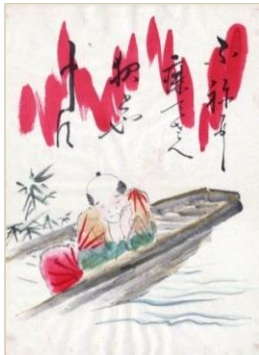
元句：一人娘の鼓が上手



弘化4年の『地久知画でほん』と嘉永元年の『御祭礼ちぐちあんどん』に「ふとりあねさん茶つみが上手」と、弘化4年の地久知画手本に「ふとり姉さん下谷へござる」の二つから、読み取れることは、ふとり姉さんとは、鈴木春信描くところの下谷のお仙茶屋の娘・お仙のことではなかろうか。羽村の地口は、二番煎じで肥り娘になってしまい、茶摘みではなく、すゞみに変わっている。

269. 舟に寝てさえ夜とや申す

元句：夢に見てさえよいとや申す



山崎美成の三養雑記に類句がある。「梅は見てさへ醋いとや申す→元句:夢に見てさへよいとや申す」。佐渡に残る行事で、新年に各家々を門付けして回る『春駒』の歌詞に「夢に見てさえ良いとや申す」というのがある。

270. 文は小僧のつかへ

元句：夢は五臓の疲れ



つかへ=使い→疲れ 弘化4年の地久知画でほんに同じ言葉がある。五臓とは、肺、肝臓、心臓、脾臓、腎臓のこと。夢を見るのは、これら五つの臓器の疲労が原因だという。一般的には俗信とされているが、医学的見地からの証明は未だされていないようだ

271. ふられて帰るあほうもの

川柳



ここでは、絵にあるように雨に降られたがために、強風の中を裸足で急いで帰る男が描かれている。夜遊びの果ての朝帰りか、賭け事に負けて、すっからかんでの帰り道かは、知る人もない。

272. 兵隊さんにありがとう

詞



昭和13年（1938）、朝日新聞の懸賞募集で佳作に選ばれた。原題は、「兵隊さんよありがとう」。翌年、コロムビアレコードから発売され、親しみやすい歌詞やメロディーから流行歌として多くの人々に歌われた。ちなみに、このときの入選一等作品は、「父よあなたは強かった」。

273. 糸瓜のけんしん

元句：越後の謙信



地口絵は、頭部を糸瓜（へちま）にした謙信が描かれている。ほかに「くいすぎけんちん」「一合にけんちん」などがある。「けんちん」という言葉には、けんちん汁をイメージして親しみやすかったのかもしれない。ちなみに、へちまの別名は「唐瓜（とうり）」。いろは四十七文字の「と」は、「へ」と「ち」の間だから「へちま」なんだとか。駄洒落大好きの江戸っ子に受けそうな話。

274. 弁慶はだかのせき

元句：弁慶安宅の関



安宅の関の所在地は、石川県小松市安宅にある。兄頼朝に追われた義経と弁慶主従は、ここ安宅の関で疑念を持たれたが、弁慶の機転で東大寺の復興勧進と称し、何も書いてない勧進帳を声高々に読み上げたり、義経が疑われたとき、弁慶は、主の義経を金剛杖で叩きのめしたりした因縁の場所。このとき、関守の富樫左右衛門泰家は、気付きながらも弁慶の忠義心に心打たれ、主従を見逃してやった。この物語を脚色した歌舞伎「勧進帳」は、今でも人気がある。

275. 坊さん玉見てたまげたところ

元句：坊さん山道破れた衣



地口絵では、坊さんが飛んできた大きな宝珠にびっくりして腰を抜かしたように倒れている。

元句では、坊さんが西行法師や良寛和尚のように旅の途上で破れた衣に身をつつみ山道をとぼとぼ歩いている様子。昔の旅は修行そのものだったようで、「旅は憂いもの辛いもの」と言われていた時代があった。

なお、弘化4年版の『地久知画でほん』には、「ぼうさん玉見てたおれた処」とあり、3個の宝珠が描かれている。

276. 坊主がひくけりゃ下駄までひくい

元句：坊主がにくけりゃ けさまでにくい



坊さんが衣姿でしゃがんでいる。背が低いのではなく、しゃがんだ状態でさらに低い下駄を履いているから低いことを強調している。

元句の読みは、「坊主憎けりゃ、袈裟まで憎い」。これは、現代社会でも耳にすることわざ。憎しみを持つ相手に多少なりとも関係があると、すべてが憎くなること。人間関係でも同じ、夫婦の片方が嫌いだと伴侶も嫌いとか、相手が嫌いだとその人が飼っている犬まで嫌いになるというもの。

277. ほう丁とぎまさ

元句：北条時政



北条時政を知る人は少ない。しかしながら、地口になるくらいだから、周知の人だったに違いない。北条時政の出自をたどると、源頼朝の妻・北条政子の父。頼朝亡き後、執権となり北条氏の覇権を確立した人物。

羽村提灯店の地口では、「ほう丁とぎまさ」となっているが、天保13年の『じぐちあんどろ』では「包丁とぎます」とあり、この表記が元になっているものと思われる。

278. 棒でも重さんすいじゃをはる

元句：不詳



袴姿の男・重さんが棒を持って立っている。酔者と読めば、酔っ払っていることになるが、残念ながら元句にまで到達できない。

279. ほうびのお金

元句：おゝぎのおかね



「褒美のお金」にまどわされずに、ここでは、「近江のお兼」と読みたい。女よりお金が大事という選択肢も分からなくはないが……。別の地口で「近江八景」を「扇八景」としているのがあるので、おゝぎ＝近江と素直に読んでおくこととする。

ところで、近江のお兼については、その昔、近江の国に怪力の女性が住んでいた。今で言う近江八幡市篠原の生まれと言われている。篠原といえば、野州晒の産地。お兼は、暴れ馬を片足で抑え込んだ怪力の持ち主だ。

伊豆の長八美術館に足駄を履き、粋な着物姿で馬の手綱を踏みつけている「近江のお兼」の鰻絵がある。一勇斎(歌川)国芳の浮世絵「近江の国の勇婦於兼」は、暴れ馬の手綱を片足で踏んづけて鎮めたという逸話にもとづいて描かれている。

280. ほくちが雨によくしめり

元句：五七が雨に 四つ日照り



昔の時刻で五七の五つは、辰の刻(今の午前8時頃)と戌の刻(今の午後8時頃)。七つは、寅の刻(今の午前4時頃)と申の刻(今の午後4時頃)。四つは、巳の刻(今の午前10時頃)と亥の刻(今の午後10時頃)。

土佐の言い伝えでは、五七＝八時頃と四時頃の地震は雨に。四つ＝10時頃の地震は日照りになると言われている。

(注)：「お七が雨にただひとり」を参照のこと。

◎ほめるシリーズ川柳4部作

281. 褒めながら合点が行かぬ宝物

川柳

282. ほめながら合点が行かずナール程

〃

283. ほめるばかりで読めぬなり

〃

284. 達筆をほめて短冊読めぬなり

〃



左は、絵も文字遣いも古いスタイル。骨董品の良し悪しが判らない若者が年長の持ち主からこれは宝物だよと言われ、褒めてはみたものの今一つ理解できなくて困っている様子が面白い。中2点は、絵柄は同じだが、文言にわずかな違いがある。右は、達筆をほめてはみたが、実は達筆すぎて読めないと言っている。現代人にはなかなか解読できない古文書(こもんじょ)よりも祭り用の地口文字は、洒落た遊び心があるためか、文字そのものが読めないだけでなく、隠された地口解読に苦勞させられる。

たものの今一つ理解できなくて困っている様子が面白い。中2点は、絵柄は同じだが、文言にわずかな違いがある。右は、達筆をほめてはみたが、実は達筆すぎて読めないと言っている。現代人にはなかなか解読できない古文書(こもんじょ)よりも祭り用の地口文字は、洒落た遊び心があるためか、文字そのものが読めないだけでなく、隠された地口解読に苦勞させられる。

285. 本に子守と思いに

元句：本に思えば昨日今日



元絵は、古い地口絵を描き写したものだが、鉛筆で書かれた文字遣いは現代仮名遣いになっている。青梅市小曾木御嶽神社の地口行燈には、旧仮名遣いで「本に子守ハキ乃ふ今日」とあり、弘化4年版の地久知画手本と同文で、さらに元をたどれば、常磐津、歌舞伎などの演目にたどり着くことになる。

286. 蒔かぬ種は生へぬ

諺（ことわざ）



ごく当り前の真実を述べているだけで何の変哲もないと片付けてしまってもいいが、これも時代の変化とともに説明を要する言葉になりつつある。ことわざ辞典や国語辞典に載っているということは、それなりに意味を求める人がいるということであろう。いい意味にも悪い意味にも使える言葉だが、どちらかといえば、何事も行動しなければ、良い結果は得られない。積極的に行動すれば、後から結果がついてくる。めでたし、めでたしとなりたいもの。

287. 馬子にも二升足袋はだし

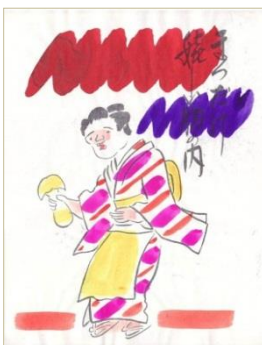
元句：馬子にも衣装髪飾り



寒さ除けの頬かむりの馬子が足袋はだし姿で手に二本の酒をぶら下げている絵は、まさに「馬子にも二升足袋はだし」そのもの。元句の『馬子にも衣装髪飾り』は、一般的には、「馬子にも衣装」という使われ方をしているようだ。

288. まつだけ嬉しい胸の内

詞



松茸にはそれなりの意味もあろうが、ここでは素直に男を待つ身の女心と秋の香りを代表する松茸に思いをはせる女心とを酌んであげたい。

289. 窓より笑ふ下子のむら酒

元句：あとより晴るる野路の村雨

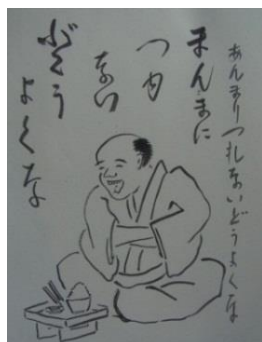


地口と元句があまりにもかけ離れ、二つの間に何の関係も見出せない。このような優れた地口を当時の人は当り前のように作っていたようだが、いずれにしても文学的素養なしには考えられない。村雨→村酒=田舎酒。

元歌の作者は、大田道灌。「急がずば濡れざらましを旅人の後より晴るる野路の村雨」。一方、雨の歌「七重八重花は咲けども山吹のみのひとつだになきぞ悲しき」では、山吹の故事を知らなかったことを素直に恥じたという。実は太田道灌は、千代田のお城の前身、江戸城の主だったこともある。

290. まんまにつめないどうよくな

元句：あんまりつれないどうよくな



まんま=ご飯 つめない=詰めない どうよくな=胴欲な=食欲。

男の前にあるお膳の上には、食器にうずたかく盛られた山盛りのめし。この男、器が小さくてこれ以上詰められないと言っているのか、それにしでは、顔が笑っている。一方、元句では、あまりにも思いやりがなく冷淡でむごいじゃないかと言っているのだ。これは、地口と元句のギャップを楽しんでいるようだ。

291. みかんの多ねをあつめる

元句：無官の大夫敦盛



平清盛の弟・平経盛の子・敦盛は権勢を誇る平家一族の中で一人だけ官位がなかったので「無官の大夫」と呼ばれた。古代から中世の貴族には身分に応じて位階が授けられていた。天上人とは一位から五位までの人で、そのうちの五位の俗称を大夫（たいふ）と呼んだので、官職のない五位は、「無官の大夫」と言うことになる。これは、難解な地口で、蜜柑の種から敦盛を類推するとは思っても寄らない。これだから地口行灯の絵解きは楽しいのだ。

292. 水汲親父秋の夕暮れ

元句：いづくも同じ秋の夕暮れ



秋の夕暮れ時、共同井戸に水を汲みに来た親父。順番待ちか、煙草(たばこ)をいっぶく吸いながら待っている様子。昔は、水汲みも重労働だったにちがいない。ところが、この絵に惑わされていては、元句にたどり着けない。地口解読のヒントは「秋の夕暮れ」。百人一首の歌から、下の句の「いづくも同じ秋の夕暮れ」が思い浮かべば、正解への近道だ。

良暹法師作「さびしさに宿を立ち出でて眺むれば いづくも同じ秋の夕暮れ」に到達する。

293. 水もたまらぬ真二ついゝ西瓜

元句：見てもたまらぬ真二ついゝ西瓜



羽村提灯店の下絵の左隅に、「見てもたまらぬ真二ついゝ西瓜」と元句が書き添えてある。

しかし、見方を変えれば、遊び心満点に元句を「見てもたまらぬ真二ついい女」とか、水もたまらぬの反意語「水もしたたる真二ついい女」なども考えられる。いい女に対して真二つに切った西瓜を持ってきたところに面白みを出してみたい。

294. むかでむかではったとさあ

元句：むかしむかしあったとさ



百足と書いてむかでと読む。動植物の標準和名は、カタカナ表記が認知されてきたのでムカデと書きたいところだが、地口にはなじまない。ましてや、元句のむかしむかしに対しては、むかでむかでと書かざるをえない。子供に日本の昔話を聞かせるとき、「むかしむかしあったとさあ」で始めたので、このような地口が生まれたと言えよう。むかでは百本も足はないが、歩くとは言わず、ほう（這う）と言うので、はったとさあ。

ところで、このムカデの地口は、所沢市の東屋人形店の地口と同じで他に類を見ないもの。羽村提灯店は、東屋人形店と交流があり、所沢系の地口を多く扱っている。

295. むさし当馬おす坊主也

元句：武蔵と申す坊主なり



武蔵坊弁慶が力いっぱい馬の尻を押している。馬の背にひらりと飛び乗ったのは、牛若丸と見た。左の絵は元の絵で、右の絵を羽村提灯店の主人が書き写したもの。右の絵には、省略があり、裸馬だけが描かれている。

296. 虫籠ですいかの種がたないている

川柳



この絵のような若い女性が虫愛ずる姫のように美しく描かれた地口は珍しく、羽村市シルバー人材センターで色付けして販売したもの。

現実には、川柳に歌われるように、リンリンと鳴いていた虫の姿はなく、すいかの種だけが干からびて虫籠は置き忘れられている姿が目につく。

すいかの種は、何と鳴く。なんとなく思い当たるとしたら、スイスイ、それともムシムシか。

なお、この地口絵には、波線状の瓶垂れ霞が描かれていないが、最近では復活して描かれるようになったことは喜ばしいことである。

297. 八百屋のお獅子

元句：八百屋お七



江戸、本郷の八百屋の娘・お七は、恋い焦がれた寺小姓に会いたがために放火事件を起こし、火あぶりの刑に処せられたという実際にあった話。井原西鶴の浮世草子「好色五人女」が浄瑠璃や歌舞伎で上演され、平成の世でもNHKのテレビドラマに登場している。

左側の下絵・八百屋のお獅子には、獅子と八百屋を象徴する大根やごぼうが描かれているが、右側の絵は、

埼玉県飯能市我賀野神社のもので羽村のものと酷似していて所沢系と思われる。ほかに、あきる野市深沢の穴沢天神社の地口に「わらんじゃほんごへゆくわいな（元句：わたしゃ本郷へ行くわいな）があり、お七がわらじ顔に描かれている。

298. ゆいたてや たぼへねくりの 髪なれば

元句：夕立や田をみめぐりの神なれば



元句は、宝井其角が三囲神社で読んだ雨乞いの句。結いたて=髪を結ったばかり。たぼ=髻=日本髪の後方に張り出した部分。「たぼがみ」ともいう。へねくり=ひねくり。

※「きらくが土手で傘を買う」を参照。

299. ゆぶす大黒

元句：恵比寿大黒



ゆぶす=いぶす=燻す

羽村をはじめ、西多摩の古老は、ゆぶす、えぶす等の言い方をする。この絵は、大黒が軍配で火元を扇ぎ煙を出し、燻している。ここではゆぶす=恵比寿を意味している。右の絵は、あきる野市伊奈に残る下絵だが、文字や絵から古さを感じる。

300. 夜打ちかみがき

元句：夜討ち朝駆け



夜討ち朝駆けといえ、誰もが忠臣蔵に想いを馳せる。元禄 15 年 12 月 14 日の晩（正確には 15 日未明）のこと、大石内蔵助以下四十七士が吉良邸に討ち入った日。まさに夜討ち朝駆けであったという。この地口絵には、討ち入り姿の武士と木製の垣が描かれ、まだ夜は明けていない。神垣の前に立つ武士と雲の中に薄ぼんやりと浮かぶ月、まさに夜討ち朝駆けの情景である。後姿の武士を神崎与五郎則休と見れば、彼の歌「海山は中にありとも神垣の隔てぬ影や秋の夜の月」が思い当たる。この歌は、討ち入りの数ヶ月前に作州（美作）第一の大社・徳守神社の宵宮を読んだもの。昨州は、現在の岡山県東部で彼は、徳守宮を信仰し討ち入りに際し、遠く徳守宮を拝したといわれている。

301. 世渡りは浪の上ゆく船なれや

元句：新渡戸稲造著『一日一言』より



後に、「追風（おひて）よきとて心ゆるぶな」と続く。心ゆるぶなどは、心許すなとか、油断するなという意味。この著書は、大正4年に出版され、80刷りを越えたベストセラー。羽村市に残る地口で世相を反映したものは、概して大正時代が多いのが特徴である。

新渡戸稲造は5千円D券の肖像画でおなじみの顔。札幌農学校の2期生。著書に英文で書いた『武士道』が有名。地口にある「世渡りは浪の上ゆく船なれや」の一文は、思想家、教育家らしい一面を見せていて、著書『一日一言』では、366項目にわたり教訓めいた文字があふれている。

302. 我がものと思へばかろし肩の夜着

元句：我がものと思えば軽し笠の雪



冬用夜具の「かいまき」は、夏物の布団に較べれば重い。

江戸中期に流行った端唄『我がもの』に「我がものと思へば軽し笠の雪 恋の重荷を肩にかけ いもがりゆけば冬の夜の 川風寒く千鳥なく 待つ身につらく置炬燵 実にやるせがないわいな」が元句と考えられるが、もともとは、宝井其角の俳句「我が雪と思へば軽し笠の上」だったが、いつの間にか端唄の「我がものと思へば軽し笠の雪」が通用するようになってしまったようだ。

303. 笑ふ門には福来る

諺（ことわざ）



縁起物の地口は、福よりもお金。百両と書かれた札束？ 黄金色の小判も描かれている。ごく一般的には、福を呼ぶようにふくよかなおか目の姿が描かれるが、七福神の神様では、唯一実在の人物とされる半裸で大きな腹の布袋様は至福の象徴。ここでの注目は、左の大黒様から米俵をはずしたものが520の福の神にリメイクされていること。そのために下絵に線が引いてある。

304. 笑ふ門には福の神

諺 (ことわざ)

305. 笑ふまどには福きたる

元句 : 笑う門には福来る



七福神の中でも最も親しまれ、どこにでもお出ましになる大黒様。庶民にとっては、やはり、富、財宝とまではいかなくとも、お金はほしい。笑っているだけでは、生きていけないのが現実だ。

もう一つ、窓に福が来るとは、生活感満点の句。思わず、「春はどこから来るかしら…」の歌を思い出す。

306. われなべに土地べた

元句 : われなべにとぢぶた

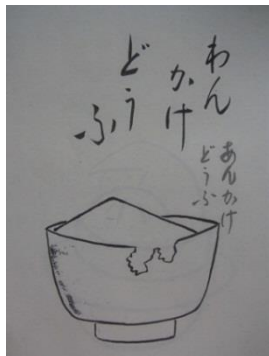


夫婦を鍋とその蓋に例えたもので割れた鍋と修繕した蓋で釣り合いがとれているという意味で「割れ鍋に綴じ蓋」と書く。誰にでもそれ相応にふさわしい配偶者がいるものだというたとえ。「とぢぶた→土地べた」土地に対して「ぶた」ではなく「べた」としたところは、地べたとが土がべつたりのイメージからであろうか。元句は、江戸いろはかるたのひとつ、「割れ鍋に綴じ蓋」。鍋にもいろいろあって金属製から、古くは縄文土器をはじめ、石鍋や陶製の鍋まであり、陶磁器の金接ぎなどは漆とご飯粒で接着剤を作って直したり、鋳掛屋という商売人がいたくらいだから繕って再利用は当り前の時代があった。もちろん、蓋の場合も同じで角が欠けても取っ

手が壊れても修繕して使った。

307. わんかけどうふ

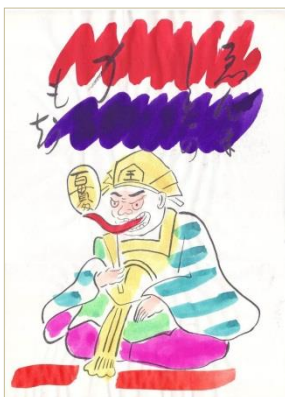
元句 : あんかけどうふ



ここで言うわんかけとは、絵にあるような椀欠けで中に豆腐が入っているので、わんかけどうふ。あんかけとは、葛粉や片栗粉を用いた葛餡でとろみをつけた食材。豆腐にかけたもの。

308. ゑんましたの力もち

元句 : 縁の下の力持ち



閻魔様からは、“ウソつくと閻魔様に舌を抜かれるヨ”とか“ウソついたら針千本飲むます”などと子供の頃を思い出す言葉が蘇ってくる。ここでは、閻魔様と舌、そして縁の下をかけ、舌の先で百貫匁と書いた小判を持ち上げているところが面白い。

右側は、青梅市梅岩寺地藏堂内の閻魔王像。堂内には、数多くの地藏絵馬が奉納されている。

青梅市小曾木・御嶽神社の地口行灯

青梅は、八王子とともに地理的には江戸から遠く離れている割に文化度が高く、江戸の情報がストレートに入ってくる環境にあったようだ。例えば、二俣尾の旧名主家に残る谷合家文書を見ると、黒船来航の情報などは、いち早く届いていたということは、それなりに江戸市中とのつながりを感じずにはいられない。

ここ青梅市小曾木・御嶽神社付近は、江戸城築城にも使われたという石灰（いしばい）の生産地に近く、江戸との交流もあり、多摩七湯のひとつ・岩蔵温泉には、古くから人が集まる地域だった。民俗行事としては、毎年、大きなワラジを作り集落を囲むように七カ所に置いて自分たちの集落に悪疫が入らないようにするフセギの行事がある。また、青梅市指定無形民俗文化財の小曾木万作踊りを継承している集落でもある。

現在、小曾木・御嶽神社には60種類ほどの地口行灯絵が残されているが、そこで江戸時代に発行された下記の地口絵手本等①～⑤と御嶽神社の地口絵を較べてみた。内容的には、近隣地域に残る地口に較べ、江戸時代から続く地口が多く残されていることが分かった。これらの民俗資料をさらに調査研究し、記録保存と伝承に意を注ぐべきと感じた。このたび、地口絵の伝統を受け継いでいる塩野貞雄氏から地口行灯の下絵をお借りして調べてみた。

記

- | | | | |
|---------------|---------|---------|-------------|
| ①「じぐ地あんどう」 | 一筆齋英泉戯画 | 百庵主人花笑撰 | 天保13年(1842) |
| ②「滑稽地口鈍句集」 | (歌川)貞秀画 | 編者不詳 | 弘化3年(1846) |
| ③「地久知画でほん」 | 一瓢庵戯撰 | 静齋英一画 | 弘化4年(1847) |
| ④「地久地画手本」 | 同上 | 同上 | 同上 |
| ⑤「御祭礼ちぐちあんどん」 | 旭亭久住画 | 玉春亭御代住撰 | 嘉永元年(1848) |

小曾木の御嶽神社に伝わる地口行灯に書かれた言葉の一例として、5「井戸を貸すから 汲みなんし」という地口行灯の文字は、上記の④「地久地画手本」に原文が掲載されている。原文は、「井戸を貸から 汲みなんし」と書かれている。元句は、「ききよう かるかや おみなえし」。

「井戸を貸すから汲みなんし」から「ききようかるかやおみなえし」を連想し、類推することは、はなはだ困難だが、この二つのフレーズを何度か口ずさむと、不思議なことに同じ口調であることが理解できる。これは、地口の中でも秀作と言えそうだ。

6の「団扇の涼みの夕方にゃ」は「一羽の雀のいうことにゃ」が元句である。このように、初期の地口は、駄洒落というよりは、むしろ口合わせ的なものだったようだ。小曾木の地口は、旧態をとどめるものが多く、駄洒落的なものは少ない。以下、五十音順に解説し、元句が分からないものについては、不詳として、さらに突っ込んで調査・研究してみたいと思っている。



1. 赤がほ日記

元句：朝顔日記



読み方：あかがおにつき

地口絵は、赤い顔の人物が日記をつけているので赤顔日記と言ってしまえばそれまでだが、元句の朝顔日記は、浄瑠璃では、『傾城筑紫琴（けいせいづくしごと）』や『生写朝顔話（しょううつしあさがおばなし）』の名前で。歌舞伎では、『生写朝顔話』あるいは『生写朝顔日記』の名で上演された。もともと、司馬芝叟の「葬（あさがお）」が原典とされている。初演は、天保3年（1883）。これも歌舞伎等でよく取り上げられる武家のお家騒動がらみの物語だが、主に上演されるのは、秋月深雪（後の朝顔）と宮城阿曾次郎（後の駒沢）の悲恋物語。ちなみに、司馬芝叟は、江戸後期の浄瑠璃や歌舞伎の作者で箱根が舞台の貞女・初花といざり勝五郎の物語『箱根靈験鬩仇討（はこねれいげんいざりのあだうち）』でその名を知られている。

2. あの玉この玉たんと玉

元句：未詳



深い意味はないものと思われる。小さな子供から見れば、ひとつ、ふたつと数えられても、三つ以上は、たんと（たくさん）ということになってしまうのだろう。大きく描かれた玉は、宝珠のようでもあるが、ビーダマをイメージしているのかもしれない。小さく描かれた三つの玉が何を意味しているかも不詳。

なお、小曾木御嶽神社の地口絵に描かれている赤や橙色の波線は、「かめだれがすみ」と呼ばれ、一般に地口絵手本には、描かれていないので、地口絵の描き手の裁量で線が太いものや色にも違いがある。

3. 歩けば順礼古着買ひ

元句：お鶴は順礼古手買



読み方：あるけばじゅんれいふるぎかい

浄瑠璃『傾城阿波の鳴門』の通称『巡礼お鶴』。お弓とその子・巡礼お鶴の物語。近松門左衛門の浄瑠璃『冥途の飛脚』に「あるひは巡礼古手買、節季候に化けて」とある。古手買＝古着買。節季候（せきざろ）とは、年末にやって来る門付け芸人といえば、聞こえはいいが、早い話が物乞い。阿波徳島藩のお家騒動に端を発した物語でお鶴の「ととさまの名は、阿波の十郎兵衛、かか様の名はお弓と申しますウ。」というかわいらしい声を実際に浄瑠璃や歌舞伎を見ていなくても耳の奥にご記憶の方もあらず。

ちなみに、徳島市内にある県立阿波十郎兵衛屋敷に行くと人形浄瑠璃『傾城阿波の鳴門』を見ることができる。

4. 安摩手あぶり火燧やぐら

元句：焙火手焙りこたつやぐら



読み方：あんまてあぶりこたつやぐら

火燧＝炬燧＝こたつ

盲目の按摩が炬燧布団を掛けた置炬燧に手を入れて暖まっている様子は、まさに炬燧やぐらを手揉みしている様に見えるというもの。炬燧は、日本独特の暖房具で格子に組んだ木製の枠を櫓と呼び、土製の小型火壺を櫓の中に入れ、置炬燧としたもので、「行火（あんか）」とも呼ばれた。焙には、あぶるという意味があり、「焙じ茶」といえば、あの香りを楽しむお茶のこと。

5. 井戸を貸すから汲みなんし

元句：ききょうかるかやおみなえし



読み方：いどをかすからくみなんし

参考：『地久地画手本』

「井戸を貸すから汲みなんし、井戸を貸すから汲みなんし」と早口で何度も繰り返して言っていると、不思議や「ききょうかるかやおみなえし」が頭の中に思い浮かんでくる。秋の七草のうちの桔梗と女郎花は自然状態で見る機会は少なくなってしまった。

かるかや＝刈萱はススキに相当するもので単にカルカヤという植物はなく、植物分類学上、オガルカヤとメガルカヤというのがある。

6. うちの涼みの夕方にゃ

元句：一羽の雀の言うことにゃ



読み方：うちのすずみのゆうがたにゃ

原文：団扇の涼みの夕方にゃ 〈地口行灯、五編〉

団扇＝うちわ

「うちゐ」→「うちわ」を読み違えたという可能性を否定できない。

東北の鬼首村の手鞠唄の一節に次のような歌詞がある。

「一羽の雀の言うことにゃ、おらが在所の陣屋の殿様、狩好き酒好き女好き、わけて好きなが女でござる、……」があるかと思えば、同じ東北で山形県上山市の子守唄に「一羽のすずめの言うことにゃ、むしろ三枚ごぞ三枚、六枚屏風にたてまわし、……」というのもある。ついでに、かの有名な野口雨情作詞中山晋平作曲『紅屋の娘』が想起される。

「紅屋の娘が言うことにゃ、さの言うことにゃ 春のお月様薄曇り……」もしかすると、雨情は、一羽のすずめを地ぐったのかもしれない、と考えるのは、地口行灯お宅のなせる下種の勘ぐりかも？

7. 梅にもさる



元句：梅にも春

江戸時代の文化・文政期から幕末にかけて大成した三味線歌曲、いわゆる江戸端唄で広く知られた「梅にも春」（高橋桜州作詞作曲）が元句。

梅に鶯から連想して、「うみにうぐいす〈梅に鶯〉」というのが所沢の地口行灯にあったが、青梅市では、猿。

青梅市小曾木の岩蔵地区にある御嶽神社の祭りは、3月10日前後で、まさにウグイスが鳴き始める頃だ。御嶽神社周辺は、里山風景が

すばらしく4～5月の春から初夏がお勧めで江戸時代から知られる多摩七湯のひとつ岩蔵温泉もある。この集落には、病魔や邪悪なものが入って来ないように守るため、7月下旬に大きな「伏せ木のわらじ」を城内6か所に立て掛ける行事があり、地域の人々に受け継がれている。

8. 梅のへいない



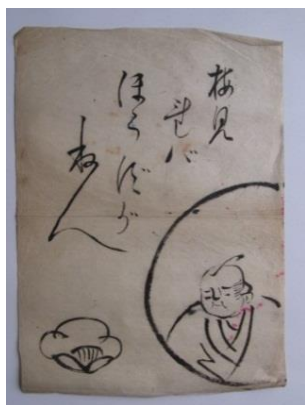
元句：久米平内

思い当たるとすれば、久米平内（くめのへいない）のこと。江戸っ子は、縁結びの神様として浅草寺の平内堂にお参りし、願掛けしたので親しみがあつたようだ。平内は、れっきとした武士だが、江戸赤坂で道場を開き、千人切りを目指したが、後に悔い改め、浅草寺境内に自らの仁王坐像を造り、自分を戒め、罪業消滅の意味で道行く人に踏付けさせたことから、踏み付け＝文付けとなり、縁結びの神様になってしまったもの。

元はと言えば、浄瑠璃や歌舞伎、さらには、講談などで人の知ることとなった伝説的な人物でもある。

※所沢市の地口に「うめのへいこい（梅の塀越い）」というのがあるが、これも、元句は、久米平内かもしれない。

9. 梅見ればほうずがねへ



元句：上を見れば法図がない

読み方：うめみればほうずがねえ

法図＝方図＝際限

梅を見ていると際限なくいつまでも見とれるという意味だが、我欲には、きりが無いという例え。ここに掲載した梅を見つめる人物が描かれている絵紙は、代々受け継いできた元絵の1枚。小曾木・御嶽神社の地口行灯を描いている氏子の塩野貞雄氏は、農閑期に、この元絵およそ60点の中から選んで描くほか、地元に残る民俗行事「万作踊り」をアレンジしたものや、他地域の地口絵を参考に新作も試みている。

梅見の地口は、弘化4年（1847）の「知久知画でほん」二篇にも同じものが見られ、埼玉県川越市の津知屋提灯店にも類似文があるが、都内に残る地口では、「梅見は坊主がいい」というのがある。

10. 御供にふた物土産にやよかる

元句：一子に二子見渡すよめご



読み方：おともにふたものみやげにやよかる

元句：ひとごにふたごみわたすよめご

『地久知画でほん』には、「御供に蓋物土産にやよかる」とある。元句から思い浮かぶのは、子沢山の嫁が子供たちの寝姿を見渡すように眺めている様子。地口絵に描かれているのは、お供を連れた御新造さん。お供に持たせているのは、蓋付きで体裁のいいみやげ物という風情。供を連れて行くからには、それ相応の品物を選び、見栄も手伝い、ちょっと奮発して容器にもこだわってしまうという構図か。

岐阜県の羽根つき歌に「ひとや、ふたや 見渡す嫁御 何時きてみても ななこの帯を八重ことしめて ここの街道通る」というのがある。 本田善郎「民謡収集旅行記録」より。岐阜県恵那郡坂下町(現・中津川市)の羽根つき唄。

11. 踊る平気久しからず

元句：奢る平家は久しからず



読み方：おどるへいきひさしからず

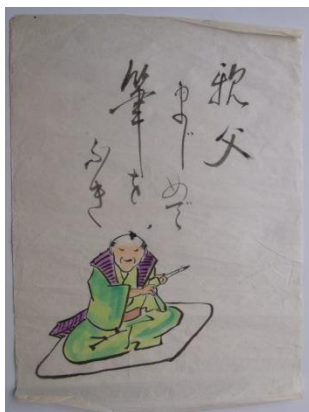
幕末～明治の浮世絵師、一光斎芳盛（歌川芳盛）戯筆の「しんき地くち絵手本」に同じものが見られる。

平家物語の冒頭「祇園精舎の鐘の声 諸行無情の響きあり 沙羅双樹の花の色 盛者必衰の理をあらわす 奢れる人も久しからず……」からの引用で、一般的には、「奢る平家は久しからず」と言いならされている。

元絵に描かれている酒に酔った上半身裸の男が持つ扇には、四国屋島で平家方が小舟の舳先に立てた日の丸が描かれている。言わずと知れた那須与一が見事射落とした扇を意味している。奢るといわずに、踊るとしたところに栄華に酔いしれた平家を風刺しているところが面白い。

12. 親父まじめで筆をふき

元句：親父まじめで笛を吹き



「知久地画でほん」には、地口：親父まじめで筆をふく 元句：親父まじめで笛をふく とある。

笛を吹くの意味は、正真正銘の笛を「鳴らす＝吹く」だが、号令をかける意味から指揮統率、采配を振る、音頭を取る、政治の舵取りまで、いろいろ考えられる。

この地口でいう「筆をふき」は、まじめな意味があるのか、ないのか、まったく意味不明。そこで翻って、まじめに考えたとき、手に持つ筆を絵筆とみなし、水墨画でいう筆遣いの秘訣「描いては洗い、拭き。描いては洗い、拭き」のことか。水墨画の濃淡は、筆先の水気を拭きとることが基本だと聞いたことがある。

13. おらたげんかのまん中でから傘安坐でさしていた

元句：大阪天満の真ん中で唐傘枕てしてやった



読み方：おらたげんかのまんなかでからかさあぐらでさしていた

天保8年（1837）、大阪町奉行所の与力・大塩平八郎の乱のとき、大阪東町奉行の跡部良弼が鎮圧にあたったが、銃声に驚いて大阪天満の真ん中で落馬して恥をさらした。これを見た人たちが「大阪天満の真ん中で馬から逆さに落ちたとき、こんなに弱い武士見たことない」とはやし立てたという。

なお、羽村市郷土博物館蔵の羽村提灯店寄贈の地口資料の中に、地口：「おおやがけんかの真中で」 元句：「親がけんかの真中で」というのがあるが、残念ながら地口絵を欠く。

14. 風ハ南に袂は志める

元句：姉は宮城野妹は信夫



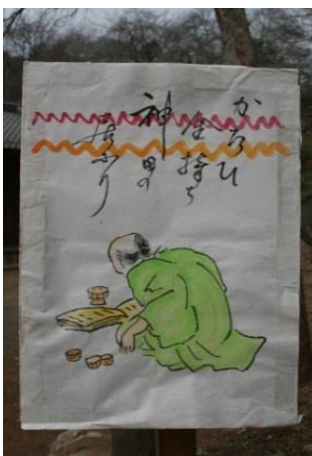
読み方：かぜはみなみにたもとはしめる

参考：地久地画手本

浄瑠璃や歌舞伎「碁太平記白石噺」の角書きと呼ばれる部分に「宮城野信夫」とあり、姉の宮城野は、傾城、妹の信夫は東北から出てきた田舎娘。この二人の組み合わせが地口の材料にされるほど人気があったようだ。内容は、理不尽にも父親を殺された若い姉妹のあだ討ち物語。実話を元に脚色されたというが、それを裏付けようと調べた人が何人かいる。その一人が三田村鳶魚。この方、大菩薩峠の作者・中里介山に三田村トンビと揶揄された人物。同じ多摩育ちにしてはよほど仲が悪かったようだ。

15. かたひ金持ち神田の居なり

元句：葛西金町半田の稲荷



読み：かたいかねもちかんだのいなり

堅い金持神田ニ居なり 参考：ちぐ地あんど 御祭礼ちぐちあんどん

葛西金町半田の稲荷の所在地は、葛飾区東金町4丁目28番22号。五丁目に半田小学校があり、葛西は江戸川区の地名として残っている。

半田稲荷神社の歴史は古く、和銅4年（711）創建とも。例大祭は、4月8日で、願い事を書く願人坊主の小絵馬の裏面には、『享保から文化年間の頃『願人坊主』という者、真っ赤な法衣に真っ赤な頭巾、手甲を着け、手には『半田稲荷大明神』と書いた幟を持ち『葛西金町半田の稲荷 疱瘡も軽い 麻疹も軽い 運授 安産 御守護の神よ』と節回し面白く謡い踊りつつ江戸市中から全国を廻ったといわれています。これが歌舞伎舞踊『四季詠寄三大字（しきのながめよせてみつだい）の二月の部に長唄『半田稲荷』とともに演じられています。』と解説文がある。

16. 堅ひ可き餅かんでも居なり

元句：葛西金町半田の稲荷



読み：かたいかきもちかんでもいなり

原文：堅ひかき餅かんでも居なり

元句は、前掲の「葛西、金町、半田の稲荷」で、共通点は、「居なり＝稲荷」。そもそも地口行灯を飾るようになったのは、狐でおなじみの稲荷神社で行われた初午行事に地口行灯が登場してからのこと。

正月に神仏等に供える鏡餅。1月11日に鏡開きといって取り下げた餅を正月早々、刃物で切ることを忌み嫌って手で欠いたので「欠き餅」という。この習慣は、武家社会に始まったとされ、刃物＝切る＝切腹に通じることから手で割る（欠く）ようになったとか。10日以上も供えてあったので、堅いにきまっている。

17. 語る処へ 天保銭は

元句：かかる所へ春藤玄蕃



読み：かたるところへてんぼうせんは

天保銭とは、天保6年（1835）に鑄造を開始し、明治時代中期まで通用した天保通宝という銅貨。幕末明治の混乱期に庶民が手にした額面の価値が8割程度でしかないものだったという。このため、天保銭は、話題性の多い貨幣で地口にまでなったもの。

ここに登場する人物名、春藤玄蕃は、歌舞伎「菅原伝授手習鑑」の寺子屋の段に登場する菅原道真の子供・菅秀才の首実検をする検死役人。見る側にとっては、敵役、悪役でもある。まさに、天保銭も春藤玄蕃も庶民から見れば良いイメージではなかったということ。江戸時代以後、この「菅原伝授手習鑑」の寺子屋の段は、上演回数も群を抜き、人気があり、地口にも取り上げられたものと考えられる。

18. 合羽でござれや雪の空

元句：さっさとござれや節季候（せきぞろ）



読み方：かつばでござれやゆきのそら

合羽→元はポルトガル語で雨具のこと。雪の空＝雪空＝節季候 と並べてみると、雪の空ではなく、雪空（せつぞら）とも読めそうだ。節季候とは、もともとは、「節季にて候」という意味だが、江戸時代の風俗を伝える「守貞謄稿」に12月中旬頃から銭乞いたちが「せきぞろござれや、ハア、せきぞろめでたい……。」などと言いながら家々をまわって物乞いしたというもの。

江戸名所図会の四谷内藤新宿の絵に添えた芭蕉の句には「節季候の来てハ風雅を師走かな」とある。

19. かまのあしだて

元句：天橋立



単純明解な地口で誰にでも分かるポピュラーなもの。一般的に鎌といえば、手に持つものだが、この絵では、首から上が鎌。まさに鎌首。そして、足元は、高歯の下駄＝足駄で、橋立をあしだてといったもの。

この地口は、単純な割には、類似がない。ほかに鎌首の絵は、「いかにこの身がかまじゃというて」というのが現在も都内で描かれている。なお、この絵は、和紙に描かれたもので、着色された元絵 30 枚のうちの 1 枚で色遣いは、赤と紫の 2 色。上部に描かれた波線の「瓶垂れ霞（かめだれがすみ）」は、上が赤、下が赤と紫を混ぜた桃色。古い地口絵では、往々にして赤と紫の 2 色を用い、瓶垂れ霞も赤一色で描かれている。

20. 京車乃萬燈

元句：強者の万灯より貧者の一灯



読み方：きょうしゃのまんどう

慣用句で「長者の万灯より貧者の一灯」というのがあるが、「京車乃萬燈」の 5 文字から元句にたどり着くまでかなりの時間を要した。地口絵の将棋の駒に京車と記されていることと、神輿や山車とともに練り歩く萬燈に気を取られ長者や貧者にまで思いが及ばなかった。

将棋指しならすぐ分かる地口とか。縁台将棋でも駄洒落の連発を楽しんでいる輩は、「香の夢、大阪の夢」とか「香車の手から水がもる」などと楽しむ。最近、縁台将棋風景にはほとんどお目にかかることがないが、年季の入った将棋巧者ともなれば、「香車の万灯より貧者の一灯」の言葉が聞かれるかもしれない。ちなみに、香車＝強者＝長者＝富者＝王者。

21. くやしさに的をとりただおしながむれば

元句：不詳

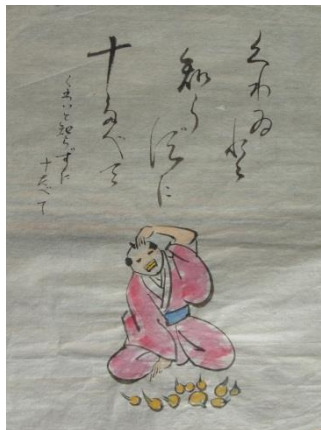


的をめがけて何度挑戦してみても当たらない。自らの力不足を棚に上げて、悔しさばかりが先行する。となれば、結果が出ないのを的に原因があるのでは？と疑いたくもなる。しかし的を手に取り調べても何の仕掛けも細工もされていない。手にした的をただ押し眺めているだけで何の解決にもならない。このようなことは、我々凡人の社会生活では、当たり前のように目の当たりにすることがたびたびである。

ただおしながむれば……と未解決のまま投げ出されたり、放置されてしまうことがままあるからだ。

22. くわると知らずに十たべて

元句：おまへと知らずに戸をたてて



原文：慈姑と知らずに十給て

慈姑（くわい）＝おまい（おまえ）。クワイの漢字表記には、何か意味ありげだが、慈悲深い姑と書く。話題になるのは、悪い意味での姑と嫁だが、ここでは性善説をとりたい。

水生植物のクワイは、オモダカの栽培変種といわれ、芽が出る、おめでたいという縁起かつぎから、おせち料理でしかお目にかからない田んぼ栽培の野菜。オモダカに馴染みのない人でも家紋の「オモダカ(面高)」といえ、通じる場合がある。人面のような形の葉っぱがユニーク。元句からは、「おまえさんとは知らずに戸を閉めて」居留守を決め込んでごめんなさいという女心が伺える。

23. 栗下駄でしぶしぶ帰る朝の雨

川柳



栗下駄とは、下駄の裏側中央の歯に相当する部分をくりぬいた簡易な作り方の下駄のこと。栗＝剥りという意味に解する。ここでいう栗下駄は、粗末な貸し下駄で、雨に降られた朝帰りの遊び人などが借りて帰る様子が想像される。夜遊びが過ぎて、すっからかんで帰る男、それとも、思いを果たしての帰り道かは、知る人ぞ知る。

絵にある男は、二本歯の下駄を履いているが、栗下駄の文字が象徴するように思いを遂

げられずにしぶしぶ、とぼとぼ帰る姿にも見える。五七五の文体から川柳と見た。しかし、地口の要素はないが、栗に対してしぶをもってきたところが面白い。

24. 小犬竹のぼり

元句：鯉の滝登り



もっともポピュラーな地口のひとつ。とは言え、見る人のなかには、犬が竹に登る絵に笑いを誘われるだけで鯉も滝もイメージできないという。子犬竹登りが一般的だが、弘化4年の「地久知画手本」には、「子犬はけのぼり」というのがあり、2匹の子犬が刷毛の上でじゃれあっているという他愛ない絵柄。これにヒントを得たものか、刷毛にくらべれば、竹のほうがまともで、しかも笑いをさそう。さらに、犬がメタボなものから、かわいい犬まで描く人の描写力が楽しめる。

ほかに、「鯉の太刀登り」や「子犬太刀のぼり」というのがあるが、太刀が登場する分、面白さよりも時代物としての古さを感じる。その点、犬が竹に登るとい、ありえないことに笑いを誘い、幼児にも容易に分かってもらえるようだ。

25. 下駄のよこ突き

元句：下手の横好き



まさに下駄を横から槍で衝いた絵である。横好きとは、下手なくせに熱心に取り組む人という言葉だが、横に意味があり、横しま、横やり、横会い、横意地、横車とか、あまりいい意味で使われないことがある。しかし、「好きこそ物の上手なれ」とは、誉め言葉として使われる場合が多い。

下駄を履く機会が少なくなった昨今、この絵にあるような下駄を見たことがないという人が多くなってきた。下駄といえば、2枚歯。だからこそ、小林一茶の「初雪や二の字二の字の下駄のあと」が生まれた。この絵にある下駄は、栗下駄と呼ばれるもの。

26. 小僧まで今日ハ粉になるだん子の日

元句：小僧まで今日は子になる端午の日



粉屋の小僧が粉まみれになるのは、当然のなりゆきだが、しかも端午の節句ともなれば大忙し。だんご作りの粉ひきに明け暮れるので、まさに粉まみれ。ここでは、粉=子、だんごの日=端午の日を掛けたものと解した。

粉屋が製粉するものと言え、小麦からうどんやおやきの原料となる小麦粉。うるち米から団子やまんじゅうにする上新粉。もち米から白玉粉、蕎麦粒は、そば粉に、キビもアワ等の穀類を粉にした。

かつて、農家には、自家用の石臼があり、収穫した穀類等を粉にしていた時代もあったという。多摩地域での小麦栽培は、江戸時代から盛んで、現・青梅市新町は、「新町小麦」で有名だったし、小平市では、手打ちうどんを今でも売りにしている。

27. 駒形船頭沖の人

元句：馬方船頭お乳の人



読み方：こまがたせんでうおきのひと

元句：うまかたせんでうおちのひと

隅田川が流れる台東区と墨田区で駒形橋～厩橋間の地区名を駒形と呼んでいるが、台東区には、駒形1丁目とか2丁目の名前がある。対岸の墨田区には東駒形1～4丁目がある。駒形に住む船頭たちは、隅田川を下り、江戸湾に出れば、まさに沖の人。

元句にある馬方とか船頭は、何かにつけて人の弱みに付け込んで酒手を要求したり、無理強いをする人種が多かったとみえて、こんな言葉が生まれた。さらに、付け加えれば、江戸時代、養育係を仰せつかった乳母なども好き勝手なところがあったので「お乳の人（おちのひと）」も馬方、船頭とともに名を連ねたもので、当時してみれば、一般的な成句として「馬方船頭お乳の人」といえば、誰もが理解できるフレーズだったと思われる。

28. おもうお魚ハ山もりの

元句：思う男は山鳥の



読み方：おもうおととはやまもりの

お魚＝おとと＝男　山もり＝ヤマドリ＝山鳥

ポイントは、お魚の読み方。幼児言葉で魚を「とと」。丁寧語の「お」を付けて「おとと」。すかいらくグループの回転ずし「魚屋路」（ととやみち）が読み方のヒントを与えてくれる。

次に、山鳥。キジ科のヤマドリは、雌雄が尾根を隔てて棲み、繁殖期以外は単独行動するとの言い伝えがある。一方、キジ科のキジは、オシドリのようにべたべたして、いい意味で仲が良い。

百人一首「あしびきの山鳥の尾のしだりをの長々しい夜をひとりかも寝む」が思い浮かぶ。これを深読みすれば、作者の柿本人麻呂は、山鳥の尾と長い夜を掛けただけではなく、尾根を隔てて棲むヤマドリと自分を重ね合わせて詠んだものと思われる。

29. さいそくをされてえかきハ頭かき

川柳



絵描きに限らず、物書きは、往々にして気分が乗らないと筆が進まないとか。この絵描きさんも催促されて絵を描かずに頭をかいている。思うに、祭礼間近になり、神社の役員から地口絵を催促された絵描きの心境そのものかもしれない。

多摩地区の地口行灯には、川柳が占める割合が多いとされるが、ここ小曾木御岳神社の場合は、川柳が少なく、さらに地元に残る万作踊りを取り入れたり、新作への挑戦もみられる。羽村市郷土博物館の地口資料の中に戦前戦後を通じて農家で愛読されていた雑誌「家の光」の川柳コーナーを几帳面に切り抜きしているが、日の出町で祭の地口絵の伝統を守っている書家の宮田美子さんも家の光に掲載される川柳をチェックしているとのことである。

30. 財布志きりにふえしかば

元句：大雨しきりに降りしかば



読み方：さいふしきりにふえしかば

元句：　たいうしきりにふりしかば

大雨→たいう

観阿弥元清作の能「老松」に秦の始皇帝の故事に由来する物語があり、「大雨しきりに降りしかば」という一文がある。これは、2000年以上も前の話、始皇帝が狩りに出掛けたが、大雨に会い、小さな松の木の下で雨宿りした。その時、松がたちまち大木となり、始皇帝を雨から守ってくれたという。このことから、始皇帝は、松に太夫という位を授けた。江戸時代、庶民が中国の故事を学ぶとしたら、直接漢文からではなく、能、常磐津、歌舞伎等を通して知識を身に着けたにちがいない。地口という「財布しきりに増えしかば」は、元句の「大雨しきりに降りしかば」というフレーズを知っているから、面白くもあり、なるほどとうなずくことになる。

31. さて此の樽の樽わざは

元句：さてこの度の軽業は



読み方：さてこのたるのたるわざは
樽わざ＝軽業。軽業と書いてカルワザと読む。文字通り身軽に業（技）を演じ、綱渡りや籠抜け、輪抜けなどで見る人を驚かす。元祖は、遠く中国伝来のものだが、江戸時代に盛んになった歌舞伎のなかで蜘蛛舞というのがあり、ここから発展したのが軽業で延宝年間（1673～1680年）頃からと言われている。

この絵にある酒樽には、三国一とか男山、剣菱の商標が入っているが、すでに江戸時代からの銘柄ということが分かる。なお、あきる野市深沢の地口には、明治版と思われる「おめにかけますからかさを＝お目にかけますかるわざを」というのがある。

32. 正直の頭に神宿る

諺（ことわざ）



本来、「神は正直の頭（こうべ）に宿る」が元句だが、地口としては、「酸漿（ほおずき）の頭に蟹踊る」。

小曾木御嶽神社で描かれている絵は、ホオヅキを串刺しにし、その上に幣束が描かれたもので 正直＝ホオヅキ をイメージして江戸時代のものとは異なり、他の地口絵からの引用かと思われる。イメージ的には、印刷版で市販されている地口絵「ほうづきさま いくつ」に似る。

33. 書にまじはればかたくなる

元句：朱に交われば赤くなる



元句は、言わずと知れた漢字の国・中国のことわざで、出典は、傳玄の『太子少傳箴』に「近墨必緇、近朱必赤」とあり、注釈を加えれば、「墨に近づけば必ず黒色に、朱に近づけば必ず赤色になる」という意味である。

人は、仲間や付き合う相手次第で善くも悪くもなるということわざ。これを地ぐって、書を読むこと、すなわち学問ばかりに没頭していると融通が利かない頭の固い人間になってしまうとしたもの。このように考えるのは、学問に縁がない下種の考えといってしまうが、それまでのことだが、そこまで言えるのが、江戸庶民のおおらかさなのかもしれない。

34. 先生八両ためたか

元句：鎮西八郎為朝



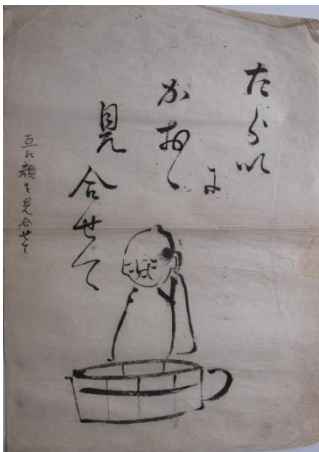
読み方：せんせいはちりょうためたか

元句：ちんぜいはちろうためとも

鎮西八郎為朝とは、平安時代末期の武将・源為朝で強弓の名手として知られ、鎮西を名目にして九州で暴れ、鎮西八郎と称した人物だ。保元の乱(1156年)で敗れ、伊豆に流された。保元物語を種本にした滝沢馬琴の読本「椿説弓張月」では、琉球に渡り、その子は、琉球王になったというスケールの大きな源為朝一代の武勇外伝。ちなみに、椿説は、珍説とも解せるし、椿説は、ちんぜいとも読めるところが、地口にも通じるところが面白い。人の名を地口 of 材料にすることはかなり多く、もちろん誰もが知っている時の人、有名人である。そのなかでも、歌舞伎役者や村芝居に登場する忠臣蔵をはじめ、源平合戦とか心中物語などの人物名が目にとまる。

35. たらいにかおゝ見合せて

元句：互いに顔を見合わせて



読み方：たらいにかおをみあわせて

単純明解な地口とはいえ、人によっては、解説を加えないと理解できないらしい。現代社会では、盥という字も使わなければ、タライという言葉も知らないのだ。

歌舞伎の仮名手本忠臣蔵七段目。一力茶屋の場でお軽の兄・平衛門のセリフに「残らず読んだその後で互いに見交わす顔と顔」というのがある。当時の歌舞伎といえ、江戸庶民にとっては、日常茶飯な楽しみだったと見えて、「たらいに顔を見合わせて」と言えば、七段目のあの場面と想像できたものと思われる。それゆえ、地口も理解され、楽しめたのだ。

36. だんごの節句

元句：端午の節句

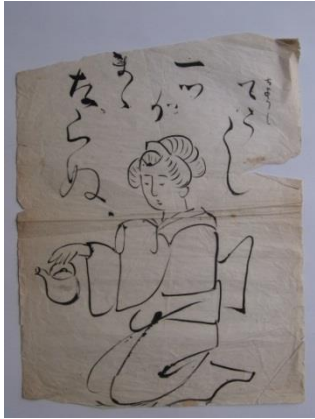


これは、現代人にもすなおに受け入れられる簡単な地口。端午の節句といえば、柏餅が定番。絵にあるだんごは単に語呂合わせに過ぎない。だんごといえば、「だんごは丸い、丸いはお月様」と連想するほど、月見に縁があり、月もだんごも地口には好材料。「道具屋お月様見てほめる」とか、「だんご十五」などが思い浮かぶ。

余談になるが、端午の節句は、5月5日。奇数月日の 1月1日、3月3日、7月7日、9月9日を吉日とするのは、これまた中国伝来。こいのぼりといえば、瓦の波と雲の波と歌われるが、青梅市小曾木では、山の端に泳ぐ構図だ。

37. てうし一つがまゝならぬ

元句：障子一重がままならぬ



元句の「障子一重がままならぬ」の出典探索を試みて日本の民謡をひも解いていくと、越中おわら節、木曾節、佐渡のおけさ節等々、都々逸に至るまで数限りなく出てくるのが分かった。なかには、近世風俗研究に欠かせない喜田川守貞の「守貞謾稿」にも記載があるが、民謡や都々逸が原点のように思える。

左側は、古くからある下絵で旧仮名遣い。右側の絵は、平成時代のもので現代仮名遣い

に書き変えられているし、着物の柄も新しい。

38. 豆腐の白いに 四角なたどん

元句：遠くの親類より近くの他人



豆腐＝遠く、白いに＝親類より、四角な＝近くの、たどん＝他人。近くの他人も当てにならないご時世ながら、他人事と書いて「ひとごと」と読めない人が多い。

ところで、この地口では豆腐→白い→四角。さらに、白い豆腐に対して黒い炭団（たどん）を持ってきたところにそれなりのこだわりを感じる。

なお、左の写真は、地口絵手本から写し取ったものと考えられるが、もう一つ、「火口ハ雨によく志め里」とあるが、No.52 を参照のこと。

39. 爺さん馬鹿な女郎かい母さんハあゆめと申します

元句：ととさんの名は阿波の十郎兵衛、かかさんの名はお弓と申します



読み方：ととさんばかなじょろうかいかかさんはあゆめともうします
これは、近松半二、竹本三郎兵衛らによる合作の浄瑠璃『傾城阿波の鳴門』の八段目「巡礼歌の段」に出てくる巡礼お鶴の有名なせりふ。歌舞伎でも上演され、人気があったので地口化されても多くの人々に理解されたものと思われる。

ちなみに、70 年以上も前の元禄時代に上演された近松門左衛門の歌舞伎狂言とは同名異作品。

40. 戸をけた婆アさん

元句：とぼけた婆さん



読み方：とをけたばあさん

左側の絵は、古くからあるもので、これを手本に右側の絵が出来上がる。戸を蹴る婆さんの図は、

あきる野市深沢の穴沢天神社と羽村市郷土博物館蔵に同類のものがあり、弘化4年版の「地久画でほん」にもあるので古くから親しまれている。

地口としては、平凡ながら、どこにでもいて、話題提供に事欠かない、爺さんや婆さんの姿が地口絵を楽しくしてくれる。

41. 夏になりやこそ 涼み台

元句：待つ身なりやこそ畳算



元句の読み方：まつみなりやこそたたみざん

畳算→婦女子や遊里等でかんざしを畳の上に落として吉凶を占うもので、ここでは思う人が来るか来ないか畳算するという意味。

縁台で涼む上半身が裸の男が描かれているが、天保13年版の「ぢぐ地あんどう」の絵に酷似している。異なるところは、バックに描かれているススキの有無だけで小曾木御嶽神社の地口絵は背景を省略したものの、片足を上げたスタイルで下駄の位置、うちわの向きなどは同じである。

42. 夏内涼みに団扇よし

元句：松虫、鈴虫、くつわ虫



読み方：なつうちすずみにうちわよし

まさに難解地口の代表的なもの。解説して、はじめて地口の面白さが身を以て体験させられるような気がする。

酷暑が続く平成25年夏、もはや、涼みに団扇どころではないし、上半身裸にもなれない時代になってしまった。

夏の涼みから、まさかのマツムシ、スズムシ、クツワムシだったが、江戸時代の虫の音から、♫あれ鈴虫が鳴いている…♫の文部省唱歌「虫の声」に至るまで、日本人と鳴く虫とは縁が深い。秋、某観光協会で虫の声を聴く会のPR記事に「鳴く虫の女王・カンタン」とあったが、昆虫や野鳥の場合、鳴くのはオスなので、女王とは笑止千万である。

43. 寝んね志大のも斧九太夫

元句：縁の下には斧九太夫

読み方：ねんねしたのもおのくたゆう



題名からして隠し文字がある歌舞伎・仮名手本忠臣蔵。「仮名」は、47文字と四十七士を掛けた言葉。「手本」は、忠臣の鑑という意味。「蔵」は、財産を入れる蔵と大石内蔵助を掛けたもので、赤穂浪士の仇討ちをテーマにした物語。元句にある縁の下の斧九太夫とは、七段目に登場する悪役で家老でありながら敵方に内通し、大星由良之助（大石内蔵助）に床下に隠れていたところを殺される人物。

斧九太夫は、四十七士からはずれた48人目の男・大野九郎兵衛のこと。元禄15年12月14日の夜は、討ち入りに参加していないので寝ていたというところが面白い。ちなみに、忠臣蔵に関係ある地口は、他に類を見ないほど多く、それ相応に江戸時代から人気があったことがうかがえる。

44. 呑む大酒三升五合

元句：南無大師遍照金剛



読み方：のむだいしゅさんじょうごんごう※

元句の南無は、信じる心を開いて帰依するとかお任せするという意味で、大師とは弘法大師のこと。遍照金剛は、大日如来の別名とされ、弘法大師は、大日如来との縁で出家したので大師遍照金剛とは、弘法大師空海のこと。徳の高い僧侶に贈られる大師号は、「大師は弘法にとられ、太閤は秀吉にとられ」と揶揄されるように大師といえ、空海の名前そのものになってしまったもの。

それにしても、弘法大師が大酒のみだったかどうかは別として、恐れ多くも大酒三升五合とはいささか口が過ぎるかも。

※ 三升五合=正しくは、「さんじょうごごう」だが、遍照金剛（へんじょうこんごう）に合わせ「さんじょうごんごう」とした。

45. 裸乃あつかん

元句：堅田の落雁



読み方：はだかのあつかん

裸という文字に馴染みはないが、ルビに助けられた。裸の男が酒を飲んでいる。これが冷酒ではなく、熱燗の証拠に湯気が出ている。

元句の堅田の落雁とは、琵琶湖南部の景勝地。①比良の暮雪、②矢橋の帰帆、③石山の秋月、④瀬田の夕照、⑤三井の晩鐘、⑥粟津の晴嵐、⑦唐崎の夜雨、⑧堅田の落雁。以上八つの風景を近江八景と称している。ほかに金沢八景とか、〇〇八景というのは、日本人好みの言い方で数多くある。近江八景も忠臣蔵同様、地口のネタとして数多く登場する。医師様秋の月（石山秋の月）、から酒夜の酒（唐崎の夜の雨）などがある。

なお、落雁を知る人が少なくなり、平成生まれの若者は、菓子の落雁さえ知らないという。

46. 歯もなくてかんでくれる親の慈悲

元句未詳



文言からして親の慈悲心を説いているようで駄洒落的要素は読み取れない。元絵は残されているが、実際に祭礼では使われていないので色つきの地口絵は見たことがない。

47. ひと布ふた布身ごろにゃよかる

元句：一子に二子、三わたしや娘御



読み方：ひとのふたのみごろにゃよかる

元句：ひとごにふたごみわたしやよめご

一布とは、尺貫法の鯨尺の一尺に相当する。民間で布を計るのに用いられ、今でも用いることのある曲尺では、1尺2寸5分(37.9 cm)。二布は約76センチで、この幅がその昔、女性が使用していた腰巻がちょうど二布分だったことから腰巻のことを「二布」といったとのこと。

元句は、羽根つき数え歌で、「一子に二子、見渡しや嫁御、いつよりむさし、なあんのくやし、ここのじゃ、とうよ」というのがあるが、地方により言い回しが異なるようだ。

別の羽根つき数え歌「ひとり来な、二人来な、三人来たなら、よつて来な、いつきてみても、むつかしい、ななこの帯を、やの字に締めて、ここの前を通る」というのもある。

48. 下手な寒聲阿くびににたり

元句：下手の考え休むに似たり



読み方：へたなかんごえあくびににたり

寒聲=寒声で、寒中に発声訓練をするもの。

絵から想像できることは、寒さ厳しき折、野原の真ん中でただひとり、寒さに凍えながら、寒中稽古とばかりに大声を出してお経を唱えたり、歌曲等の練習している様子は、遠くから見ると、どこか間が抜けて見えてあくびでもしているようにしか見えない、というもの。

元句のことわざ「下手の考え休むに似たり」は、一般的には、よい考えも浮かばない人に限って長い間考え込んでばかりいて時間が無駄という意味。元はといえば、囲碁・将棋等で下手な人が無駄な長考することの場合に使われることわざ。

49. 弁け以波田かのせき

元句：弁慶安宅の関



読み方：べんけいはだかのせき

元句：べんけいあたかのせき

歌舞伎「勧進帳」では、安宅関（石川県小松市）で弁慶が勧進帳を読み上げる歌舞伎十八番のひとつ。

小曾木御岳神社の原画のなかでは、この一枚だけは、画風が異なり、さらに瓶垂れ震も3本描かれている。絵からは、裸の弁慶が襖の陰で乾布摩擦でもしているようにも見てとれるが、人目をはばかるようにも見える優しい雰囲気から、あのたくましさはない。

なお、同じ文言の地口は、所沢市の東屋人形店と羽村市郷土博物館蔵（羽村提灯店寄贈品）にある。

50. 坊さん玉見てたおれたところ

元句：坊さん山道やぶれた衣



穿当珍話（宝暦7年・1757）に「もぐさん〈坊さん〉山道破れた衣」という語句がある。墨染めの衣の坊さんが大きな玉（宝珠）につぶされそうになって倒れている様子が面白い。「地久知画でほん」の絵は、宝珠が三つ描かれ、坊さんが倒れている。倒れた坊さんの向きや手足の恰好は、左の絵と酷似している。

元句から分かることは、破れた衣を着ていることから、修行中の僧侶が一人山道を歩いている風景が目に浮かぶ。

51. 奉納にかながしら

元句：ほうぼうかながしら



読み方：ほうのうにかながしら

ほうぼう（竹麦魚）を奉納と地ぐり、かながしら（金頭・火魚）を奉納したというもの。ハウボウもカナガシラも魚の名前。2種類ともハウボウ科の海水魚で頭が大きいという共通点を持っている。ハウボウは、海底の泥状のところに生息し、胸鰭を足のように動かし海底の方々を歩き回るのでハウボウという名前がついたとか。

カナガシラは、ハウボウに似て、生息域も同じ、海底を歩く魚。頭部が硬い骨板に覆われているのでカナガシラの名がついたという。

江戸時代、幕政批判の兵を挙げた大塩平八郎が、ある日癩癩を起してカナガシラをバリバリ噛み砕いて骨まで食べたという話が残されている。

52.火口ハ雨によく志め里

元句：五七が雨に四つ日照り



読み方：ほくちはあめによくしめり

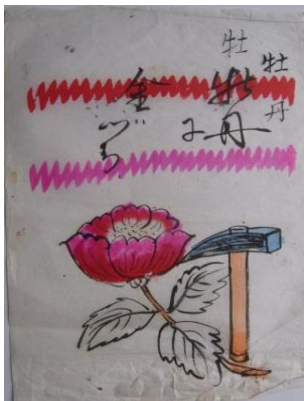
元句：ごしちはあめによつひでり

No.37の「豆腐の白いに四角なたどん」の元絵紙に文字を練習したかのように、小さく書かれている。火口とは、火打石で火を起こすとき、植物の繊維などをまとめておき、点火する材料。野草の名前にホクチアザミとかオヤマボクチ（雄山火口）があり、奥多摩では、オヤマボクチの葉を揉んで繊維状にして点火材を作ったという話がある。

元句は、土佐地方の迷信といわれ、五七＝午前・午後八時と同四時頃に地震があると雨になり、四つ＝午前・午後十時頃の地震は、日照りで干ばつになるという。同じような迷信は他地域にもあるようだ。

53. 牡丹に金づち

元句：牡丹に唐獅子



読み：ぼたんになづち

所沢の東屋人形店系の羽村市郷土博物館所蔵の中にも同じものがあるが、地口絵を比べてみると、金づちの描き方に差があり、この絵のほうがダイナミックに描かれている。瓶垂れ霞は、稚拙に見えるが、赤色と桃色が文字を隠すことなく、火が灯ると彩りを添えている。

牡丹に唐獅子といえ、対のような組み合わせで、一般に「唐獅子牡丹」といわれ、唐は中国のこと。獅子は、百獣の王、牡丹は百花の王ともいわれ、縁起の良い組み合わせとされ、屏風絵や祭の衣装などに見るほか、唐獅子牡丹の刺青ともなれば、映画やドラマの世界にも登場する。

54. 本に子守ハき乃ふ今日

元句：ほんに思えば昨日今日



読み：ほんにこもりはきのうきょう

小さいときからお前に抱かれ……。常磐津は、歌舞伎の音楽として発展してきたもの。

以前に江戸東京博物館建設に先立ち都内全域で文化財調査が行われた。その折、羽村市内の旧家で蠟管蓄音機とともに多くの蠟管レコードが見つかったが、そのほとんどが常磐津のレコードだったことを思い出した。大正時代～昭和のはじめにかけてのものと思われた。

55. 本の内の信長

元句：本能寺の信長



読み方：ほんのうちののぶなが

見開いた本のページに信長と思われる人物の肖像画が描かれているが、文字は記されていない。

本の内=本能寺は、誰にでも読み取れる地口で単純明解。戦国時代を走り抜けた織田信長がここに登場する意味は、明智光秀に襲われ天下統一の夢破れた京都・本能寺。本の内とは、なんとも他愛ない地口で、人を引き付けるようなものではない。現在、地元小曾木御嶽神社では下絵が残るのみで祭礼時に飾ることはない。

56. 守子のやうに始から紙張亭主をとりかはし

元句：是此の様に始めからきせう せいしを取りかはし



読み方：もりこのようにはじめからしちょうていしゅをとりかわし

守子の=是此の 紙張亭主=きせうせいし=起請誓詞 紙張とは、紙帳、すなわち蚊帳のことと解する。紙製の蚊帳で庶民が和紙を張り合わせて作ったもので「守貞慢稿」に図解入りで記されている。文字面を見る限り、紙のようすつぺらな亭主を連想してしまう。起請誓詞は起請文のことで、夫婦が交わす硬い約束や神仏に誓って遵守履行すべきことなどが記されている。ここでは、守子が雇い主と取り交わすように夫婦が起請誓詞を取り交わすととりたい。地口絵からは、男が蚊帳をたたみ、幼子を背負った女房がすがりつくようにしているようにも見える。守子については、五木の子守唄や童謡などに歌われているように、子守唄の主人公は母親ではなく、貧しい家に生まれた幼い娘が守子をして歌っている場合が多いようだ。

57. 八百屋お獅子

元句：八百屋お七



江戸初期、本郷の八百屋の娘お七は、恋い焦がれた寺小姓に会いたいがために放火事件を起こし、ボヤで済んだものの火あぶりの刑に処せられたという実際にあった話。井原西鶴の浮世草子「好色五人女」が浄瑠璃や歌舞伎で上演され、多くの人々の知ることとなった。

地口・八百屋お獅子には、獅子と八百屋を象徴する大根やにんじんが浅い籠に入れられているが、羽村市郷土博物館蔵の絵柄は、獅子の頭と大根とごぼうが描かれ、地口文は「八百屋のお七」とある。

ほかに、八百屋お七関連では、あきる野市深沢の穴沢天神社の地口に「わらんじゃほんごへゆくわいな（元句：わたしゃ本郷へ行くわいな）」というのがあり、お七がわらじ顔に描かれている。

58. 奴とうる

元句：やっこ豆腐



読み方：やっことおる

奴（やっこ）＝家（や）っ子という意味。江戸時代、武家に仕え雑役に従事した奉公人で中間の俗称。武家の行列の先頭に槍や挟み箱等を持って供先を勤める。

奴豆腐とは奴が着る着物に定番の四角な紋様から四角に切った豆腐のことをいった。夏は、冷やして美味な冷奴に限る。奴胤、奴正月、奴さん等々の多くの名前がある。

江戸前期の奴の言葉遣いで六方言葉と呼ばれたいわゆる江戸っ子の方言を「奴言葉」ということがあるが、例えば、冷たいという言葉に「ひゃっこい」というのがそれにあたる。

59. 山川にかべにかけたる白酒は

元句：山川に風のかけたるしがらみは



小倉百人一首にある春道列樹の歌「山川に風のかけたる しがらみは流れもあへぬもみぢなりけり」が元句。駄洒落好きの江戸っ子にとって、百人一首のパロディ化は絶好のターゲットだったようだ。100首に対していくつもの地口短歌が作られた。

左の絵は、「地久知画でほん」に掲載されている静斎英一の絵とほぼ同じに描かれている。看板には山川白酒と記されているが、酒樽の銘柄は三国山の文字と剣菱の紋がわずかに見える。

60. 夢ハ思ひよ昨夜のはなし

元句：梅は匂いよ桜は花よ



目覚めてみれば、あれは、夢だったのだろうかと思然とした顔つきの男。傍らの枕の色からして、自宅ではない様子。見る人に勝手な想像が思い浮かび、楽しくもなり、はたまた衰れな姿にも見える。ところが、これが、奈良・平安の話題ともなれば、しかも小野小町が登場すると話はがらりと変わる。古今集にある「思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを」は、万葉時代から詠われてきた夢と恋の歌の代表的なもの。

元句の梅は匂いよ…のフレーズは、江戸時代に編集された民謡集「山家鳥虫歌（さんかちょうちゅうか）」にあり、「梅は匂ひよ桜は花よ人は心よ振りいらぬ」と続き、人の生き方を示唆した名句として後世に語り継がれている。

以上、現存する元絵を中心に解説を加えたが、現在、地口絵を描いている塩野貞雄氏が近隣の神社にある地口行灯を参考に後補したものを簡単に紹介しておく。

61.恵比寿大根喰ふ
元句：恵比寿大黒



62.狐の豆いり
元句：狐ノ嫁入り



63.笑ふ門には福の神
元句：笑う門には福来る



64.屁国萬才
元句：帝国万歳



65.小曾木万作踊



青梅市小曾木地区には、古くからユニークな万作踊が伝承されているが、残念なことに起源や伝承を証明する古文書等の記録はないが、市の無形民俗文化財に指定されている。聞くとところによると、かつて青梅市黒沢には、あきる野市に伝わる阿伎留野歌舞伎と同じような農村歌舞伎があり、万作踊りは歌舞伎芝居の合間に踊ったとのことである。現在、地域住民による保存会があり東京都民俗芸能祭や青梅市の市民祭等に出演している。演目は、段物「笠松峠」、「白枳粉屋」、「廣大寺和尚」等があったが廃れ、現在では、手踊りの「浮島踊り」と「愚僧踊り」が演じられている。

以下の4点については、近隣の地口絵を参考にして新たに描かれ、平成26年3月の祭礼に追加掲示されたものである。

66.阿呆は寝て待つ

元句：果報は寝て待つ

67.梅づらしいお客

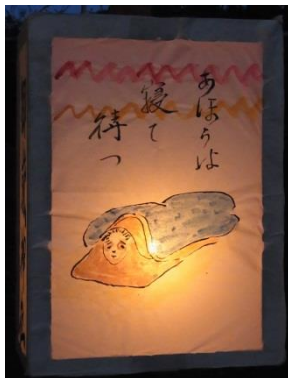
元句：お珍しいお客

68.かなはぬ時のカニだのみ

元句：叶わぬときの神頼み

69.竹の内きつね

元句：竹内宿祢



あきる野市穴沢天神社の地口行灯



あきる野市深沢は、明治憲法に先駆け、民間で考えられた憲法私案のうち民衆による「五日市憲法」の名で知られた土地である。ここ深沢の土蔵の中から発見された憲法草案に「五日市憲法」の名が冠せられた。

このような土地柄か、地口行灯に見る中身は、江戸時代の浄瑠璃や歌舞伎に題材を求めた忠臣蔵をはじめ、浮世草子、平家物語、遠くは古代中国の物語に至るまで幅広く多岐にわたっている。

平成 23 年 8 月 8 日にあきる野市深沢に南沢栄一さんを尋ねたが、不在で近所の方から栄一さんの兄さんの家を教えてもらい、そこで聞いた話。

平成 23 年時点で青年団活動は途絶えているが、当時、この地口絵を写したという南沢さんご夫妻からの話では、元絵から写すときの作業について、一枚々々青年たちが手分けして写したこと、紙が薄くて書写が大変だったこと、読めない草書体の文字をなぞるように写したこと、墨をつけ過ぎて元絵を汚してしまった話等、当時を思い起こしていろいろな話を聞かせてもらうことができた。

なお、昨年の 4 月の穴沢天神社の祭礼時に深沢会館に保管されている元絵を見せてもらったところ、40 点ほどの地口絵が巻紙に描かれていた。その場で写真撮影させていただき、整理することとした。ところが、地口絵はともかく、ただでさえ、読みにくい草書体文字は、先の話から、書道に長けた人の文字ではなく、青年たちが手分けして見様見真似で元絵の上に薄い紙をのせてミミズがのた打ち回った様な文字で書き写したという経緯から、写し間違いが皆無とは言えないことも分かった。しかし、読み解く以上は、間違いをなくすために知りうる限りの古文書を読みなれた文化財関係者や博物館の職員の力を借りることとした。このようにして古文書を読みなれない者にとっては大変苦勞ではあったが、なんとか解説にこぎつけることができた。

穴沢天神社に伝わる地口行灯について、その元となったはずの絵手本があるはずだが、原文にたどり着くことは出来なかった。しかし、昭和 48 年に南沢栄一さんが手本にしていた 40 数枚の原文から筆写したものをコピーしていたお陰で多くの手がかりを得ることができた。地口行灯のコピーは、貼り合わせて巻紙になっているので、その都度、必要部分を拡大コピーしてから色塗りをして使用している。そのため、コピーを重ねていくため、筆文字の力強さや筆圧に欠けるきらいは否めない。

平成 23 年 8 月 10 日 南沢栄一さんから連絡が入った。その内容は、「巻紙状にしてあるので机の上に広げて、祭りが近くなるとみんなで一斉に写し取ったとのこと。自分たちで好きな箇所や

書き写しやすいところを選んでやった。実際に書き写していても内容までは分かっていないまま写した。元本は、もしかしたら、深沢会館にあるかもしれない。40 種くらいあって色がつけてあった。自治会長の志村さんに聞いてほしい。自分が青年団長のころ手元にあり、次の代表に引き継いだ」とのことであった。さらに、同年 9 月 11 日、先の南沢栄一さんから元本発見の連絡が入った。早速、13 日に南沢さん宅で見せていただくことができた。ほとんどすべてに元句が添えられていてほぼ全容が解読できることとなった。

穴沢天神社の地口行灯を調べていくと、平家物語から仮名手本忠臣蔵、井原西鶴や近松門左衛門の心中物、そして江戸・大阪のかるたに至るまで、自分自身の勉強になったし、学生時代にお世話になった暉峻康隆教授や跡を継いだ興津要教授の近世文学の講義をもっとしっかりと聴いておけばよかった。まさに、後悔先に立たずである。

なお、発見された原本を 50 音順に整理したものは、下記の 53 点である。

1. あいた口お賀もち

元句：あいた口ぼたもち

2. 朝顔に津留邊とら連てもらい水

元句：俳句 朝顔につるべとられてもらい水 加賀千代

3. 姉乃みやげを 妹がしめる

元句：姉のみやぎの 妹のしのぶ 奥州白石噺

4. あ免にかけますからかさを

元句：おめにかけますかるわざを

5. 阿らばちにや津ばきに限る

元句：新鉢にや椿に限る

6. 家康公乃御前にて 剛憚を免し ゆふゆふと きむら重成

元句：元句表記なし

7. いざりかつぶし車にのせてひけよみけ猫江んの下

元句：いざり勝五郎車にのせて引けよ初花箱根山

8. 一富士見たか三なすび

元句：一富士二たか三なすび

9. 梅と山吹両手にもちて登連が実のなる花でやら 〈都々逸〉

読み：梅と山吹両手に持ちてどれが実のなる花でやら

10. ぬび賀さいをつる

元句：海老で鯛を釣る

11. 大お乃くらふ兵エ

元句：大野九郎兵エ 赤穂奸臣

12. おかるはにかいでな免かゞみ

元句：おかるは二階でのべかがみ 忠臣蔵七段目

13. おさん賀ねぼけて勝手の寿みでおはちかゝいて澤庵ぼりぼり

読み：おさんが寝ぼけて勝手の隅でお鉢抱えてたくあんぼりぼり

14. おしゅん傳兵エ樽まわし

元句：おしゅん傳兵エ猿まわし

15. お月様さへ夜遊をびなさる皆様の夜あそびもむりはない（若衆びいき都々逸）
読み：お月様さえ夜遊びなさる皆様の夜遊びも無理はない 若衆びいき都々逸
16. おにたかぼふ
元句：おにゝかなぼふ
17. おやおや此の子ははいからない
元句：おやおや此子はけしからない
18. おやまふまについでやら連猫に魚乃くわへにげ
読み：おやもう間にツイしてやられ猫に魚のくわえ逃げ どどいつ（都々逸）
19. 敵討に遅れぢやならぬ 少し磯貝十郎左エ門
20. 雷は成程こわい
元句：かみなりは鳴る程こわい
21. かにに耳あり噂はいへぬ
元句：かべに耳ありうわさはいへぬ
22. かんざけよ賀らう
元句：播州赤穂義士神寄與五郎則休 神崎則休（かんざきのりやす）
23. かんしんがなたをこ寿って時世とじせつ
元句：かんしんがまたをこぐると時世と時節
24. きゃらぼうもふで乃あや満利
元句：弘法も筆のあやまり
25. 今日乃夢大かさの夢
元句：京の夢大坂の夢
26. 鯉にこがれてなくせみよりも
元句：戀にこがれてなくせみよりも
27. 此人は食わないで御金を多免た
元句：此の人は桑苗でお金をためた
28. 碁ばんをせなに猪口左エ門
元句：小萩をせなに長右エ門
29. 酒に壽る女は仙台錢五文よ
元句：竹に雀は仙台様御紋よ
30. 壽いか実を食ふ
元句：すいが身をくふ
31. 曾我の女郎うち乃まきわり
元句：曾我五郎富士ノ巻ガリ
32. 多〴〵いて想いは阿じ志免じ
元句：抱いて想いは味しめじ
33. 高い山からかにそこ見れば
元句：高い山から谷底見れば
34. たこくへ錢玉寿な
元句：他国へ錢だすな
35. たるまだいしゅ

- 元句：だるまだいし
36. だる満におあしが出るも乃か
元句：達磨にお足があるものか
37. ちょいとおかめぢやおでんはだしで
元句：ちょいとおか目ぢやおてんばそうで
38. 月夜に釜をふく
元句：月夜に釜をぬく
39. ていし乃寿きな たかゑぼし
元句：ていしのすきなあかえぼし
40. 戸蹴ったばあさん
元句：とぼけた婆さん
41. 飛んだ平八郎
元句：本田平八郎 正しくは、本多平八郎
42. 飛んで湯に入る夏乃武士
元句：飛んで火に入る夏の虫
43. 奈寿乃りよいちむね多か
元句：那須与市むねたか (宗孝)
44. なかぬ螢がみをこが寿
元句：なかぬ螢が身をこがす (都々逸)
45. にくま連者子にまたがる
元句：にくまれ者世にはばかる
46. 野崎村てはおそめかきもつ
元句：野崎村ではおそめ久松
47. のどかなるか寿みもへのほいかな
元句：のどかなる霞ぞのべのほひかな
48. 能ど乃かみの里つ希
元句：のどのかみのりつね(能登守教経)
49. 花入連かんど
元句：花よりだんど
50. ほていふく路をくふ
元句：ほていふくろく(布袋福祿)
51. 私しみたいな津る股引には満るお前乃めくらじま
元句：私しみたいなずる股引にはまるお前のめくらじま
52. わらんじゃ本郷へ行くわいな
元句：八百屋お七 わたしゃほんごへいくわいな
53. わ連鍋に土じぶた
元句：われなべにとじぶた (破鍋に綴蓋)

地口文に対して元句が添えられているものは、前半に数箇所あるのみで、ほとんど元句が添えられていない。地口文に使われている文字は、できるだけ元絵と同じ文字を使用したので読みに

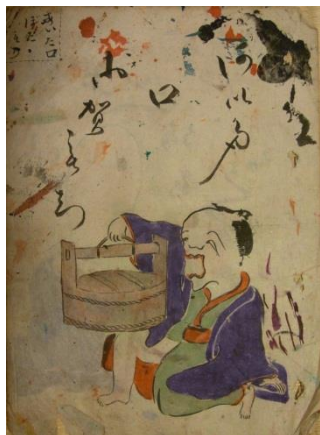
くい箇所があったかもしれないが、ご容赦願いたい。

なお、新たに元絵が発見されたので元絵を中心に絵解きをし、下記のとおり解説を加えた。

原本には、色彩が施されている。この絵の上に半紙を置き、氏子の青年たちが模写したので、墨や色絵具による汚れが目立ち、文言が解読できないため、読み誤りも考えられる。しよせん祭礼用の地口行灯。文字も踊り、絵も風刺画。気軽にご覧いただきたい。

1. あいた口お賀もち

元句：開いた口にぼたもち



読み方：あいたくちおかもち

おかもちは、岡持ちと書くが、文字だけでは品物が判別できない。地口絵にある持ち手がついた桶のことである。これも単にオカモチとボタモチの音が似ているだけのこと。絵柄は異なるが、羽村市郷土博物館蔵の地口絵にも同じものがあり、岡持ちを両手でささげ持つ絵が面白い。

※羽村市郷土博物館には、市内羽西町内にあった羽村提灯店から寄贈された地口関係資料が600点ほどある。

2. 朝顔に津留邊とら連てもらい水

元句：朝顔につるべ取られてもらい水



読み方：あさがおにつるべとられてもらいみず

言葉の地口ではなく、この地口絵は、若い女性の顔が朝顔の花で見る人を楽しませてくれる。

元句の作者は、元禄時代の俳人・加賀の千代女。ほかに、「蜻蛉釣り今日はどこまで行ったやら」の句がある。

3. 姉乃みやげを妹がしめる

元句：姉の宮城野、妹のしのぶ



読み方：あねのみやげをいもとがしめる

左上隅に「姉のみやぎの妹のしのぶ 奥州白石噺」と添え書きがある。羽村市には、「姉のみやこを妹がしめる」という地口があり、姉の都帯を妹が締めるという意味だが、ここでは、姉への土産の都帯を妹が締めるととりたい。

地口絵に描かれた桜の花模様の着物を着て立っているのは妹のしのぶ。人形浄瑠璃「碁太平記白石噺」の角書に「姉は宮城野 妹はしのぶ」とあり、作者は、紀上太郎、烏亭焉馬、容揚黛の合作。由井正雪の慶安事件と当時十一歳と八歳の姉妹が苦難の末、父の仇を討ったという実話をもとに脚色したもの。

姉の宮城野は吉原の傾城。妹の信夫は田舎出の娘。浄瑠璃や歌舞伎では、正雪事件よりも姉妹の仇討に重きがおかれ、別称の「宮城野信夫」が一人歩きしている感が強い。

4. あ免にか希ま寿からかさを

元句：お免にかけますかるわざを



読み方：あめにかけますからかさを

あ免に＝雨に か希ま寿＝かけます

万葉仮名風の文字や地口を楽しむ意味あいの文字は、多分に洒落や書き手の個性があり、古文書に詳しい人でさえ、読み切れない場合が多々見受けられる。ピエロ風の男は、かるわざ師。そこに地口文にある唐傘が描かれている。傘から連想するのは雨（あ免）。軽業師は、お目（免）にかけますと言っている。元句が理解できていないとピエロ風の男と唐傘は結びつかない。難解な地口の一つと言えよう。

5. 阿らばちにや津ばきに限る

元句：新ら鉢にや椿に限る



読み方：あらばちにやつばきにかぎる

簪（かんざし）を何本も髪に刺した見目麗しき女性が手に持っているのは、赤い花が咲いている植木鉢。しかも新しい鉢には、椿に限ると言っている。ここでいう新しい鉢＝新ら鉢とは、隠語事典によると、処女とか、女陰のこと。ということは、ここに描かれている女性は処女でなければ意味がない。さらに、深読みし、椿は唾と解釈すれば、ははあ、なるほどとご理解がいただけるというもの。

龍王山人著で幻の性資料とされる「桃源華洞」に昭和9年8月頃、浅草公園で三味線弾きの万公という人が都都逸で歌っていた「植木鉢買って何植えましょか。新ら鉢にや椿（唾）がよいわいな」とあることから、おそ

らく、その延長線上にこの地口がつくられたものと思われる。

6. 家康公乃御前にて剛憚を免しゆふゆふときむら重成

詞



読み方：いえやすこうのごぜんにてごうたんをめんじゆうゆうときむら

しげまさ

木村重成は、豊臣方の若き武将で大阪方の四天王の一人。大阪冬の陣の折、茶臼山で徳川家康との間で取り交わした和睦誓書の交換時に家康が押した血判が薄くて不明瞭だとしてクレームを付け、押し直させたというつわもの。これは、あくまでも逸話に過ぎないが、さらに尾ひれがついて、その時、家康は歳を重ねたので血が薄いのだと言い訳したとか。

絵を見るかぎり地口でも川柳でもないが、描かれている人物は、和睦誓書を手にした木村重成。

厳しい顔つきでスッと立っている姿が凛々しい。

7. いざりかつぶし車にのせて引けよみけ猫えんの下

元句：いざり勝五郎車にのせて引けよ初花箱根山



読み：いざりかつぶし くるまにのせて ひけよみけねこ えんのした
箱根を舞台にした浄瑠璃「箱根靈験鬘仇討（はこねれいげんいざりの
あだうち）」からの元句で、作者、司馬芝叟（しばしろう）が史実に基
づいて書いたもの。この物語は、いざり勝五郎と、その妻初花の人情話
で勝五郎は仇討の途中で病に倒れ、足腰が立たなくなってしまい、初花
の献身的な努力の甲斐あって本懐を遂げる。時に慶長四年八月二十四日。

「いざりかつぶし」とは、「いざり勝五郎」のこと。初花は、夫に本懐
をとげさせようと勝五郎を車に乗せて箱根山中に敵を探しまわった健気な女性。地口では、鯉
節を大八車に載せて猫に引かせるという念の入れようが面白い。さらに縁の下としたところが
憎〈猫〉らしい。

8. 一富士見たか三なすび

元句：一富士二鷹三茄子



読み方：いちふじみたかさんなすび

二番目の鷹を「見たか」とじぐっただけのことで、なんら深い意味はな
さそうだ。初夢に見ると縁起が良いとされるものに「一富士、二鷹、三
なすび」という諺がある。その昔といっても江戸時代、「駒込は、一富
士二鷹三茄子」と川柳にも詠まれたという。「富士は日本一の山」と歌
われる。鷹は、鷲鷹類の中でも賢く強い鳥で生態系の頂点に位置する鳥。
それでは、茄子は？となると、異見が多く、意見が分かれる。「秋茄子
は嫁に食わずな」という言葉を真に受けて一番美味しい野菜ということ
にしておこう。

9. 梅と山吹両手にもちてどれが山戸なる花じゃやら

都々逸



読み方：うめとやまぶきもろてにもちてどれがやまべなるはなじゃや
ら

達筆文が多い中で秀逸で、読解に苦しんだ。中道風迅洞編の『風迅洞
私選・どどいつ万葉集（徳間書店）』に「桃と桜を両手に持って どれが
実のなる花じゃやら」というのがあり、これを参考に読み解いた。山戸
の読み方は、神戸をコウベと読むことから、山辺とした。一般に、都々
逸の作者は、詠み人知らずが多い。

10. ゑび賀さいをつる

元句：ゑびでたいをつる



読み方：えびがさいをつる

海老が賽を釣るという意味で海老を頭の上に載せた釣り人がサイコロを釣り上げている絵が添えられている。元句は、小さな海老で大きな鯛を釣ることから、転じてわずかな元手で大きな利益を得ることにたとえたもの。

地口では、人が海老を釣り上げたのでは面白くないので、海老が賽を釣るとしたところに地口らしさがある。

11. 大お乃くらふ兵エ

元句：大野九郎兵衛



読み方：おおおのくろうべえ

左隅に「大野九郎兵衛 赤穂奸臣」とあり、二頭身に描かれた大野九郎兵衛の顔が大口を開いて大きな斧をくわえている。

姓は大野、名は知房。播州赤穂藩浅野家の末席家老だが、塩田開発に貢献し、家老になった人物。筆頭家老大石良雄こと大石内蔵助と相容れぬところがあり、仮名手本忠臣蔵では元絵に記されているように奸臣とされ、よこしまな臣下として登場する。大野→斧→大斧。九郎兵衛→食らう兵衛→くらふ兵エ、となったもの。

12. おかるはにかいでなめかがみ

元句：おかるは2階で延べ鏡



読み方：おかるはにかいでなめかがみ

地口絵の左上に「忠臣蔵七段目 おかるは二階でのべかがみ」と記されている。延べ鏡とは、懐中鏡のこと。浄瑠璃の仮名手本忠臣蔵に「思ひ付いたる延べ鏡、出して写して読み取る文章」とある。おかるは、仮名手本忠臣蔵で夫の早野勘平のために祇園に身を売る健気な女。その金の前金 50 両が悲しい事件の引き金になり、殺人事件や誤解を生んで行く。哀れ勘平は自殺してしまう。

地口絵では、おかるが2階で鏡をなめているが、懐中鏡では、絵にならないので鏡台が描かれている。勘平が外から見上げている構図。

13. おさん賀ねぼけて勝手の寿みで おはちかゝへて澤庵ぼりぼり

元句:おさんねぼけて勝手のすみでおはちかゝへてたくあんぼりぼり



元句は、左上の隅に書かれている通りに旧仮名遣いで記しておいた。文体は、内容も言い回しも地口ではなく、面白おかしく台所での出来事を文章にただけのもの。

寝ぼけたお産が手桶をひっくり返し、水がこぼれ、猫がびっくりして飛び退いている。おさんの白い太もも見せ場のひとつなのだろう。

おさん=おさんどん、今で言うお手伝いさん。

勝手=台所=キッチン。

おはち=お鉢=飯櫃=めしびつ。

14. おしゅん傳兵エ樽まわし

元句:おしゅん傳兵衛猿回し



読み方:おしゅんでんべえたるまわし

おしゅんの兄が猿回しだったことから、樽回しとじぐったもの。呉服商の井筒屋傳兵衛と祇園の遊女おしゅんの物語で、二人の心中事件を近松半二が取り上げた浄瑠璃「近頃河原の達引(ちかごろかわらのたてひき)」が人気を博した。通称「おしゅん傳兵衛」の名で、歌舞伎や義太夫、大正年間には映画化もされている。

「そりゃ聞こえませぬ傳兵衛さん」と言うせりふが後世に残り、「それは、納得できない」とか「そりゃあ、ないでしょう」というような場合に使ったというが、最近では、巷で耳にすることはほとんどなくなった。

15. お月様さへ夜遊をびなさる皆様の夜遊びもむりはない

川柳



満月のお月様が天空をゆっくりと西の空へ向かっていく様子。これを見て、お月様でさえ夜遊びするではないかといったところが面白い。そこで理解ある大人が若者たちに向かって曰く「君たちが夜遊びするのも無理はない」と。

なお、福島民謡「会津磐梯山」に「お月様さえ夜遊びなさる わしの夜遊びエーまた無理はない」と。また、長崎の平戸節をはじめ、杵築市の盆踊り切口説「逢えば心も〜御山御嶽」の中に「お月さんでさえ夜遊びなさる わしの夜遊び無理じゃない」というものもある。

地元の古老から聞いた話:祭りの前に青年たちが、みんなで元絵に薄い

紙を当てて書き写した。紙が薄いので元絵を汚して困った。みんなで手分けして書き写したので移し間違いはあったと思う。

16. おにたかぼふ

元句：おにゝかなぼふ



読み方：おにたかぼう

元句：おににかなぼう

漢字で書くと鬼高帽。地口絵には、金棒を持った鬼が山高帽子を被っている姿が描かれている。単純明解な地口のひとつ。

もともと強い鬼に金棒を持たせることは、さらに強くなるということで、俗に、「鬼に金棒、弁慶になぎなた」などと言うこともある。

17. おやおや此子はけつからない

元句：おやおや此の子はけしからない



はな垂れ小僧ならぬ、はな垂れ娘か。上半身が強調されて描れているが、服装が面白い。戦国時代の信長もこんな服装で描かれていたような気がする。「けつからない」という言い方は、「けしからない」という場合に聞いたことがある。

あきる野市阿伎留神社の祭礼の折、「おやおやこのこはけつからない」という地口提燈があった。この場合には、女の子の下半身が描かれてなく、空を飛んでいた。

18. おやまふまについてやら連猫に魚乃くわへにげ

都々逸



読み方：おやもうまについてやられねこにさかなのくわえにげ。

左上隅に平仮名で「どゞいつ」と書かれている。

かつては、日常生活の中でよくあった出来事で、悔しい思いをするのは、ちょっと目を放した隙に猫が魚をくわえて逃げて行くこと。この川柳に添えられている絵は、すりこ木を構えて猫を追うおかみさん。この格好は、一見ほほえましい風景にも見えるところがいい。

19. 敵討に遅れちゃならぬ少し磯貝十郎左エ門

詞



読み方：あだうちにおくれちゃならぬ

すこしいそがいじゅうろうざえもん

地口の世界で敵討とか仇討と言えば忠臣蔵。播磨国赤穂藩士の磯貝十郎左エ門は、本名、磯貝正久と言ひ、片岡高房（仁左エ門）とともに浅野内匠守長矩の遺体を引き取り泉岳寺に葬った人。筆頭家老大石義雄と意見を異にし、江戸で独自の行動をとっていた。その後、仲間に説得されて大石義雄グループの義盟に加わったので、遅れをとることはなかったのであるが、地口では、「遅れちゃならぬ」を受けて「少し磯貝」と少し急がしたところが面白い。

※「敵討」を「かたきうち」と読まずに意識して「あだうち」と読んだ。

20. 雷は成程こわい

元句：かみなりは鳴る程こわい

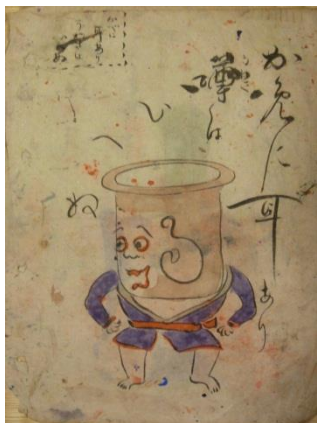


読み方：かみなりはなるほどこわい

「なるほど」とか「なあるほど」等の使い方をする相づちと雷の「鳴る」を掛けたもので、地口としては、初心者向け。しかし、絵そのものは、手が込んでいるもので書き写すのに大変手間がかかる。

21. かにに耳あり噂はいへぬ

元句：壁に耳あり噂はいえぬ



読み方：かににみみありうわさはいえぬ

壁を缶に変えただけのことだが、地口絵は空き缶に耳を付けた奇抜なアイデアがおもしろい。普通は、壁に耳あり、障子に目あり。どこかで誰かが見たり、聞いたりしているので、とかく密談は漏れやすいということ。時代劇に出てくる忍びの者は天井裏へ。となると、天井にも目ありか？

蛇足ながら、図書館の資料検索を見ていたら「壁に耳あり、トイレに目あり」という書名の本があった。

22. かんざけよ賀らう

元句：神崎與五郎



読み方：かんざけよかろう

元句： かんざきよごろう

左上隅に「播州赤穂義士神寄與五郎教休」と書かれている。表記された文字は、神崎→神寄 則休→教休 とある。忠臣蔵に出てくる浅野家の家臣・神崎則休のこと。神崎與五郎の名で知られている。

神崎與五郎は、四十七士の中では、随一の酒豪といわれ、地口の「かんざけよかろう」は、「爛酒良かろう」という意味か、真冬の討ち入りということで「寒酒」ともとれそうだ。

23. かんしんがなたをこ寿って時世とじせつ

元句：韓信が股をくぐって時世と時節



読み方：かんしんがなたをこすってじせいとじせつ

地口絵から判断して、「かんしん＝韓信」が思い当たる。「鉦をこすって＝股をくぐって」と解ければほぼ正解となる。

韓信は、紀元前の古代中国の秦末から前漢にかけて活躍した武将。項羽や劉邦に仕え、特に漢王劉邦の下で頭角を現し劉邦の覇権を決定付けた人物。

韓信の逸話：青年時代のある日のこと、男から挑発され、お前の剣で俺を刺してみろ、それともなくば、俺の股をくぐれと迫られたとき、大望を抱いている彼は将来を期して「恥は一時、志は一生」と屈辱に耐えて、その男の股をくぐったが、大いに笑いものにされた。しかし、その判断は後に屈辱に耐え、じっと我慢するたとえとして「韓信の股くぐり」と評価されるようになった。(出典：史記)
ちなみに、羽村市内の五ノ神神社をはじめ、近隣市の神社の彫り物に「韓信の股くぐり」が彫り込まれたものを見ることがある。

24. きゃらぼうもふでのあやまり

元句：弘法も筆の誤り



「筆の誤り」というフレーズから弘法大師を誰もが連想するのは当然のこと。しかし、「きゃらぼう」は聞きなれない言葉だ。観音様の陀羅尼經に「大悲心陀羅尼(大悲呪)」というのがある。よく耳にするのは、禅宗での「なむからたんのう」というお経がこれだ。弘法大師の真言宗では、この大悲心陀羅尼經の中に「きゃらぼう」という発音がある。おそらく聞く側即ち信者側には、このキャラボウだけが耳に残り、地口に

使われたのであろう。

25. 今日の夢大かさの夢

元句：京の夢大坂の夢



読み方：きょうのゆめおおかさのゆめ

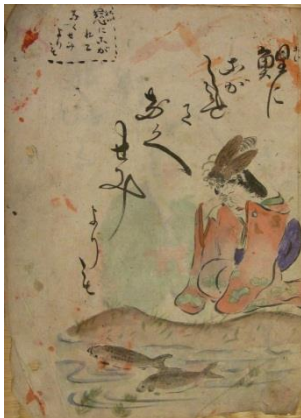
元句：きょうのゆめおおさかのゆめ

江戸版のいろはカルタ、いわゆる『江戸いろはカルタ』の最後に「京の夢 大阪の夢」というのがある。地口絵に大きな傘を描き、「おおさか」を「おおかさ」としたところが面白い。ほかに、穴沢天神の地口で江戸いろはカルタの言葉をもじったものは、①にくまれ者子にまたがる②すいか実を喰う、③おにたかぼう等がある。

このことから、地口行灯全般を見ると、江戸いろはカルタを元句としたものが意外と多く、いかにカルタが庶民の生活の中に浸透していたかも理解できた。

26. 鯉にこがれてなくせみよりも

元句：恋に焦がれて鳴く蟬よりも



「恋に焦がれて鳴く蟬よりも鳴かぬ螢が身を焦がす」の上の句。

鯉に恋した蟬を謳った都々逸。蟬を頭に載せた女性が背中を見せる鯉を見て泣いている姿を描いた地口絵が添えられている。

元禄時代の『松の葉』にも「声にあらわれ鳴く虫よりも言わで螢の身を焦がす」というのがあり、これが元歌の可能性もある。都々逸は、江戸～明治の全盛期から昭和の中頃までは寄席に欠かせなかったというが、最近では、寄席演芸の大喜利などで織り込み都々逸を見ることもあるが、新聞や雑誌の文芸欄から姿を消し、すっかり斜陽化した感が強い。

27. 此人は食はないて御金を多免た

元句：此人は桑苗でお金をためた



読み方：このひとはくわないでおかねをためた

元句が記されていなかったら、この農民は、食うものも食わずに収穫した農産物をお金に替えてごっそり貯め込んだと思ってしまう。地口絵には、生長した桑と鋤を持った農民が描かれ、鋤苗を食わないと言ったところがなかなか面白い。かつての西多摩地区は、養蚕ブームに沸いた時期があったという。当然のことながら、何種類も桑苗の改良が行われ量産されたに違いない。

28. 碁ばんをせなに猪口左衛門

元句：小萩をせなに長右エ門



伝説上の人物・小栗判官と照手姫（常陸小萩）の物語。説教節をはじめ、浄瑠璃、歌舞伎等で演じられ、江戸時代の人々の心を捕えた。地口にある碁盤は、小栗判官が荒馬・鬼鹿毛を乗りこなし碁盤の上に立たせたという逸話を元にしたもの。

猪口左衛門＝長右エ門 万屋長右衛門のことで、照手姫こと、小萩が雇われていた遊女屋の主人。小萩の小栗判官に尽くす姿は、まさに貞女の鑑として多くの人々の共感を与え、苦難の末、再び二人が結ばれるというめでたしめでたしの物語が多く庶民に受け入れられたものと思われる。

なお、小栗判官の物語は、庶民の中でも下層民から起こったとされる説教節が果たした役割が大きかったが、浄瑠璃や歌舞伎は21世紀まで生き残れたが、説教節は、今や特異な存在となってしまった。

29. 酒に壽留女は 仙台銭五文よ

元句：竹にすゞめは仙台さんのごもんよ

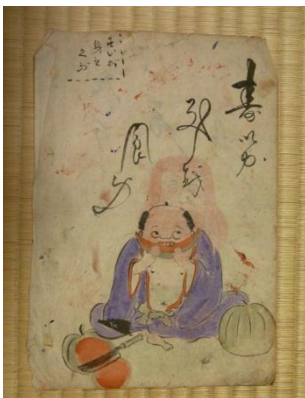


読み方：さけにするめはせんだいぜにごもんよ

酒とつまみにスルメを注文すれば、仙台藩通用銭で五文よ、という意味。仙台藩は、天明の大飢饉後の天明4年（1784）に仙台通宝という独自の鉄銭を鑄造した時代があった。竹に雀の家紋は、仙台笹とも呼ばれ、この家紋は伊達家14代の植宗が天文11年（1542）に上杉家から贈られたもので、15代の晴宗から定紋になった。

30. 壽いか実を食ふ

元句：粹が身を食う



読み方：すいかみをくう

世の中には、粹な人（いきなひと）とか、いなせ、通人とか言われ、特に花柳界や芸事等の社会に首を突っ込みもてはやされ、ついつい深入りして身を滅ぼす輩がいる。そんなのを地ぐって「スイカ実を食う」と言ったもの。反意語的なものに「芸は身を助く」というのがあり、ともに江戸いろはカルタにある。

31. 曾我の女郎うち乃まきわり

元句：曾我五郎富士ノ巻ガリ



読み方：そがのじょろううちのまきわり

元句：そがごろうふじのまきがり

兄は、曾我十郎祐成（すけなり）、弟は、曾我五郎時致（ときむね）

原画では、曾我の五郎と記されているが、五郎＝女郎 十郎＝女郎
どちらでも地口になるが、受け取り方は読み手次第。

うちの薪割り＝富士の巻き狩り＝源頼朝が富士の裾野で催した大演習。
このとき、蘇我兄弟が父の仇・工藤祐経を夜襲して殺した。

32. 多〴〵いて想いは阿じしめじ

元句：抱いて想いは味しめし



読み方：だいておもいはあじしめじ

世間一般に言われている「香り（匂い）松茸、味しめじ」をもじったもの。女性が抱いているのは、大きなキノコ。松茸はもちろんのこと、しめじも大好きな女性を描いたとするには、ちと、抱き方が尋常ではない。やはりここでは、も少し気を利かせて考えたほうが祭りの気分を高めてくれる。そして描かれているのは、しめじではなく、抱きがいのある太目の松茸＝男根を意味しているのだ。

なお、奥多摩湖の奥、川野の山中にある姫石観音は、地元の人たちが妊娠・安産を祈願した所。この社屋には、松茸を抱いた女性の彫刻があるので、一度足を運んでみてはいかが。ただし、足腰が丈夫でないと目的を果たすことは無理。

33. 高い山からかにそこ見れば

元句：高い山から谷底見れば



読み方：たかいやまからかにそこみれば

端唄「ぎっちゃんちゃん」の文句から。ちなみに一番は、『高い山から谷底見れば ぎっちゃんちゃん ぎっちゃんちゃん 瓜や茄子の花盛り おやまかどっこい どっこいしょ よーいやな ぎっちゃんちゃん ぎっちゃんちゃん』というもの。文献によると、江戸時代中期にはやり、明治になってリバイバルしたとのことで、この地口は、明治時代にはやったときのものと考えられる。また、長野県の本曾福島の民謡で結婚式の披露宴で歌われるのがこの歌「高い山」。囃子ことばが異な

るが、ほぼ同文。さらに、民謡・会津磐梯山に「高い山から谷底見れば
茄子や南瓜の花が咲く」とある。

34. たこくへ銭だすな

元句：他国へ銭出すな



読み方：たこくえぜにだすな

地口絵の男が蛸を食べているが、銭出すなと言っている。ただで〈無料〉食べてもいいよと言っているのか、食い逃げをそそのかしているのか、読む側で勝手に判断できるのも楽しい。

元句では、他国へ銭を持ち出すなと言っている。ここの他国とは、江戸時代の藩制による国を指している。奥州仙台の伊達藩では、国内にしか流通しない通貨を用いていたという。

35. たるまだいしゆ

元句：だるまだいし



達磨大師が正宗と書いてある酒樽の上に乗っている。これは、達磨大酒と読ませて大師と大酒をかけたもの。羽村市郷土博物館や所沢市のますだやの地口リストに同じものがある。

ちなみに、正宗と名がつく酒は、全国に百五十近くあるという。正宗と書いてセイシュウと読ませ、セイシュウ＝清酒＝マサムネとなったとか。まさに地口の世界がここにもあった。

36. だるまにおあしがあるも乃か

元句：達磨にお足があるものか



これは、地口よりも地口絵を楽しむもの。一升瓶が倒れて中の酒がとくとこぼれている絵から想像できることは、酔っ払って勢いづいたがために、本来なら手も足も出ないはずのダルマが自分自身の身体も忘れて手足を出してあばれている図が笑いを誘う。

本来、ダルマと日本人との付き合いは、歴史的には、達磨大師の仏教との関わりが深いことは言うまでもない。しかし、今では政治家とダルマにしか縁がなくなってしまったようだ。

ところが、あきる野市では正月 10 日に五日市のだるま市があり、同 12 日には青梅のだるま市が盛大に行われている。そして、小正月のどんど焼きでは、たくさんの古いダルマがお焚上げされる。

37. ちょいとおかめぢやおでんはだしで

元句: ちょいとおかめぢやおてんばそうで



読み方: ちょいと おかめじゃ おでん はだしで

おてんばをおでんと言ったところがミソ。おでんという名は、どこにでもいる女性の名前とは限らない。深読みすれば、「おでん」とは、徳川五代将軍綱吉の側室の名前。おでんの方と云えば、綱吉の子供を生んだ唯一の女性。綱吉が将軍職を継ぐと大奥入り。権勢を振るい子供のいない正室信子（御代様）と対立。綱吉は、生類憐みの令を悪法とされ、評判を落とし、お伝の方も出自が問題となり悪女的存在。地口でもおてんばとおでんを結びつけ、裸足で、しかもおか目にされてしまった。

38. 月夜に釜をふく

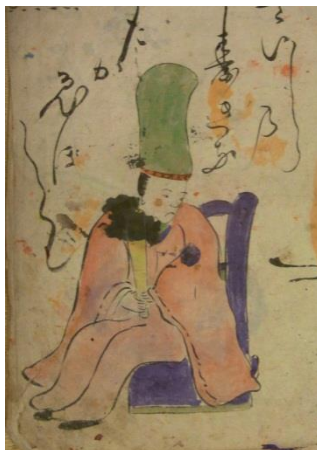
元句: 月夜に釜を抜く



「吹く」と「抜く」。同じように聞こえる言葉でも、絵を見ると、まさに釜を吹いている姿がユーモアを誘う。これも、同文が江戸と京都のいろはかるたにあるが、故事ことわざの辞典によると、「月夜に釜を抜かれる」で、月夜の晩に釜を盗まれるということから、ひどく油断することを意味するとある。文章的には、「抜く」よりも「抜かれる」のかもしれない。

39. ていし乃寿きな たかえぼし

元句: 亭主の好きな赤烏帽子



同義語で「亭主の好きな赤鯛」というのもある。烏帽子とは烏という字が使われているので黒色が普通だが、亭主が赤い烏帽子がいいといえ、家人は、それに従わざるを得ないことから、どんなことでも一家の主人のいうことに従わなければならないという諺。

赤烏帽子に似た言葉で高烏帽子としているが、烏帽子は、型式から立烏帽子、折烏帽子、風折烏帽子、高烏帽子などがある。

江戸いろはかるたにも元句と同じものがあるが、地口の「ていし」とは、絵姿から天使のようにも見えるし、被っている高烏帽子の色は、赤ではなくなぜか緑色である。

40. 戸蹴ったばあさん

元句「とぼけたばあさん」



読み方：とけたばあさん

戸を蹴り挙げた元気なお婆さん。古くからの言葉に「とぼけた婆さん小桶で茶あ飲め」とあるくらいだから、とぼけた婆さんは、案外と身近なところにいるかもしれない。青梅市小曾木の岩蔵温泉に近い御嶽神社の地口行灯にも「戸をけたばアさん」のことばがきと戸を蹴った婆さんの地口絵を見たことがある。それと、羽村市郷土博物館の地口行灯資料リストの中にも「戸を蹴った婆さん」がある。

なお、とぼけた婆さんの出典を調べてみると、いくつかの地口絵手本に書かれているが、古いものでは、幕末の弘化年間のものもある。

41. 飛んだ平八郎

元句：本田平八郎



左上隅に「本田平八郎」と記されているが、正しくは、本多平八郎。平八郎は通称で本名は忠勝。徳川家康の家臣で徳川四天王、徳川三傑に数えられた武将。彼は、桶狭間に始まり三方ヶ原、長篠の戦い等々、57戦無敗の将でまさにただ勝つのみ＝忠勝＝であったという。地口では、本多を飛んだと地ぐって槍を構えた平八郎が大きくジャンプした絵が面白い。現行の文言は「飛んだア」となっているが、元絵は「飛んだ」で筆写の段階で付け加えられたものと思われる。

42. 飛んで湯に入る夏乃武士

元句：飛んで火に入る夏の虫



今でも目にするのは、浅草伝法院通りの街路灯に文字遣いは多少異なるが同じ文言のものがある。これは荒川区南千住、泪橋の大島屋制作のもの。江戸じぐち事典（文芸社）によると、弘化4年の「地口画手本二へん」に同じものが掲載されているとのこと。

なお、羽村市郷土博物館にも市内の提灯店から寄贈された地口絵の中に同じものがある。

43. 奈寿乃りよいちむね多か

元句 「那須の与市むねたか」



読み方：なすのりよいちむねたか

平安時代末期の武将で、弓の名人とされ、那須与一（なすのよいち）宗高の名で知られる。彼は歴史上、名のある武将ではあるが、後世に書かれた平家物語や源平盛衰記に名前が出てくるのみで、一種謎の人物とされている。源平合戦の折、源頼朝軍にあつて、四国屋島の戦いで平家方が掲げた扇の的を見事射て名を挙げたことで知られる人物。

地口絵は、沖の小舟に立つ扇的の的に向かって那須与一が弓をきりりと振り絞っている姿が描かれている。弓に番えた矢をよく見ると鏑矢が描かれていて、物語と同じく忠実に描かれている。ところが、与一がまたがっているのは馬ではなく大きな紫色濃いナス。もちろん、ナス（茄子）に那須をかけたもので、地口絵としては満点の出来。那須与一を扱ったものでは他に類を見ない。

なお、元絵には那須与市と記されているが、ほかにも「与市」という表記が意外と多い。一般的には、那須与一で、与一とは一郎から始まり十郎までの男の名前であるが、与一は、余り一の意味で十一男につけられるという。

44. なかぬ螢がみをこが寿

元句：啼かぬ螢が箕を焦がす



読み方：なかぬほたるがみをこがす

左上隅に「なかぬ螢が身をこがす」と添え書きがある。

都々逸「恋に焦がれて鳴く蟬よりも鳴かぬ螢が身を焦がす」の下の句で身を箕に置き換えているところが面白い。ただし、文字だけでは、平仮名で書かれているので絵を見ると箕であることが分かる。

都々逸は、江戸時代の末に始まり、七七七五の音数で三味線とともに歌われた口語の定型詩で男女の恋愛物が多い。テンポのいい音律から江戸庶民に受け入れられ、都々逸坊扇歌（1804～52）によって大成された大衆娯楽。また、寄席芸としては、地口風に洒落をきかしたものが喜ばれ、現代でも大喜利などで大いに受けている。

45. にくま連者子にまたがる

元句：にくまれ者世にはどかる



読み方：にくまれものこにまたがる

端から憎まれるような人が、かえって世間で巾を利かせているという意味。憎まれっ子世にはばかるともいうが、ここでは、地口にあるような「にくまれ者」という言い回しでないと、子供にまたがる意味がない。

46. 野崎村ではおそめかさもつ

元句：野崎参りのお染久松

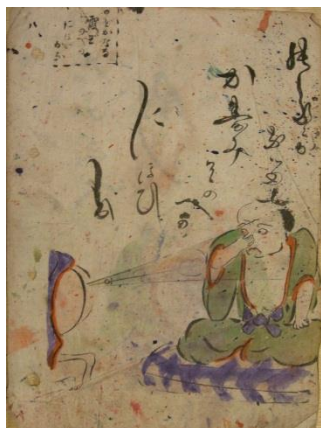


“野崎参りは 屋形船で参ろう”（のぎきまいりい〜は〜 やかたぶうねで まい〜ろう）の歌でお馴染みのはず。

浄瑠璃作家・近松半二の世話物「新版歌祭文」に登場するお染めと久松の物語。実際にあった事件をモデルにし、浄瑠璃や歌舞伎に仕立てられ、許婚と恋人が親の前で鉢合わせするという「野崎村の段」がヒットした。最終的には、お染と久松は心中してしまうが、実際に上演されているのは、『野崎村の段』がほとんど。地口文は、久松を傘持つと読み替え、お染が傘を抱きかかえている絵が描かれている。

47. のどかなるか寿みもへのにはほいかな

元句：のどかなる霞ぞのべのにはほひかな



江戸後期の戯作者・十返舎一九の「続膝栗毛」に「のどかなる霞ぞ野辺の匂ひなり」というのがある。一九は『東海道中膝栗毛』で有名だが、その続編があった。

元句からは、待ちに待った春を謳歌している様子が暖かさをも感じさせてくれるような名歌。それに引き替え、地口の下種なことこの上ない。これほどの落差を見せつけられるとは、戯作を得意とした十返舎一九も天国で苦笑しているだろう。

井上ひさしの『巷談事典』に「世の中は澄むと濁るで大ちがい 福は徳なり河豚は毒なり」というのがある。濁点の有無で文章の意味が異なってしまうのだ。井上ひさし流に考えると、「霞ぞ→かすみそ〈粕味噌〉」や「のべのにはほひかな→の屁の匂ひかな」は、同じ発想である。

48. のど乃かみの里つ希

元句：能登守教経



読み方：のどのかみのりつけ

地口絵から分かることは、喉から紙を垂らしているのが能登守で、地ぐって「のどのかみ」となり、さらにその紙を糊付けしたもの。甲冑姿は立派だが、情けない顔が笑いを誘う。これが地口絵の楽しいところ。

官位が能登守でノリツケと同音の者は、平家一門の武将として平家物語に出てくる平教経（たいらののりつね）しかいない。彼は、武勲の誉れ高い武将で源義経のライバル的存在だった。教経については、平家物語の記述が主で倶利伽羅峠の戦いや六箇度合戦に名前が残っている。

49. 花入連かんど

元句：花よりだんど



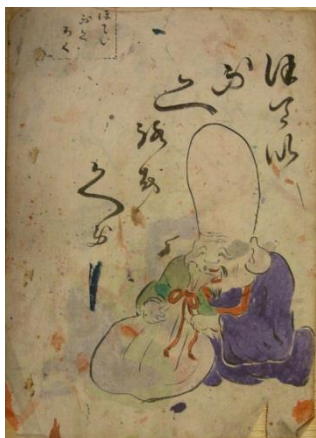
読み方：はないれかんど

駕籠や籠を「かんど」という言い方があったようだ。青梅線の沢井駅から東方に下る坂道を近くにある雲慶院の僧侶が駕籠に乗って通ったので古くは、かんど坂と呼んでいたと古老から聞いたことがある。地口絵は、背負い籠に花いっぱい絵が描かれている。季節の花が咲き、春うららかな陽気に酒入りのひょうたんを手にした男。ほろ酔い気分が伝わってくる。

「はなよりだんど」を元句とした地口が数ある中で、この句は美的要素を含みながら、地口絵としても楽しめるものと言えよう。

50. ほていふく路をくふ

元句：ほていふくろく



読み方：ほていふくろくう（布袋袋食う）

地口絵では、布袋様が袋の端をガブリと喰っている図。布袋が布製の袋を食べたらまさに共食いだ。

元句に「ほていふくろく」とあるように、布袋と福祿寿からの発想が面白い。

おなじみの七福神だが、ここ、あきる野市や青梅市では、健康志向も手伝って正月の七福神めぐりが盛んに行われている。布袋と福祿どちらも似ていて訳が分からなくなる。恵比寿を除けば、みんな外国から来た帰化人みたいなもの。福と金が人を幸せにしてくれるなら、こんないことはない。せいぜい、めぐり巡って幸せ気分だけでも味わいたいもの。

51. 私しみたいな津ゝる股引には満る お前乃めくらじま 都々逸



読み方：わたしみたいなずるももひきにはまるおまえのめくらじま

股引は、一般に冬物だが、クールビズとかで最近流行っているカラーステテコの元祖みたいなもの。女性ものは多分ないと思われるので男物をはけばズルズルなはず。ここでは、ぶかぶかではなく、ズルズルに意味があり、ずるい女に掛けたものか。

はまる→ど壺にはまるという言葉があるように、のめりこんで抜け出せなくなってしまったこととも解せる。

めくらじま（盲縞）→紺染め綿糸で織った無地の平織物。ここでいうめくらとは、恋は盲目などと使われるのと同じ意味合い。

52. わらんじゃ本郷へゆくわいな

元句：わたしゃ本郷へ行くわいな



左上隅に「八百屋お七 わたしゃほんごへいくわいな」と添え書きがあり、元句が記されている

地口絵は、わらじ顔のお七が着物姿で立っている絵が面白い。江戸本郷の八百屋の娘、お七の物語からの引用。お七は、寺小姓の生田庄之助（吉三）への恋慕の思いから放火未遂事件を起こし処刑される。井原西鶴の浮世草子「好色五人女」の中に「お七吉三」と題した物語が浄瑠璃やのぞきからくりで取り上げられ、からくりの文句「わたしゃ本郷へ行くわいな」という言葉が流行語になったという。さらに、落語では、地口がきいた『片足や本郷へ行くわいな』と笑いを誘う。

53. わ連鍋に土じぬた

元句：われなべにとじぶた



読み方：われなべにとじぬた

江戸いろはカルタに「割れ鍋に綴じ蓋」がある。

地口では、「土じぬた」に意味がある。

わ連鍋＝割れ鍋 土じ＝失敗すること 例：どじを踏む

ぬた＝どろ沼 例：猪のぬた場

土じは、ドジを踏むなどと、日常会話の中で使っている言葉。文字の一つ一つに土が関わっているようだ。土はもちろん土（つち）、じ＝地、ぬた＝どろぬま。まさに、ぬかるみにはまったら、どじを踏むことになる。

あきる野市留原・八坂神社の地口行灯

多摩地域、特に西多摩には、隠れた里に面々と地口行灯が残されている。しかし、時代の流れは、その継続性を危惧する時期を早めていることは確かである。たとえ継続性が保たれたとしても内容的には、その質量ともに変化が顕著であると言わざるをえない。その最大の要因は、描き手にある。現在、西多摩地域には、プロの書き手はいなくなってしまったため、子供の絵を多く見かけるようになってきた。

地口行灯の担い手は、その多くが提灯屋、際物商人などの手で受け継がれてきたが、昭和のバブル期頃からは、氏子の中で筆に覚えのある人役員、あるいは、書道の達人等に、さらに平成に入ってから絵手紙に心得のある人等に受け継がれているのが現状だ。

あきる野市留原では、八坂神社氏子の来住野又一さん（93歳）がその役を果たしてきた。現在、元絵とされている冊子は、昭和50年（1975）に書写されたもので、目次を入れて94ページ、93種類の地口絵が残されている。表紙には、「あんどん絵」と書かれているが、多摩地域には、あんどん絵という言葉は聞き覚えはないが、数年前、来住野さんの近くに住む篠村好雄さんから現在の小峰公園にある八坂神社のお祭りに「またぎ」として鳥羽絵を飾ったとも言っていたので、あるいは、古い言葉の鳥羽絵という言い方もあったのかもしれない。

冒頭に地口行灯と書いたが、この言葉も多摩では聞かない。春や秋の祭礼に家々で立てるのは、「とうろう」と呼んでいる。しかし、呼び名に関しては、ここでは、地口行灯に統一しておきたい。文献によれば、江戸市中で2月の初午に飾ったものが始まりとのことだが、多摩地域で初午の日に飾る風習はかつてはあったようだが、現在では恐らくないと思われる。

このたび、留原の「あんどん絵」を調べて分かったことは、八坂神社に伝えられている地口行灯の特徴として、第一に特筆すべきは、小倉百人一首を題材にした地口が26種もあること。第二に蒸気船や文明開化等、幕末・明治の時代背景が色濃く残っていること。第三に浄瑠璃や歌舞伎、あるいは中国の故事などに題材を求めた文化度の高いものなどが含まれている、の三点をあげておきたい。なお、留原の「あんどん絵」は、聞くところによると、旧五日市町小能の高取提灯店から元絵を借りて来て書写したもののようだ。同留原の篠村好雄さんが所有している元絵のコピーは、書写ではなく、機械コピーしたもので、手直しや書き加えがなく、旧態のままである。ただし、現存93種のうち25種のみが保存されているので全面的に比較することはできない。

留原は、あきる野市でも旧五日市町域で五日市憲法草案の地でもあり、商業地として八王子、青梅とともに高い経済力のある地域であったことから江戸から明治にかけて中央の文化も流入し易く、このため、各種の地口絵手本の入手を可能にし、しかも、その文化を受け入れるだけの地域力があり、地元の祭りに活用するだけでなく、戦前戦後の激動期をかいくぐり面々と継続してきたところに敬意を表したい。



あきる野市留原・八坂神社の地口行灯リスト（五十音順）

（先頭の数字は、解説順の番号）

- | | |
|----------------------------------|------------------|
| 28. あゝよかったと仕て帰る慈善会 | 詞 |
| 1. 穴でうなぎを少し釣とや | 元句：逢はでこの世を過してよとや |
| 2. 雨乞も八雲からでた和歌の國 | 俳句 |
| 39. 錠重みが銭じゃとて | 元句：如何にこの身が海士じゃとて |
| 40. 伊奈釣りや昨日は開き今日は煮る | 元句：稲妻や昨日は東今日は西 |
| 3. 芋やいもうと人のよぶまで | 元句：物や思ふと人の問ふまで |
| 41. 隠元禪師口王が邪魔 | 元句：人間萬事塞翁が馬 |
| 32. 印紙四角 | 元句：晋子其角 |
| 4. うど芽もぬたも喰へぬと思へは | 元句：人めも草もかれぬと思へば |
| 29. 午喰と聞けばおそろし唐の美女 | 川柳 |
| 5. おかさの飯にゆでしふきかも | 元句：三笠の山に出し月かも |
| 6. お津ゆも吸へぬくわいのとじかな | 元句：行く方も知らぬ恋の道かな |
| 42. 折りの内の寿司 | 元句：堀の内の祖師 |
| 43. 案山子は田甫の功なり | 元句：からすに反甫の孝あり |
| 44. 飛紋の着物ゑもん竹 | 元句：霞の衣 ゑもん坂 |
| 80. 肩できる風は君子の徳ならず | 詞 |
| 37. 各国へ根分は公使館に菊 | 詞 |
| 61. かぼちゃ野郎にはらませられて唐茄子みたよな子が出来た | 都々逸 |
| 7. 釜むれないに飯しこげるとは | 元句：からくれなゐに水くゝるとは |
| 30. ガラス窓ても見えそなものよ | 元句：加らす啼でも知れそなものよ |
| 45. 狐玉乃む | 元句・きつね忠信 |
| 62. 客を歓迎する家は繁栄する | 詞 |
| 46. 国のこやしに越王は尿をなめ | 詞 |
| 47. 轡の紋につれ立ちて | 元句・くるわのものに連れられて |
| 63. 下女の屁にさして咎めぬくさい中 | 川柳 |
| 48. 紅梅 土地によって蒸し | 元句・商賣道に依って堅し |
| 8. 子供ほし楚う阿王乃かる焼 | 元句：衣干すてふ天の香久山 |
| 77. 米賀のころ白水ハもう出さず | 詞 |
| 9. 碁をうちやめて昼を喰ふなり | 元句：世をうじやまと人は言ふなり |
| 33. 佐以せうけ以はく | 元句・水上警察 |
| 49. 坂道にてたゞを云ふ | 元句：与一兵衛定九郎 |
| 64. 左官のふしだら伯父の顔にまで泥を怒る | 川柳 |
| 65. 酒飲みものどを津き夜でいるものをくらひ酔とハ誰がいふらん | 元句：不詳 |
| 10. 塩には漬けよ生の釣り鮒 | 元句：人には告げよ天の釣り舟 |
| 66. 仕事に打込ば必ず興味がわく | 教訓 |
| 12. 地味も酒乱も酔酒の癖 | 元句・知るも知らぬも逢坂の関 |
| 11. 霜こそふらね足はひへけり | 元句：人こそ見えね秋は来にけり |

67. 数珠をもつどころか後家のすれからし 川柳
 31. 蒸気の見える鈴がもり 元句：上手奈手から水が洩る
 50. 白瓜生では喰ぬはず 元句：不詳
 68. 身上が寝ても目覚めぬひざ枕 川柳
 69. 菅笠も夜るは重なる夫婦旅 川柳
 51. 寿の毒と毛桃を加くす西王母 川柳
 52. 算盤ぱちぱち売徳を知り 元句・此の松たちまち大木となる
 70. 玉子酒ならば女房火を起し 川柳
 34. だんなは権とうしがすき 元句・ゑんまは盆とお正月
 35. 探報のはや聞 元句・聾のはや耳
 13. 津まづきこけぬ鼻緒切れけり 元句・つらぬきとめん玉ぞ散りける
 71. どうしたら良いか勝手の志れぬ嫁 川柳
 72. 読書は充実した人をつくる 教訓
 14. 那かなかきようひとりかんしん 元句・ながながし夜をひとりかも寝む
 15. 流れのたへぬ野道なりけり 元句：流れもあへぬ 紅葉なりけり
 16. 鍋釜かねはかたしと云ふらん 元句：むべ山風を嵐と言ふらむ
 73. 生玉子吞は時計に引油 川柳
 17. 荷をつくしても売らんとぞ思ふ 元句：身を尽くしても逢わんとぞ思ふ
 53. 裸体で寒くすゝり泣く 元句：川風寒く千鳥啼く
 18. はてな浴衣は着られぬものを 元句：はげしかれとは祈らぬものを
 54. 母の云ふなり孝女のつくね髪 詞
 19. 婆ゝ子の腕を杖に津きつゝ 元句：わが衣手は露にぬれつゝ
 20. 婆ゝころぶ手にうちわおり津ゝ 元句：わが衣手に雪はふりつつ
 21. 浜でおかしな蟹を追ひける 元句：花ぞむかしの香に匂ひける
 55. 春の野につくしつみたるちごのゆび 和歌
 56. 半切より美乃が安い 元句：案ずるより産が易い
 22. ひこ漬生で食ふ寿司もかな 元句：人づてならでい言ふよしもがな
 23. ひざは見えつゝ股をこそおさへ 元句：昼は消えつゝ物をこそ思へ
 74. 人の忠言を素直に聞くものは進歩する 教訓
 75. 日に向ける背中の人や冬の蠅 俳句
 81. 日をえらむうち月になる間の悪さ 元句：不詳
 76. ふうらいの嶋は目出たいしま 元句：至来の雛は見せたい品
 24. ふざけてものをおぶう小僧かな 元句：くだけて物を思ふころかな
 36. 文明開化に世はなった 元句：文福茶釜に毛が生へた
 57. 本妻くやしき内輪ずれ 元句：本蔵くるしさうちわすれ
 78. 松茸やお山遊びの大手が羅 川柳
 25. 箕ざる焦にし枯藁たくに 元句：乱れそめにし我ならなくに
 58. 娘閨中に入り花嫁となる 元句：雀海中に入りて蛤となる
 83. 娘にはいくど入れてもよい種痘 川柳
 59. 娘はだぬき馬鹿か志ら 元句：むきみ蛤ばか柱

- 26. 飯くふかなと思ひぬるかな 元句：長くもがなと思ひぬるかな
- 82. もの云へば松に問ひ古戦場 詞
- 79. 世の中をまるく真和礼とはと車 諺（ことわざ）
- 27. 嫁の寒いにお米とぐらん 元句：夢の通ひ路人目よくらむ
- 38. 世も武器も共に納めた智恵袋 詞
- 60. 若様とお守は軽くかけて行 元句：吾がものと思へは軽し傘の雪

I 留原・八坂神社のあんどん絵に見る百人一首地口

江戸時代にもっとも親しまれた百人一首だからこそ、これを元句に遊び心満点に似て非なる今で言う江戸のパロディ文学が進化を遂げた。小倉百人一首をネタに梅亭樵父の『地口繪手本』をはじめ、『どうけ百人一首』や、『戯場百人一首』、『蜀山先生狂歌百人一首』等々、数多くの地口百人一首が生まれている。

藤原義孝の「君がため惜しからざりし命さへ長くもがなと思ひぬるかな」を元句にしたものが10首以上もあり、狂歌の達人・蜀山人は、『蜀山先生狂歌百人一首』の中に「酩酊にすする海鼠腸味よくて長くもがなと思けるかな」と言うのがある。八坂神社の地口行灯にある百人一首の元句は、下の句などの部分的なものだが、それなりに読み解く楽しさは格別である。

1. 穴でうなぎを少し釣とや

元句：逢はでこの世を過してよとや



伊勢の歌「難波潟短き蘆の節の間も逢はでこの世を過してよとや」の下の句をもじったもので、文字だけ見たのでは、共通点は「あ・で・を・とや」しかなく、百人一首にたどりつくには、はなはだ困難。元句と地口には、似て非なるものを良しとするので、これぞ、地口の真髓をついているといえよう。地口絵は、男が腰をかがめて石の間に短い釣竿を入れてウナギを釣っている様子を描いたもの。出典は新古今集の恋の歌だが、地口の元句としては、小倉百人一首である。

2. 雨乞いも八雲から出た和歌の國

詞



この句は、百人一首と直接係わりはないが、自給自足の時代には、雨は天の恵みで、ひとたび日照りが続くと生死を分けた。雨乞いは雲に期待するところが大きいので国造りの八雲との関わりを見逃せない。あんどん絵は、和歌の集大成ともいえる小倉百人一首からの地口を多数採用している点を評価したい。右側の絵は、旧五日市町小能の高取提灯店の下絵。

3. 芋やいもうと人のよぶまで

元句：物や思ふと人の問ふまで

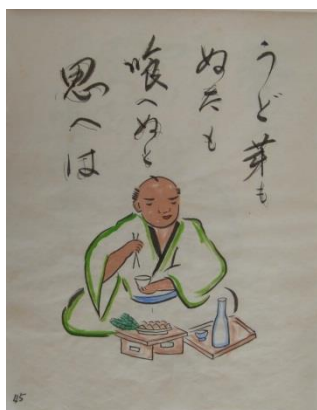


元歌：しのぶれど色に出でにけり我が恋は物や思ふと人の問ふまで
平兼盛

この地口から平兼盛の歌に到達するには、ほど遠い。芋を入れた籠を天秤で担ぐ人物と芋と妹をかけ、人の呼ぶまでと物売りを意味しているだけで、なんら恋とは関連がなく、物や思うと人の問うまでを上手にもじっている。

4. うど芽もぬたも喰へぬと思へは

元句：人めも草もかれぬと思へば



酒の肴にウドの芽もヌタも喰えぬと悲しげな顔の人物が描かれているが、百人一首にある源宗于朝臣の歌「山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば」が想起されるが地口文と地口絵からは、思いもよらぬもの。和歌の下の句を利用して如何に本句と異なるフレーズを生み出すかが地口のおもしろいところと言えよう。

5. おかさの飯にゆでしふきかも

元句：三笠の山に出し月かも



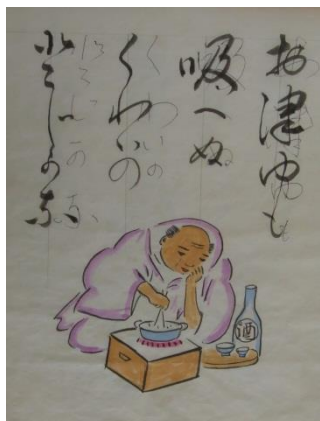
元歌：天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも
安倍仲麿

三笠の山=おかさの飯。いでし=ゆでし。月かも=ふきかも。安倍仲麿といえ

ば、奈良時代に遣唐使として唐に留学し、異郷の地から三笠の山を歌ったものと思われるが、望郷の想いなどまったく無視しここまで地口ってくれると、読むほうも楽しくなるし、だんだんと地口の良さが身についてくるような気になってくる。

6. お津ゆも吸へぬくわいのとじかな

元句：行く方も知らぬ恋の道かな



元歌：由良の戸を渡る舟人棍を絶え行く方も知らぬ恋の道かな

曾禰好忠

地口繪手本には、「おつゆも吸わぬ慈姑のとじかな」とあり、若干の差がある。いずれにしても恋の歌、しかも失恋の歌をかくも地ぐってしまうところが心憎い。

7. 釜むれないに飯しこげるとは

元句：からくれなみに水くゝるとは



元歌：ちはやぶる神代も聞かず竜田川からくれなみに水くゝるとは

在原業平

文学的素養がある方は古今集や伊勢物語。江戸っ子気質でなくともごく普通の、いわゆる普通の方なら落語の「千早振る」でおなじみの在原業平の歌。上方落語の演目のひとつでご隠居さんのいい加減な解釈が笑いを誘う。百人一首で覚えた例の「からくれなみに」にご記憶の方も多はず。この地口では、お釜が蒸れなければ御飯が焦げるのは当たり前。百人一首の下の句を巧みに読み取った秀作。

8. 子供ほし楚う阿王乃かる焼

元句：衣干すてふ天の香久山



元歌：春過ぎて夏来にけらし白妙の衣干すてふ天の香久山

持統天皇

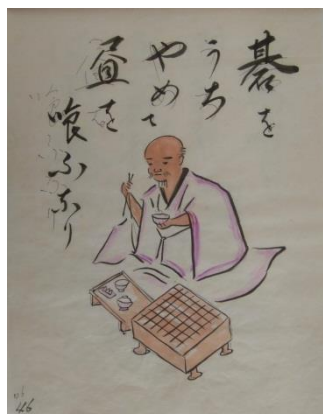
子供=衣　ほし楚う=干すてふ　阿王乃=あわの=天の
かる焼き=香具山　じつにうまく地ぐっている。

ちなみに、万葉集巻一28に「春過ぎて夏きたるらし白妙の衣ほしたり天の香具山」というのがあるが、ここの地口は、あくまでも百人一首にある女帝・持統天皇の歌の下の句をもじったもの。

梅亭樵父の百人一首地口繪手本に『子供欲しそう泡の軽焼』とある。

9. 碁をうちやめて昼を喰ふなり

元句：世をうじやまと人は言ふなり



元歌：我が庵は都の辰巳しかぞ住む世をうじやまと人は言ふなり

喜撰法師



この地口からあの有名な喜撰法師の歌が想像できるだろうか。昼を喰ふなり＝人は言ふなりを結びつけるのは至難の技。こんな意外さに地口の本髄があるのかもしれない。

10. 塩には漬けよ生の釣り鮎

元句：人には告げよ天の釣り舟



元歌：わたのはら八十島かけて漕ぎ出でぬと人には告げよ天の釣り舟

梅亭樵父の百人一首地口繪手本には「地口：塩にハ津けよな満の釣り鮎」。「元句：人には津げよ阿まの釣りぶ禰」とあり、文字遣いは異なるが「塩には漬けよ生の釣り鮎」という意味に変わりはない。

11. 霜こそふらね足はひへけり

元句：人こそ見えね秋は来にけり

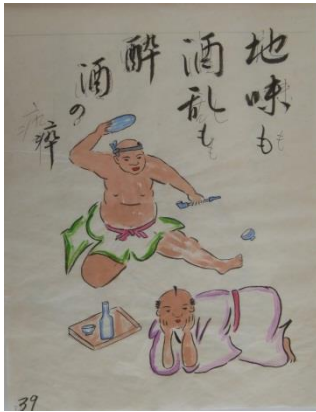


老人が炬燵に入っている絵に「霜こそふらね足はひへけり」と添えられていても、百人一首の歌の中から選ぶという条件なら誰もが恵慶法師の「八重葎茂れる宿の寂しきに人こそ見えね秋は来にけり」に思い当たるが、これもなかなか読み応えのある地口である。

なお、百人一首地口繪手本の絵は、老人がかい巻きか、どてらを行火に被せ、暖をとっている様子が描かれ、古き時代の素朴な温まり方がよく分かる。

12. 地味も酒乱も酔酒の癖

元句・知るも知らぬも逢坂の関



百人一首の中でも蟬丸の有名な歌「これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関」の下の句をもじったもので酒飲みの性格の両端をいったもの。梅亭樵父の地口繪手本に「じみも酒乱も酔酒の癖」とあり、読みは、「じみもしゅらんもようさけのへき」。

13. 津まづきこけぬ鼻緒切れけり

元句・つらぬきとめん玉ぞ散りける



元歌：白露に風の吹きしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞ散りける

文屋朝康

留原の地口絵に梅亭樵父描くところの百人一首地口繪手本の絵と同じものが描かれている。つまりいた男の手の位置から足の向き、そして鼻緒が切れた下駄の裏表までそっくりである。文言は「津まづ起こけぬ鼻緒きれける」と「津らぬ起とめぬ玉ぞちりける」の元句が添えられている。

14. 那かなかきようひとりかんしん

元句・ながながし夜をひとりかも寝む



元歌：あしびきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜を独りかも寝む

柿本人麻呂。

短歌三十一文字をまるまるじぐるのではなく、下の句だけを地口にしたものから元句を探し当てるには時間がかかる。簡単に元句が分かるようでは達成感がない。この歌の場合、なかなか、ひとり等の言葉に共通点があるので読み解きやすい。

15. 流れのたへぬ野道なりけり

元句：流れもあへぬ 紅葉なりけり



元歌：山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり
春道列樹

「野道なりけり＝紅葉なりけり」だけでも十分に元句にたどり着くことは出来るが、下の句全てが同じ母音ということもあって元句探しとしては、初級クラスといえよう。しかしながら、百人一首という枠の中でという前提があるからこそ、初級といえるが、百人一首以外からでは、なかなか困難な元句探しになりそうだ。

16. 鍋釜かねはかたしと云ふらん

元句：むべ山風を嵐と言ふらむ



元歌：吹くからに秋の草木のしほるればむべ山風を嵐と言ふらむ
文屋康秀



地口と元句とでは似ても似つかぬ文言になっているが、云ふらん（言ふらむ）に共通点を見た。

17. 荷をつくしても売らんとぞ思ふ

元句・身を尽くしても逢わんとぞ思ふ



元歌：わびぬれば今はた同じ難波なる身をつくしても逢はむとぞ思ふ
元良親王

絵は大きな荷物を前に男が台帳を開いて立っている姿から商人が荷物る気満々で台帳と首っ引きしているように見える。元良親王の歌から思いもよらぬ地口の出来の良さに感心してしまう。

18. はてな浴衣は着られぬものを

元句：はげしかれとは祈らぬものを



元歌：うかりける人を初瀬の山おろしはげしかれとは祈らぬものを
源俊頼

はてな？ ではなく派手なということ。浴衣を片肌ぬいだ絵は、なまめかしく、はげしかれとは一脈通じる地ころがあるのが面白い。

絵を見ていただければ、分かるように元句「はげしかれとは祈らぬものを」が前文にあり、地口が「はてな浴衣は着られぬものを」とある。ここでは、百人一首地口の中で唯一、元句と地口が並列して書いてあるところが他のものとの相違点。

19. 婆ゝ 子の腕を杖に津きつゝ

元句：わが衣手は露にぬれつゝ



元歌：秋の田のかりほの庵の苫をあらみ我が衣手は露にぬれつゝ
天智天皇

地口絵は、老婆が持つ数珠、子供が持つ杖ともに地口繪手本と同じだが、衣装模様は省略されている。絵柄の変更については、下絵に対するサンプルがないので、描き手の創意工夫で描かれている。

20. 婆ゝ ころぶ手にうちわおり津ゝ

元句：わが衣手に雪はふりつゝ



地口繪手本には、「婆ゝ 古禄ぶ手に団扇をり津ゝ」とあり、絵も類似している。

光孝天皇の歌「君がため春の野に出て若菜つむわが衣手に雪はふりつゝ」が元歌で下の句の七七を我が衣手から婆々を転ばせ、雪は降りつつの降（ふ）りを暗に降（お）りと読ませる意図があるなら、なかなかのものである。

21. 浜でおかしな蟹を追ひける

元句：花ぞむかしの香に匂ひける



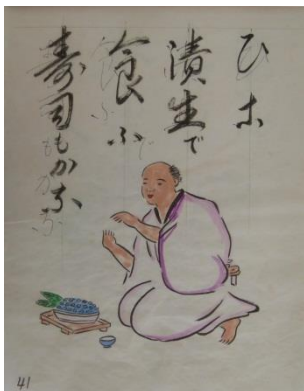
元歌：人はいさ心も知らず故郷は花ぞ昔の香に匂ひける

紀貫之

土佐日記の紀貫之の歌のほんの一部をいただいて「蟹を追う」としたところに語呂合わせの妙味を感じさせてくれる。

22. ひこ漬生で食ふ寿司もかな

元句：人づてならでい言ふよしもがな



元歌：今はたゞ思ひ絶えなむとばかりを人づてならで言ふよしもがな

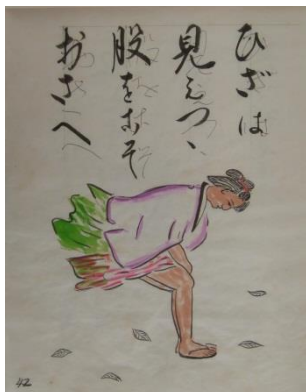
左京大夫道雅

地口絵は、百人一首地口繪手本と類似しているが、ここでも衣装の様子が省略されているのは、下絵に色絵が施されていないため、描き手独自のもの。

ひこ漬けとは、ヒコイワシのことと解する。和名：カタクチイワシの若魚を地方によりヒコイワシとか、シコイワシと呼ぶ。新鮮なイワシを甘酢漬けで食べるのが美味。

23. ひざは見えつゝ股をこそおさへ

元句：昼は消えつゝ物をこそ思へ



元歌：御垣守衛士の焚く火の夜は燃え昼は消えつゝ物をこそ思へ

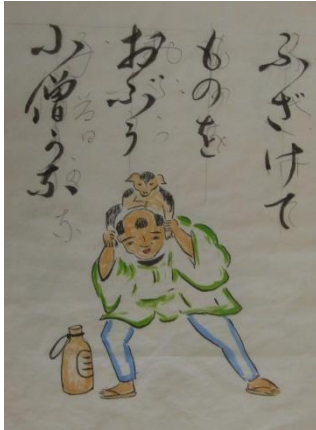
大中臣能宣

能宣には、失礼な句かもしれないが、着物の裾を風にあおられ、あられもない姿で風に向かって立つ女。百人一首地口繪手本に描かれた女性に比べ留原の絵は、髪型、着物ともに素朴とはいえ、いかにも田舎風に描かれている。



24. ふざけてものをおぶう小僧かな

元句：くだけで物を思ふころかな



元歌：風をいたみ岩うつ波の己れのみ砕けて物を思ふころかな

源重之

梅亭樵父百人一首地口繪手本では、おぶう小僧となっている部分が異なるだけで絵も犬を背負っている点では同じ。しかし、なぜか酒徳利の数が異なる。



25. 箕ざる焦にし枯藁たくに

元句：乱れそめにし我ならなくに



元歌：陸奥の信夫もちずり誰ゆへに乱れそめにし我ならなくに

河原左大臣

河原左大臣の名前を見なければ、女性の歌のようだが、モジズリという野草を思い起こす。梅亭樵父の地口繪手本には「箕ざる焦げにし枯わらたくに」とあり、かまどの火が箕ざるに燃え移りあわてている男が描かれている。ここで描かれている箕ざるとは、箕の形をした箒の一種であるが、あきる野市を含めた多摩地域で箕と呼んでいるもの。このため、留原の地口絵と比較すると、男の手足の向き、釜の蓋の向き燃えている藁や箕の向きも同じだが、箒が描かれている点が異なる。これは、地口繪手本の箕ざるを箕とざると解したものと考えられる。

26. 飯くふかなと思ふひるかな

元句：長くもがなと思ひぬるかな



元歌：君がため惜しからざりし命さへ長くもがなと思ひぬるかな

藤原義孝

「思ふひるかな（思う昼かな）＝思ひぬるかな」微妙に似ていて中身が違う点が面白い。まさに地口の神髓は、似て非なる内容を良しとする。

27. 嫁の寒いにお米とぐらん

元句：夢の通ひ路人目よくらむ



元歌：住の江の岸に寄る波よるさへや夢の通ひ路人目よくらむ

藤原敏行

「夢の通ひ路」を『嫁の寒いに』と地ぐり、冬の寒い時期に米をとぐ嫁の「人目」を「お米」と読み替えたところなど難解な地口だ。

なお、右側の絵は、梅亭樵父の地口繪手本に掲載されているものだが、女性の後ろに井戸が描かれている点が現行のものとの相違点。



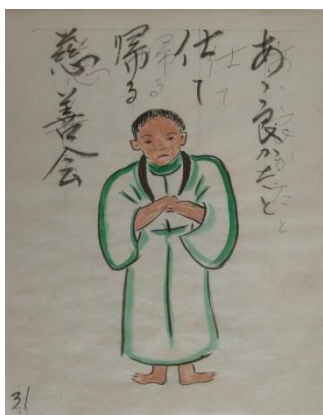
II. 地口行灯に見る時代背景

留原のとうろう絵の元となったと思われる地口繪手本は、御届・明治十九年六月二日、編集兼発行人・堤吉兵衛の「新撰地口図会」で幕末から明治にかけての鈴ヶ森から見える蒸気船のことや、文明開化などの言葉が使われている。先の百人一首地口繪手本の二十六点に続いて二十五点が新撰地口図会と同じものがある。

実際の表記は一場面に元句が先に書いてあり、併記して地口文が書かれている場合が多いが、地口文と元句が並列に書かれていたり、前文に地口、後文に元句が書いてある場合も見られた。そもそも、これらの地口絵の元になっているいわゆる「地口繪手本」を何点か調べてみると、右隅の囲いされた中に元句が小さく書いてあり、地口文と地口絵が添えられているのが定番となっている。それが一ページに3点の場合もあれば、全面で一点の場合もある。ただし、木村勘次編の「新撰地口燈籠」の場合、元句を先に、それと地口が並列に書かれている点が留原の「あんどん絵」と共通している。なお、新撰地口燈籠の奥付に、明治十八年一月廿九日御届 同二月出版 定價金十二錢五厘とあった。

28. あゝ良かったと仕立て帰る慈善会

詞



繪手本には、「アゝよかったと仕て帰る慈善會」とあり、現行のものは、新仮名遣いで書かれている。今は、社会福祉という言葉が定着しているが、明治時代に発足した慈善会とか慈善事業が大正時代には、社会事業へと、そして、戦後には、社会福祉事業へと言葉とともに内容が充実してきた。全国組織の名称を見ても、中央慈善協会→社会事業協会→社会福祉協議会と名前を変えた。ここでは、慈善会という名が明治時代を象徴し、時代を映し出した目新しい言葉が行燈に使われたといえよう。右側の古い下絵「慈善會」の文字に古さを感じる。



29. 午喰うと聞けばおそろし唐の美女

旧字体文: 午喰うと聞けば和そろし唐の美女



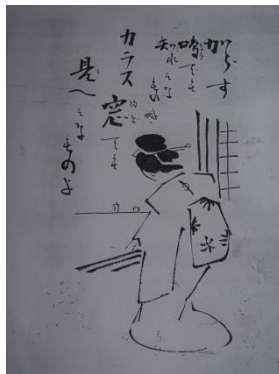
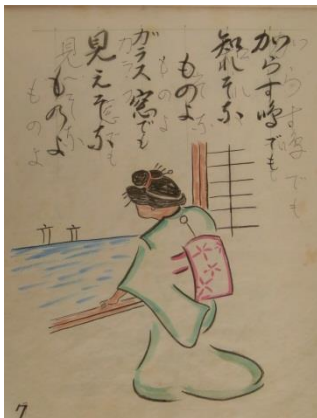
旧字体の地口には、午という字に「むま」とルビがある。また、唐には「から」とルビがある。河竹黙阿弥の通し狂言「島衛月白浪」(しまちどりつきのしらなみ)の中のセリフに「蛇喰うと聞けばおそろし雉子の声」というのがある。

文明開化の時代、東京銀座で牛肉を食べることは、時代の最先端を行く人だったのでしょ。ところが、馬肉となるとまだ一般化されていなかったよ。しかも唐の時代、見目麗しい女性も馬肉を

食べたと聞き、恐れをなしたというもの。干支の午と丑とでは、間違ふことはないが、午と牛とでは、達筆な文字に出合うと読み違えもある。角の有無で読み方が違ふと教わった。

30. ガラス窓でも見えそなものよ

元句: からす啼でも知れそなものよ



新撰地口図会では「ガラスまどでも見へそなものよ」とあり、元句

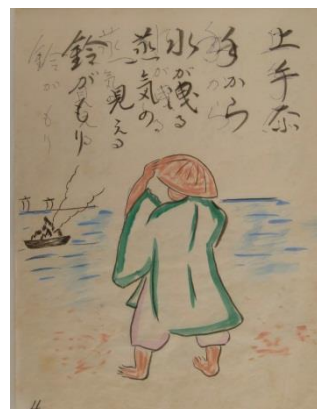
は「からす鳴きでも志れそなものよ」となっている。ところが、地口行燈語呂合とは、微妙な違いがあり、「本文: 鳥なきでも知れそな物よ 洒落: ガラス窓なら見えすく物サ」となっている。「からす啼かでも」と「からす啼きでも」を較べたとき、鳴くか鳴かぬかで意味合いにも大きく違ってくる。正解は別として、言葉のリズムからは旧五日市町小能のあ

んどん絵にある「からす啼でも知れそなものよ」を採りたい。時代は、

江戸から明治へ。そして障子からガラス窓に変わった。人々の生活にも新しい世界が広がり、ガラス窓の普及を象徴している地口でもある。

31. 蒸気の見える鈴がもり

元句: 上手奈手から水が洩る



鈴ヶ森から蒸気船が見えたのは、黒船来航以後の話。江戸湾に浮かぶ蒸気船に日本人の目が向けられていた時代があったのだ。

なお、地口行燈語呂合は「本文: 上手の手から水がもる 洒落: 蒸気の見へる鈴がもり」とあり、作者は四方赤良。この人は、蜀山人こと太田南畝で、多摩地区を管轄していたお役人でありながら狂歌師。雅号に玉川漁翁ともいう。朱楽官江とともに勅撰集集の千載和歌集をもじった万載狂歌集の編者。蜀山人の名では、在原業平の「世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」のパロディ狂歌「世の中にたえて女のなかりせば男の心はのどけからまし」が知られている。さらに付け加えれば、『雑巾も当て字で書けば蔵と金あちらふくふくこちらふくふく』などの狂歌がある。この人、仕事柄、多摩川流域の名主クラスの家を渡り歩いてたとみえて福生市やあきる野市の旧家には、蜀山人のサイン入りの書がたくさん残されていると聞く。

32. 印紙四角

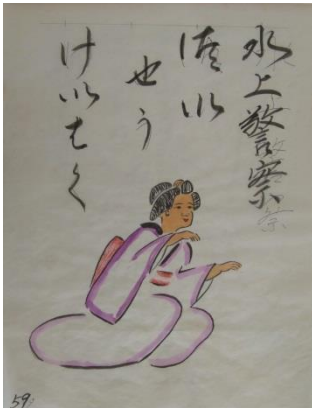
元句・晋子其角



元句、地口ともに四文字で最短の地口。新撰地口図会にまったくの同文があるが、基角を俳人の宝井基角と解釈すれば、雅号の晋子に行き当たる。地口行燈語呂合では、元句をいんし其角としている。いんしを隠士という意味にとれば語呂は良いが派手好みの基角には似合わない。印紙の歴史をたどると、明治時代。ものめずらしさからこのような言葉が生れたものだろう。宝井其角は、松尾芭蕉門下生で芭蕉後の俳諧の世界に洒落風を取り入れた人物で「切られたる夢はまことか蚤の痕」などの句はユニーク。また、基角の「草の戸に我は蓼喰う蚩かな」の句に対して芭蕉は、地口風に「朝顔に我は飯喰ふおとこ哉」とやり返している。宝井其角の「晋子其角俳諧撰選集」がある。

33. 佐以せうけ以はく

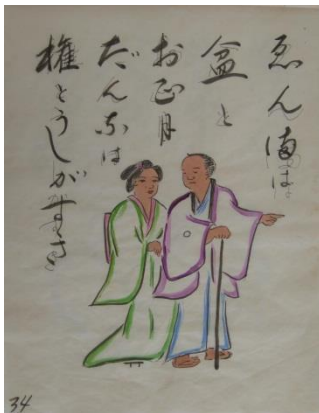
元句・水上警察



留原のあんどん絵では、「佐以せう」とあるが、サイショウとスイジョウでは、地口にならない。新撰地口図会に「津以せう け以はく」とあるが、漢字に直せば、追従軽薄となる。草書体の佐と津はまぎらわしいので書写段階で誤写があったと思われる。元句の水上警察という言葉は、明治時代からのもの。

34. だんなは権とうしがすき

元句・ゑんまは盆とお正月



文明開化の時代に銀座でただならぬ関係の女性と牛肉を食べる。これが名実ともに「旦那」と呼ばれた人物だったのである。権とは、当時の言葉で妾あるいは、二号さんのことで、ちなみに明治6年には、権妻禁止令が出されている。地口行燈語呂合に「本文：ゑん魔ハ盆とおしやう月 洒落：旦那ハごんとうしが好き」とある。また、元句が同じでも「閻魔は盆と塩鯉」というものもある。

35. 探報のはや聞



店の下絵で、前の2行が元句、後ろの2行が地口である。

元句・聾のはや耳

明治時代の新聞記者は、探報員と呼ばれ、情報収集に走った様子が、今いうマスコミ記者に通じるものがある。新撰地口図会には、「探報の早聞(たんぼうのはやぎき) 聾のはや耳(つんぼうのはやみみ)」。地口行燈語呂合では、「本文:つんぼうの早みゝ 洒落:探ぼうの早聞き」とあり、語句の違いはあるが、言っていることは同じである。

なお、右側の絵は、旧五日市町小能の高取提灯

36. 文明開化に世はなった



地口行燈語呂合に「本文:文福茶がまに毛がはへた 洒落:文明か
い化の世になった」とあるが、新撰地口図会では、「文明開化に世がな
った」とあり、日本国旗が翻っているが、旗がなびく向きが留原のあ
んどん絵と異なる。まさに明治時代を象徴する「文明開化」の文字が
使われ、国旗を前面に出すことにより、日本の独立と世界を相手にし
た対外姿勢が読み取れる絵である。

元句: 文福茶釜に毛が生へた

37. 各国へ根分は公使館に菊



詞

明治時代のはじめ、フランス、アメリカ等の
各国は、日本に公使館を置いた。公使館とい
う言葉も耳新しく、日本の国を代表する菊を
贈ったが、地ぐって根分け=根回し。菊は、
聞くに通ずるとみた。左側の絵と右側の旧五
日市小能の高取提灯店の元絵を比較すると、
男の顔に髭があるかないかの違い。

38. 世も武器も共に納めた智恵袋

川柳



兜が描かれていることから明治時代よりも江戸時代かとも思われるが、おそらく江戸城の無血開城を意味しているものかとも解釈できる。武器という文字からは、弓矢ではなく大砲や鉄砲のイメージが感じ取れる。地口というよりは名言で言葉通りに受け取れば、今の世にも通じるものがある。

さらに考えられることは、国際連盟のような国際的な組織の誕生も考えられるが、時期的には、やや早い感がある。

Ⅲ. 浄瑠璃、歌舞伎、中国故事等と地口行灯

仮名手本忠臣蔵や義経千本桜をはじめ、在原行平を慕う海女の松風・村雨姉妹の長唄など、江戸時代の物語、中国の故事や四文字熟語等を知らないと言解できないような地口がたくさんある。

仮名手本忠臣蔵に関しては、江戸期の地口に必ず登場するが、百人一首に及ばないまでも、一般庶民の忠臣蔵に対する関心度の高さを感じる。漢字の本家・中国の故事・熟語が多いのも特徴の一つで我々現代人にとっては、仮名手本忠臣蔵とともに難解な地口ではあるが、読み解き甲斐を感じる。それだからこそ、地口の面白さ、奥深さをかみしめ、独りほくそ笑む楽しさがある。

39. 碇重みが銭じゃとて

元句・如何にこの身が海士じゃとて



旧五日市町小能の提灯屋・高取家にあった元絵を見ると、漢字にルビがあり、碇という字は、金偏に定と書いてある。また、銭と書いてかねとルビが付いている。「とて」も「といふて」になっている。

実際の場面では、元句が先に書かれていて真中に描かれた大きな碇に男が登っている。遠くには、富士山らしき山と帆掛け舟が見える。

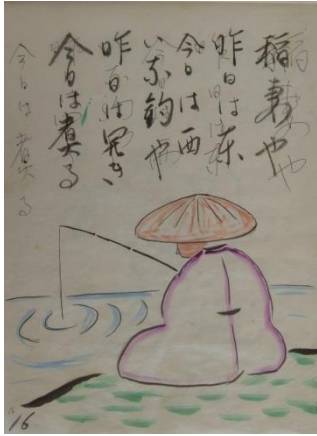
新撰地口図会には「碇重みが銭（かね）じゃといふて」とあり、縄が巻きついた大きな碇が描かれている。碇＝錨＝いかり。在原業平の兄、在原行平を慕う海女の松風・村雨姉妹の物語は、能にはじまり、浄瑠璃や歌舞伎にもとりあげられ、長唄「汐汲」にも「いかに此の身が海女じゃ」とある。

やというて辛気辛気に袖濡れて……」とある。

加藤福次郎編の地口行燈語呂合には、本文「いかに此身があまぢやと云ふて」洒落「碇りおもみが鉄ぢやといふて」とあり、四方赤良の作となっている。 ※洒落＝地口

40. 伊奈釣りや昨日は開き今日は煮る

元句・稲妻や昨日は東今日は西



元句は、地口にたびたび登場する宝井其角の俳句。今や、ことわざ辞典に載るほどの名句。稲妻の速さや変化から、世の中の移り変わりの速さに例えられている。いつの世もいつ、どこで何が起こるか分からない。

添えられている絵は、菅笠を被った僧侶にも見てとれる人物が糸を垂れている後姿。稲妻の句とは、静と動の違いがある。

伊奈とは、ボラの子で新撰地口図会には、魚偏に子と書き、そこにルビがふってあり、元句は、「稲妻や昨日はハひがし けふハ西」とある。絵は、大きな魚籠と釣り上げた魚が描かれ、躍動感がある。

地口行燈語呂合には、「鯰つりや昨日はひらき今日ハ焼き」とあり、煮るか焼くかの違い。

41. 隠元禪師口王が邪魔

元句・人間萬事塞翁が馬



口は不明文字。書写者自身が読解できず、想像を働かせて適宜漢字を当てはめていたが、漢字字典に当てはまる字はない。

新撰地口図会には、「隠元禪師韃王が邪魔」とあり、韃王にざいおうとルビがふってある。隠元禪師は、明国の高僧。地口行燈語呂合では、「いんげん禪師韃王が邪魔」とあり、こちらには、だおうとルビがふってある。どちらが正しい表記か、迷うところだが、韃王を採用したい。

韃王とは、ダッタン（タタール）人の王様と解釈すれば、中国読みの韃韃の王ということになるし時代的にも符合する。ちなみに隠元禪師は、請われて来日し、黄檗宗を開いた人というが、一般には、隠元豆でおなじみの坊さん。

42. 折りの内の寿司

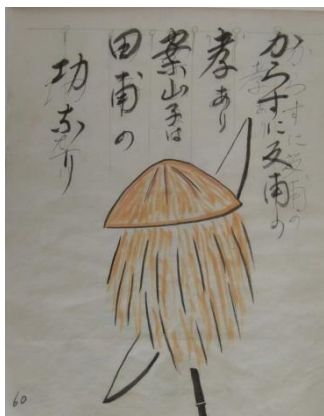
元句：堀の内の祖師



元句と地口文が並列に記されている典型的な例である。絵は、蓋のあいた寿司折を女性が指差している。絵手本では、ほとんどの場合が右上に囲みがあり、元句がやや小さな文字で一行に書かれている。同様に新撰地口図会には、「折のうちの壽し」とあり、折り詰め寿司のみが描かれている。地口行燈語呂合には「堀のうちの祖師……折のうちの寿司」となっている。

43. 案山子は田甫の功なり

元句・からずに反甫の孝あり



ここでも元句が先に、地口が後に書かれている。新撰地口図会には地口「案山子に田甫の功あり」。元句「鳥に反甫の孝あり」とある。カラスは、老いた親に対して食べ物を反哺して口移しに食べさせるといふ。親の恩に報いる親孝行の例えとして四文字熟語「慈烏反哺」という言葉がある。反は返すという意味、哺とは口中の食べ物のこと。中国、梁の武帝時代の孝思賦に「慈烏反哺以報親」とある。なお、「ぢぐ地あんどう」には、「芥子に蒲公英の昆布あり」というおもしろい句がる。仮名垣魯文の「地口雛形駄洒落早指南」に「鴉にはんぼの孝あり 蛙に田甫の聲阿り」というのもある。

44. 飛紋の着物ゑもん竹

元句・霞の衣 ゑもん坂



飛白と書いてカスリと読むが、絵模様から飛紋と書いてカスリと読ませるのも江戸っ子の遊び心かも。一般的に漢字一字で緋と読ませる場合が多い。新撰地口図会の地口も飛紋と書いてかすりとルビがふつてある。絵は、黒地の着物に白模様の緋が描かれているが、留原の地口絵は、白地に黒の緋模様。また、開化地口画手本には、「かすりの着物ゑもん竹、元句・かすみの衣ゑもんざか」とあり、えもん掛けにかけられた緋の着物と粹な女性が描かれている。地口行燈語呂合には、「本文：かすみの衣ゑもん坂 洒落：かすりの着物ゑもん竹」とあり、作者は、宿屋飯盛（本名：石川雅望）。彼は、古語辞典「雅言集覧」で知られる国学者でもあり、宿屋のご主人でもある関係で狂歌師・宿屋飯盛を名乗っている。右側の梅亭樵父の百人一首地口繪手本の絵と比較すると左側の絵には女性の姿はない。

45. 狐玉乃む

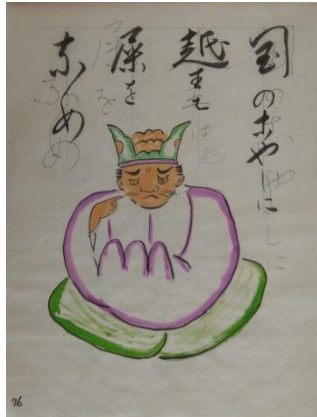
元句・きつね忠信



百人一首や時世の地口が多い留原・八坂神社の地口としては、異色な作品である。言ってみれば、どこにでもある地口の一つ。源義経の家臣・佐藤忠信は、平安時代末期の武将。源平盛衰記では義経四天王の一人。二百年後に書かれた『義経記』での活躍から歌舞伎や人形浄瑠璃で演じられた『義経千本桜』の狐忠信こと源九郎狐のモデルとなった。「地口あん登宇」には、「狐忠のぶ→きつね只呑む」というのもある。

46. 国のこやしに越王は屎をなめ

諺



古い下絵には「国のこやしに越王ハ屎をな免」と書かれているが、國ではなく、国とあることから、戦後に書かれた可能性も否定できない。

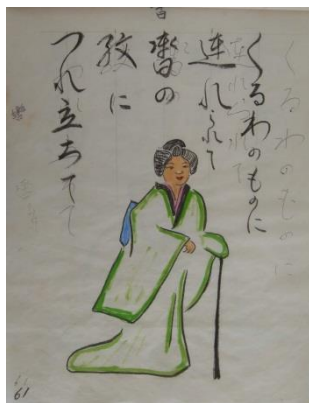


中国の春秋戦国時代、呉と越は、隣国同士常に争っていた。越王の勾踐は、呉と戦い、大敗。会稽山に逃げ、呉王に許しを請い、救われた。しかし、「会稽の恥を雪ぐ」という故事が生まれた。この気持ちを忘れないために毎食事ごとに動物の肝をなめたという。これが、ここでは屎（糞）になっている。→「嘗胆」。

一方、呉王も夫差も父の恨みを忘れまいと薪の上に寝起きしたので『臥薪』。合わせて「臥薪嘗胆」という故事を残した。

47. 轡の紋につれ立ちて

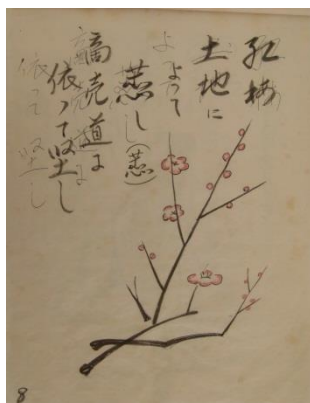
元句・くるわのものに連れられて



新撰地口図会もほぼ同じで「轡の紋につれだちて」元句は「くるわのものにつれられて」とあり、絵は、杖をついた女性の顔が○の中に十の字を書いた家紋になっている。

48. 紅梅土地によって蒸し

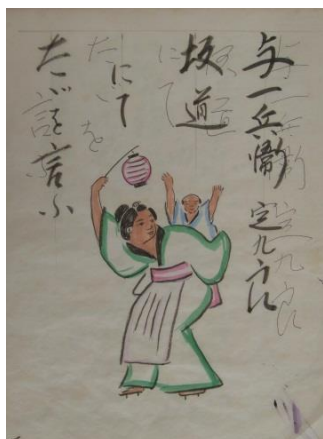
元句・商賣道に依って堅し



新撰地口図会では、「紅梅土地によって薫し」とあり、薫にルビがふってある。読み方は「かんばし」。地口行燈語呂合では、『紅梅土地によってうるわし』として蒸しを「うるわし」と読んでいる。やはり梅の花の香りに対しては薫ばしがいいし、語呂も似つかわしい。

49. 坂道にてたゞを云ふ

元句：与一兵衛定九郎



新撰地口圖會では、「夜みちにてたゞいおふ」とあるが、おそらく、書写の時点で「夜みちにて」を「坂みちにて」と読み違えたものであろう。

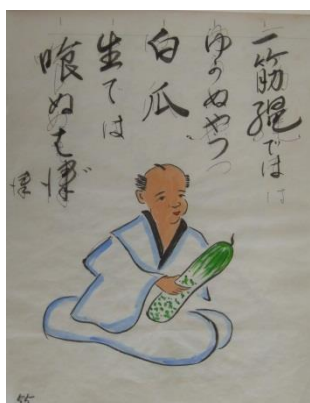
子供を背負った女性が提灯をかざしているのです。ここでは、夜道と読みたいところ。達筆な文字は、なかなか解読困難なものが多い中で特に提灯屋が書く祭の文字は、踊っているようで判読しがたいものが多い。

与一兵衛と定九郎といえば、仮名手本忠臣蔵。お軽の父親・与一兵衛は、「おーい、おーい親父どん」と声をかけられ、50両を奪われる人物。声をかけ、与一兵衛を殺したのは定九郎。塩冶の家老・斧定旧太夫の息子。

仮名手本忠臣蔵の人気は、尋常なものではなく、登場人物の多くが地口化されていることでも人気のほどが理解できる。

50. 白瓜生では喰ぬはず

元句：ひと筋縄ではいかぬ奴



シロウリは、糠漬けや奈良漬にされるから生では食べないはずだと言っている。ひと筋縄を白瓜生ではと言ったところが面白い。答えを見れば何ということはないが、ひと筋縄では、答えが出ないところが憎い。

51. 寿の毒と毛桃をかくす西王母

川柳



西王母は、伝説化された中国の神様の存在の女性。西王母が絶世の美女か老女かは別としてあわてて毛桃を隠すくらいだから、あまり生真面目に考えないこと。寿の毒とは、対男性、しかも中高年への警告ととりたいたい。

ところで、西王母といえば、花好きには椿、食通には桃でおなじみの名前でもある。日本人は中国名に高貴さを期待したのだろうか。

52. 算盤ぱちぱち売徳を知り

元句・此の松たちまち大木となる



地口行燈語呂合では、「本文：この松たちまち大木となり 洒落：十露盤ぱちぱち賣徳を知る」とある。留原のあんどん絵でも先に元句、後に地口が書かれているが新撰地口図会でもほぼ同じ文言があり、最初に元句が「此松忽ち大木と成り」地口が「算盤はちはち賣徳を知り」とある。「此の松たちまち大木となる」で思い当たることは、秦の始皇帝が雨宿りはをしていると、松の小枝がたちまち大木となり雨から身を守ってくれたという故事のことだ。常磐津の詞章の中にある言葉で、ほかにも「大雨しきりに降りしかば」なども地口化されている。

53. 裸体で寒くすゝり泣く

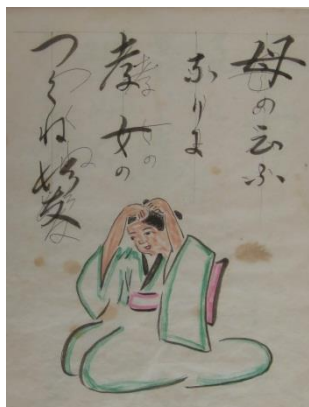
元句・川風寒く千鳥啼く



素っ裸の男が障子の前に立っている姿が描かれているが、新撰地口図会の絵は、背景はなく裸体の男の後姿が描かれ、「川風さむく千鳥啼 裸体で寒くすゝり泣き」とある。地口行燈語呂合には、「本文：川風さむく千鳥啼く 洒落：裸体でさむくすゝり泣き」とあり、花笠梅芳の作。端唄『我がもの』に同じ歌詞がある。また、古くは、拾遺集に紀貫之の歌「思かね妹がり行けば冬の夜の河風寒み千鳥鳴くなり」とある。

54. 母の云ふなりに孝女のつくね髪

川柳



つくね髪とは、捏ねる即ち、捏ねて団子状にしたもので飾り気のない髪のこと。捏ねるという言葉からは、突いて練ったものがツクネになったものか。

ちなみに、つくね芋とは、じゃが芋やさつま芋のような不定形の芋でヤマノイモの栽培変種。

55. 春の野につくしつみたるちごのゆび

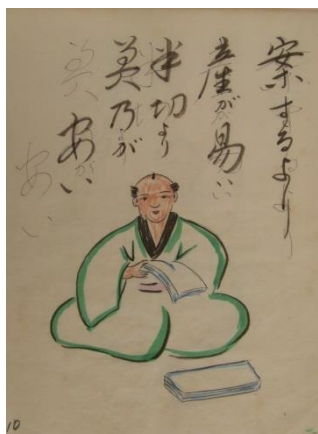
俳句



百人一首に目が向いているせいか、山部赤人の「春の野にすみれ摘みにと来しわれぞ野をなつかしみ一夜寝にけり」を思い起こすが、地口でも何でも無い。ツクシ、稚児、指から早春の野に遊ぶ無邪気な幼児を詠んだものであろう。

56. 半切より美乃が安い

元句：案ずるより産が易い



和紙には、書状用の杉原紙を半分に切ったもので縦が短く横長の和紙のことで、美濃紙のほうが安いという意味。ここでは、ハンギレと読む。元句の「案ずる」は、「案じる」としたものもあり、「餡汁よりも河豚が安い」という地口もあり、羽村市の阿蘇神社に残る地口行灯には、「あんずより梅が安い」というのがある。

57. 本妻くやしき内輪ずれ

元句：本蔵くるしきうちわすれ



絵は、本妻が手紙を破いて捨てるところが描かれているが、新撰地口図会の絵も本蔵の妻〇〇が手紙を半分に破いている。地口行燈語呂合には、『本文：本蔵くやしき打ち忘すれ 洒落：本さい妬しき内輪ずれ』とある。

仮名手本忠臣蔵の加古川本蔵は、歌舞伎や浄瑠璃での人気者とみえて地口の的にされている。長谷川園吉の地口絵本 東京地口にも本郷五百羅漢をもじって「本蔵おやこわかれ」というのもある。

58. 娘閨中に入り花嫁となる

元句：雀海中に入りて蛤となる



閨という字には、寝屋とか女性の部屋などの意味があるが、ここでは、寝室のこと。いみじくも娘から花嫁になるというお話。ちなみに、娘の傍らに枕が二つ並んでいるところに意味がある。雀と蛤の関係だが、その昔、中国の俗信では、空飛ぶ動物はみな水中に入り魚介類になると信じられていた。このことから、羽の模様が蛤に似る雀は、やがては海中に入り蛤になるというもの。しみじみ雀の姿を近くで見たが、むしろアサリに似ているが、蛤をイメージしたところが憎い。

地口行燈語呂合に「本文：すゞめ海中に入って蛤りとなる 洒落：處女閨中に入って花嫁となる」とあり、處女は処女でムスメと読ませている。

雀海中を元句にしたものは、ほかにもあり、「娘開帳に行きて花嫁となる」とか「娘くわいたい（懐胎）して花嫁となる」などがあるが、先の句に比べて上品さに欠ける。また、地口あん登字に「蛭蠅帳に入りて蛤となる」いうのもある。

59. 娘はだぬき馬鹿か志ら

元句：むきみ蛤ばか柱



新撰地口図会には、「むきみはまぐりばかはしら」「娘はだぬき馬鹿か志ら」とあり、両者の絵は衣装の省略はあるがほぼ同じような絵になっている。地口行燈語呂合では、「本文：むきみ蛤馬鹿はしら 洒落：娘肌ぬぎ馬鹿かしら」とある。

60. 若様とお守は軽くかけて行

元句：吾がものと思へば軽し傘の雪



右側の絵には、「己が物と思へば軽し傘の雪」と冒頭に元句が来て、「若様と和守はかるく欠け行」と地口が後半にある。

宝井基角の俳句「我が雪と思へば軽し笠の上」が元句で「吾がものと思へば軽し笠の雪」とも書かれ、本来は頭に被る笠であったが、ここでは傘になっている。新撰地口圖會には、「若様とお守はかるく欠て行」とあり、元句は「わがものと思へ

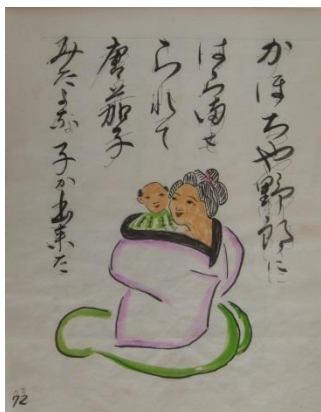
ばかるし傘の雪」とある。また、地口行燈語呂合には、「本文：わが物と思へばかるき傘のゆき 洒落：若さまとお守りハ早くかけて行」とあり、いつの頃からか、笠が傘に読み替えられている。

IV. その他川柳等

江戸市中の地口行灯に較べ、多摩の行灯には、川柳の比率が高いと研究者はいつているが、ここ留原のあんどん絵に限っては、川柳の占める割合は低い。内容的には、下世話なものから、卑猥なものまで、さらには、川柳の域を脱するような教訓的なものまでが含まれている。

61. かぼちや野郎にはらませられて唐茄子みたよな子が出来た

都々逸



かぼちや、唐茄子、いずれも畑の産物。土手かぼちやといえば、食べて美味いはずがない代名詞。苦々しく思っている親の立場から、こんなことは言えないが、端から見れば、はらませられてとか唐茄子みたいな子と蔑んでいるところが下品。現代では差別語として葬られてしまう川柳。右側の絵は、旧五日市町小能の高取提灯店にあった下絵。

62. 客を歓迎する家は繁栄する

詞



古今東西、いつの時代にも通じる言葉。駄洒落や下世話な川柳が多い中、祭礼の地口行灯にしては、超まじめなフレーズ。

63. 下女の尻にさして咎めぬくさい中

川柳



大店の番頭さんらしき男性とそこに働く女性との出来事か、主と下女との関係だとしても「くさい仲」となれば穏やかではない。あつてはならないとは言え、あつても不思議ではない男と女。色即是空の世界は、江戸時代も 21 世紀の現代でも永遠に不滅なのだ。

64. 左官のふしたら伯父の顔にまで泥を怒る

川柳

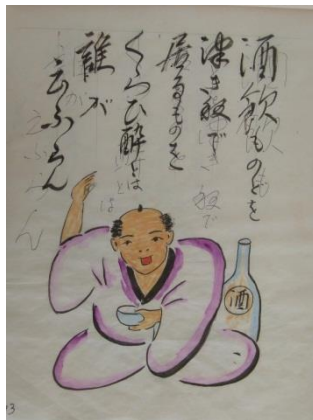


職人の世界にかかわらず顔に泥を塗るとはよく使う言葉。これが大工やとび職では話にならない。左官屋だからこそ川柳になるところがミソ。最近の左官屋さん、本格的な漆喰を扱うことが少なくなって、壁の補修さえも技術的にできなくなってしまったようだ。

左官職をはじめ、大工、木地師、杣師に至るまで、職人から敬われた聖徳太子。西多摩には、聖徳太子を祀った神社や石碑を見かけるが、奥多摩の最奥・山のふるさと村には、聖太子と彫られた巨大な石碑があるし、羽村市内には、職人たちが信仰する報徳神社がある。今や、顔に泥を塗るどころか後継者不足に悩んでいるのが実情だという。

65. 酒飲みものを津き夜でいるものをくらひ酔とハ誰がいふらん

都々逸



酒飲みも飲んでいるうちは、月夜のごとく明るく元気。月を肴に風流を決め込んでいる姿がどこか寂しげ。そこで、暗い宵に酔いをかけたものか。

右の絵は、旧五日市町小能の高取提灯店で使用していた下絵で、留原・八坂神社の氏子・木住野さんは、この下絵を見て描いていた。両者違いは、酒ビンの左は、ガラス。右は、陶器に見える。

また、顔つきも左は、現代的な優しい顔に描かれている。

66. 仕事に打込ば必ず興味がわく

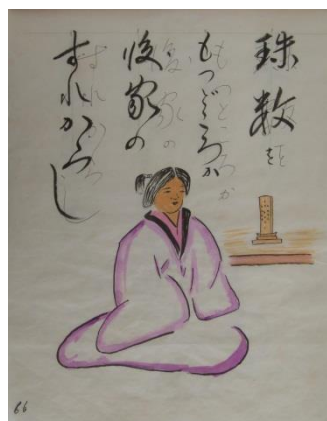
詞



なんとも分かり易く当たり前の教訓。何事においてもにでも、この通りにいかないのが人生。されど今の若い人たちに聞かせたくなるような言葉でもある。

67. 数珠をもつどころか後家のすれからし

川柳



すれからしという言葉がすべてを象徴しているが、後家と呼ばれるには、それ相当の年齢に達しているはず。後期高齢者では話題にもならない。地口絵では、亭主の位牌を棚に置き、第二の人生を謳歌しようと目論んでいる姿はまだ若い。

68. 身上が寝ても目覚めぬひざ枕

川柳



左側の文言は、「寝ても」と書かれているが、これでは、意味が通じない。旧五日市町小能の高取提灯店の元絵には、「宿ても」の部分に「つきても」とルビがふってあるので、身上が尽きているのに未だにひざ枕から目覚めぬと言っているのだ。ひざ枕をする場合、普通は女性の膝で男が寝るものと解するが、その逆も真なりか。この絵からひざ枕を想像することはできない。

69. 菅笠も夜は重なる夫婦旅

川柳



一見、菅笠を被った夫婦連れの姿から江戸時代を思わせるが、傍らに電柱と電線が走っている。これも明治時代を象徴する電気を意識した絵といえよう。菅笠が二つ別々でも宿に到着して夜ともなれば、この二つの笠は、重ねて置かれると解する人はいないと思う。夫婦旅と書いて「ふうふたび」とルビがふってあるくらいだから、何があっても不思議ではない。今や「にりんそう」を地ぐって「ふ

りんそう」というのもありの時代は、夜も重なるのかもしれない。右の絵には、電柱が絵が枯れているが、左の絵では省略されている。また、記されている文字も右の絵は古く、漢字にルビがふってあり、夫婦旅には「ふうふたび」とある。

70. 玉子酒ならば女房火を起し

川柳



明治時代、卵は貴重なタンパク源だったとようだ。ここ半世紀以上も卵の値段は価格的には安定というか、安止まり状態が続いているが、当時の人にしてみれば、生卵を飲むことは、今でいうドリンク剤に相当したのかもしれない。普及し始めたぜんまい式の掛け時計は、ぜんまいを巻くだけでなく、割合頻繁に潤滑油を付けて止まらないようにメンテナンスが必須だったと思われる。ただ、次の玉子酒となると、「風邪を引いたら玉子酒」が定番だが、この川柳の主役は女房。彼女の火起こしには、なぜか期待と色気を感じるのは考え過ぎであろうか。

71. どうしたら良いか勝手の志れぬ嫁

川柳



これも明治の女性。育ちの良し悪しは別として、おとなしく内気な大和撫子を詠んだ川柳と思われるが、地口絵からは、思い悩む姿がいじらしい。21世紀のなでしこ嬢からはこんなシーンは考えられない。

72. 読書は充実した人をつくる

教訓



活字離れが進む中、21世紀は紙からディスプレイへ。しかし、いつの時代でも文字が人の心を捉え、育むことに変わりはない。若いときに読書に親しんだ人は、豊かな人生観と人間性を持つ。図書館とは、夏、涼む所、冬、暖をとる所と心得る不屈きな輩が多い時代、せめて若者よ、読書するなら身近な図書館へ。

73. 生玉子呑は時計に引油

川柳



滋養強壯に生卵を呑む。新時代を象徴する時計。人類に限らず、鷲・鷹などの猛禽類や蛇は生卵が大好き。彼らにとってもいい蛋白源なのだ。我々が風邪を引いたと言つては、玉子酒を呑むように、生の卵は元気の源。同じように、むかしの時計は、油が切れると動かなくなる。そこで注油することで、また動き出すので生卵を引き合いに出したものと思われる。

74. 人の忠言を素直に聞くものは進歩する

教訓



人として人間としていつもこうありたいもの。これ地口とは言えないが、あきる野市留原に住む氏子一同の素直な気持ちの表れととりたい。

75. 日に向ける背中の人や冬の蠅

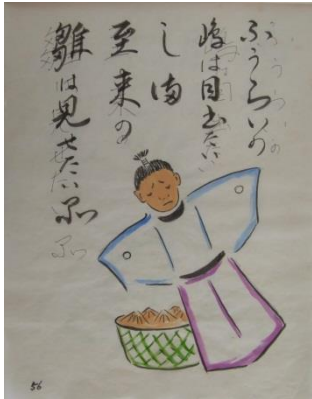
川柳



冬のひなたぼっこは人だけでなく、蠅にとっても気持ちがいいらしい。日向ぼっこする蠅は、なぜか憎めない。ところが、五月の蠅はうるさいと嫌われる。なにごとにもうるさい人は嫌われるようだ。

76. ふうらいの嶋は目出たいしま

元句：至來の雛は見せたい品



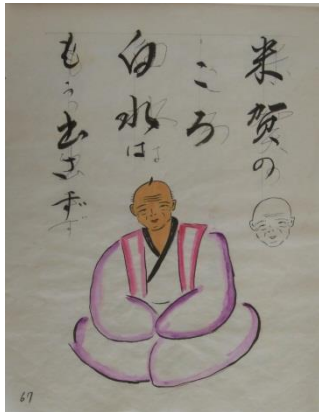
ふうらい（風来）＝到来＝至來 嶋＝雛

目出たいしま＝見せたい雛

3月の上巳の節句、平たく言えば、桃の節句に女の子の健やかな成長を願って送り雛の風習がある。これ等の贈られた雛人形は、自慢の子や孫とともに人には見せた品。

77. 米賀のころ白水はもう出さず

元句：不詳



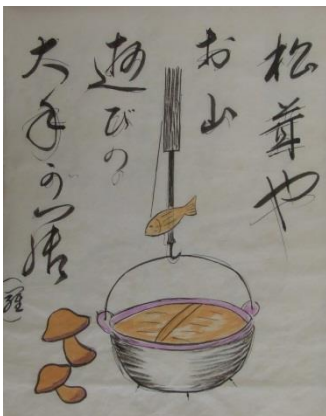
読み方：こめのがのころしろみずはもうださず

旧五日市小能の高取提灯店にあった下絵には、米賀に「こめのが」、白水に「しろみず」とルビがふってある。ごく普通に解釈して米賀とは米寿のこと。八十八歳ともなれば、男女の関係にあって、男の用を果たせないはず。そういう意ことか。

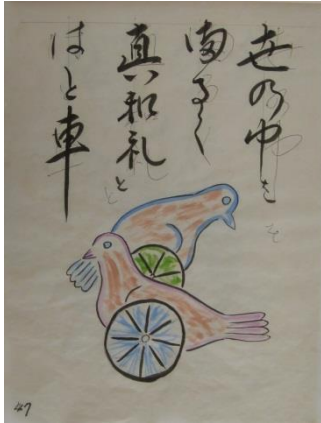
味で白水は出ないという

78. 松茸やお山遊びの大手が羅

川柳



秋の味覚、国産の松茸にはなかなかお目にかかれない今日この頃。子供が山へ遊びに行き松茸を見つけて持ち帰った。其の晩は早速、家族で松茸鍋に。おてがら、おてがらと褒められた子供。最近ではマツノザイセンチュウの被害で赤松が枯れたり、地域の高齢化で松山の管理が行き届かなくなってしまったため、松茸が絶滅危惧種同然。当然のことながら、子供が偶然見つけるようなチャンスは皆無。松茸ご飯も松茸鍋も望めそうにない。



川柳というよりも格言。前の句と同様、豊かな人間性を期待する言葉。人とのつながり、今で言う「きずな」を大切にする人々の思いと処世術を見たような気がする。いつの世にも通じる言葉だが、はと車を知る人も少なくなってきた。

※鳩車：木や土などで作ったハトに両輪を付け紐で引くようにした玩具。

80. 肩できる風は君子の徳ならず

今や、肩で風切る紳士も見かけない時代になった。

81. 日をえらむうち月になる間の悪さ

えらむ=選ぶ うち月=? 三月掛けに近い意味か。

82. もの云へば松に問ひ古戦場

五七五ではなく、五五五の並びがユニーク。

83. 娘にはいくど入れてもよい種痘

男と女が描かれている。これに意味がある。



あきる野市伊奈・岩走神社の地口行灯



多摩川を溯って行くと昭島市と八王子市、あきる野市の境界付近で多摩川の最大支流である秋川に入り、9キロほど遡った左岸にあきる野市伊奈がある。平安時代の末期に石を求めて信濃の国伊那の人々が移り住んで一村を開いたところである。ご当地は、伊奈石の産地で石臼、石造物、土台などが作られ、伊奈=伊那 文字は違って共通点がある。

また、あきる野市五日市は、名前の通り古くから市が立つ村だったし、隣接する伊奈も人々の往来が活発で、伊奈村と五日市村とは、互いにけん制し合う関係にあり、発展してきたが、五日市の商業流通VS伊奈の地場産・農業という関係の中で、主として五日市に経済や文化が集中することとなってしまった。その後、町村合併などを経て五日市町と増戸村となる。

現在、増戸村時代のものと思われる地口絵が残されているが、これらの地口絵は、昭和の時代から絵画に関心のあった地元の写真店・フォト中村の中村清作さんが保管し、現在でも岩走神社の地口行灯を継承している。残されている元絵は、半紙判で薄いながらも色彩が施されているものの劣化が進みボロボロ状態なのでコピーしたものを下絵としている。

現行のものは、この下絵と中村清作さんが羽村の提灯店の絵にならって描いたものを中心にポスターカラーで仕上げている。ここで注目したいのは、地口行灯の枠が横長で一般に使われているものの2倍ほどの大きさがある。そのため、描き手の中村清作さんは、縦に描かれた地口絵を横長にアレンジしている。若かりし頃画家を目指したというだけあって、祭り用の絵としての色彩、バランス、筆のタッチに至るまで素晴らしい絵に仕上がっている。例えば、着物の柄に注目すると、かつて羽村の提灯店が大事に守ってきた絵柄を忠実に再現して、雰囲気のある地口絵を生み出している。多摩地域には、プロの地口絵描きはいないが、それ相応の腕を駆使して地口絵に取り組む人が何人かいる。それぞれ個性があり、地元では、貴重な存在となっている。その中でも岩走神社の祭礼は最大級で、しかもこと地口行灯に関しては群を抜いていると言っても過言ではない。しかしながら、残念なことは、描き手も読み手も江戸時代から綿々と引き継がれてきた地口そのものを理解できないほど時代が大きく変化してしまったということだ。地口も言葉の一種とみれば、言葉は生きているのだから変化するのはやむを得ない。今後、祭の伝統を守りながら、地口行灯の存在をもう一度見直すチャンスの到来を期待してやまない。

1. 朝顔につるべとられてもらい水

元句:加賀千代女の歌



朝顔の蔓が伸びるのは、意外と早いもの。とは言っても、釣瓶に巻きつくまでには、事前に分かるはずだが、素直に考えれば、彼女の美しい花に対する思いやりが誰もの心を捕えたもの。この絵の元絵は、羽村の提灯店にあったもので着物の柄の描き方に特徴があり、さらに調査してみると、埼玉県所沢市に残る地口絵の絵柄と一致する。

2. 阿たごかくして富士かくさず

元句:頭隠して尻隠さず



あたご=愛宕山 富士=富士山。

世界文化遺産登録以前の話、古くは富士山と書いた。富士山信仰に係る浅間山を含めると富士山と呼ばれる山は、日本全国にいくつあるだろうか。東京都内だけでも相当数あるし、愛宕山も数えきれないほどある。名のある二つの山を織り込んだ名句。類似の地口で「愛宕かすんで富士かすまず」というものもあるが、このほうが一癖ありそうだ。

3. 阿当はみめぐりたゞ爰よ

元句:人は見目より惟心



元絵との比較ができないので文言の正否は断言できないが、江戸時代弘化3年の『滑稽地口鈍句集』に「江戸は見めぐり只こゝら」というのがある。なお、若い女性の右手は、肌けた部分を指差していると思われるが、左手の仕草が理解できない。羽村市の地口絵にも同様のものがあるが、絵柄が異なる。

4. あのここな黒鯛ものめめが

元句:あの此処ないつわりものめが



此処な=人をののしときの言葉。

白浪五人男の歌舞伎の演目に「弁天娘女男白波(べんてんむすめめおのしらなみ)」というのがあり、日本駄衛門が「あの此処ないつわりものめが」と罵る場面がある。この地口絵の語尾に「ものめめが」とあるのは、「むすめめおの」という部分を意識したものか。

また、黒鯛にも意味があり、おめでたい赤い鯛でないことを罵っているようだ。

5. あふぎに団扇お茶でもあがれ

元句：大きにお世話お茶でもあがれ



女性が手に持つあふぎ（扇）に団扇（うちわ）。現代社会では「小さな親切、大きなお世話」などと煙たがる御仁もあるらしい。右の元絵は、地元・伊奈に残されていたもの。

6. アラえっさっさ

元句：安来節の掛け声



おなじみ、安来節のどじょうすくい。左側の絵は、点灯された地口絵としては最高の出来栄え。右側の絵は、羽村市郷土博物館蔵の元絵で、現在、羽村市内で行灯として見ることはできない。

7. あんじるよりもふぐがやすい

元句：案ずるよりも産むが易い



「餡汁よりも河豚が安い」と読む。女性が箸でつまんでいるものはフグ。鍋から湯気が立っているので、これはフグ鍋と解したい。

ちなみに、熱源は、一般に言うコンロ。当時、土製のコンロを七輪と呼んだ。七厘とも書くのは、わずか七厘ほどの値段の木炭で煮炊きができるという意味という。

8. あんずより梅がやすい

元句：案ずるより産むが易い



実のところ。アンズよりウメが安いとは思えないが、どちらもバラ科の植物。それゆえに二つが交配した梅・豊後梅は、聞くとところによると白加賀種とアンズの交配種とか。

籠に入った大粒の梅。男が手にしているのは、アンズ(杏)であろう。

9. 生花をかへるの様な身ぶりで見

川柳



かへる→蛙 旧仮名遣いで書かれているので戦前のものであろう。年代をどこまで溯れるかは不明だが、この絵の原型は、羽村市内にあった羽村提灯店のもの。

生花に限らず、名のある壺などを見て誉めるとき、両手をついて、まさに蛙のような格好になることを詠んだもの。

10. いたきり娘

元句：したきりすずめ



娘とは思えないような女が片足をふんばって厚い板を切っている姿は、りりしく力強い。

今でも使われるのは、「着たきりすずめ」。夜も昼も同じ部屋着姿の場合から一週間も同じ服を着ていたりすると、親が子供に注意することがある。

11. いちふじみたろうさんなすび

元句：一富士二鷹三茄子



読み：いちふじにたかさんなすび

初夢に見ると縁起がよいとされるベストスリーがこの三つ。その理由は、徳川家ゆかりの駿河の国の名物として、①日本一の富士山、②愛鷹山（あしたかやま）、③初なすび。又は、駿河の国で高いものを①富士山、②愛鷹山、③初茄子の値段。ちなみに、初夢とは、元日の夜又は、二日の夜に見る夢のこと。

12. 梅見りゃほうづが那い

元句：上を見れば方図がない



梅→上の違いだけでも地口になるといういい例ともいえるが、ほうづ＝頬酩という意味も考えられる。

方図がないとは、際限がないとか、きりが無いという意味で使われてきたが、最近ではあまり耳にしなくなった。

13. 恵比寿大根喰ふ

元句：えびすだいこく（恵比寿大黒）



地口としては、一番ポピュラーなもので、どこでも見かける。それぞれの絵に特徴があり、描き手の個性が出て、興味深い。この絵の元絵は、羽村提灯店のものでふくよかな恵比寿様が大根（大黒）をかじっている。

14. 大かぶ小かぶ

元句：おおさむ、こさむ（大寒小寒）



日本の古典的なわらべ歌のひとつで「おおさむこさむ、山から小僧が泣いて来た…」と歌う。古くは、竹田出雲らの合作・人形浄瑠璃「ひらかな盛衰記」にある。祭には、恵比寿や大黒などの縁起物が喜ばれるが、この蕪（かぶ）も知る人ぞ知る隠れた存在で、家が富むと書いて「家富」を意味している。最近では、株式の株にも通じるし、陶器、掛け軸、のれんなどにも絵柄を見る。

15. 大かめもち

元句：大金持ち



誰もが少なからず抱く大金持ちへの願望。この男もその一人。羽村市郷土博物館の入口に大きな甕が展示してある。これは、藍染めにつかわれたもの。羽村でも藍染が行われていたという。この絵にある男が着ている羽織の模様は、所沢市→羽村市→あきる野市と伝えられた地口行灯に描かれている模様のひとつで、羽村市では途絶えたが、あきる野市の中村清作さんの絵にその伝統が引き継がれていることは喜ばしいことである。

16. おかめ八巻

元句：岡目八目



この地口も割合目にすることがある。しかし、四文字熟語に関心のある人を除けば、今や岡目八目の意味を知る人は少ないようだ。

一説によると、囲碁を傍らで見ている人は、対局して夢中になっている本人たちより、八目も先が読めるという。おかめとは、傍目とも書き当事者よりも傍らの第三者のほうが物事を冷静に判断できるという意味なのだ。

17. おきつね三本桜



元句：義経千本桜

歌舞伎や浄瑠璃等でおなじみの義経千本桜は、延享4年(1747)初演の時代物。竹田出雲や並木千柳等の合作による浄瑠璃。平家滅亡哀史に源義経や静御前、「狐鱈飲む」の地口にもなった佐藤忠信こと、狐忠信も登場する。

羽村市にある地口は、千本桜だが、ここでは、値切って三本桜としたところが面白い。

18. おきつね八寸とび



元句：義経八艘飛び

狐が八寸(約25センチ)飛んだ程度では面白くも何ともないが、源義経は、壇ノ浦の戦いで逃げる際、八艘の舟を飛び越えたというのはいえ、平家物語や源平盛衰記、義経記等にその記述はない。

江戸時代に書かれた浄瑠璃「義経千本桜」で初めて八艘跳びの記述がある。事件から600年以上も経ってれば、興味本位で無責任に書かれてしまうのは当たり前。

19. お若い人の桶のうち



元句：お若い人の胸の内

お若いとはいえ、二本差しのサムライ。人が桶に入るとしたら、桶舟を思い起こすが、ここでは意味不明。単なる遊び心からの思いつきか、理解に苦しむ。

20. かまから権五郎



元句：鎌倉権五郎



平安時代後期の武士・鎌倉景政のこと。江戸時代に「歌舞伎十八番乃内 暫」によりその剛勇ぶりから一躍有名になった歴史上の人物。

平家の出で相模の国・鎌倉の領主だったことから鎌倉権五郎と呼ばれたもの。

釜の中から権五郎が出てきたという設定が面白い。現在、羽村市内で行われる神社の祭礼では見ることはできないが、羽村市郷土博物館に元絵が残る。

21. 釜よりだんご

元句：花よりだんご



花よりだんごの地口は、羽村市に①花嫁だんご、②はまぐりだんご、③はらよりだんご、④花より酒だ等があるが、この地口は岩走神社で初めて見た。

絵からは、繊細な模様の着物姿ながらユニークな男が、手品のように釜の中から、パッと串刺しのだんごを取り出したところと見た。

22. かめにみみあり

元句：壁に耳あり



壁に耳あり、障子に目ありの前文を地口化したものでこの

地口は、簡単明瞭ではあるが、残念ながら今の若い人たちには説明を要するようだ。単に大きな瓶に耳が付いているだけで面白いのではないということを知ってほしい。

なお、あきる野市深沢・穴沢天神に「かんに耳あり噂はいへぬ」という地口がある。

23. 亀が片手の藻の中じゃ

元句：金が仇の世の中じゃ



亀の前足が藻の中に隠れて見えないということで描かれていない。

仇と敵 ともに「かたき」と読むが、恨みを伴うものが仇。仇討ち（あだうち）の例もある。片や、敵は敵対とか競争相手に使う。右側の絵は、地元に残る元絵。

24. 堪忍袋耳を縫い口をとぢ

元句：慣用句＝堪忍袋耳を縫い口を閉じ



堪忍袋の緒が切れる、という使い方が一般的だが、ここでは、堪忍袋を糸と針でしっかりと縫い、閉じて決意のほどがうかがえる。堪忍袋には、耳と口があるらしい。

耳を縫うとは、聞くところによると、布の織ったままや切った部分の淵をほつれないように縫うこととか。市販の辞書には出ていないようだ。

25. 木曾を通れば釜二つ

元句：人を呪わば穴二つ



木曾を=人を 通れば=呪わば

釜二つ=穴二つ

地口=似口 といわれるように、言い回しは、似ていても、地口と元句の間には何の関係もない。

右側の地口絵は、羽村市に残る古いもので、波線（瓶垂れ霞）の赤色は残っているが、青色が退色し、他の色の退色も考えられる。明らかに異なるところは、旅姿の男の着物の柄。なお、元句の意味については、羽村市の解説を参照されたい。

いるが、青色が退色し、他の色の退色も考えられる。明らかに異なるところは、旅姿の男の着物の柄。なお、元句の意味については、羽村市の解説を参照されたい。

26. 木をきってきりつぼめ

元句不詳



「つぼめる」と「すぼめる」。ほぼ同じような意味で使われている言葉だが、漢字では、窄めると書く。

例えば、傘をすぼめるという人も傘をつぼめるという人もいるので、厳密な区別はなさそうだ。

この地口では、「切りつぼめ」といっているもので、大きなものを小さくする意味で使っている。

27. 祇園恋しや夜の雨

詞



祇園といえば、祇園小唄が知られているが、その歌詞の中にこのフレーズは見つからない。

28. 熊谷のあつわり

元句：熊谷 敦盛



あつわり=敦盛、については、言葉上の地口としては理解できるが、ここに描かれている器の中の食べ物は、蕎麦の「あつもり」ではなかろうか。そもそも、あつもりとは、熱盛蕎麦のことで、江戸で人気の食べ物になり、川柳にも「かえさせ給えとあつ盛のそばを強い」というのがある。また、歌川広重の浮世絵にも敦盛=熱盛そばの絵がある。

29.来る者は拒まず去る者は追はず

諺 (ことわざ)



「去る者は追わず」という使い方が一般的だが、中国の「公羊伝」に「来者勿拒 去者勿追」とあることから、この地口は、原本に忠実に記されている。

30.さかづきばかりうきものか

元句：暁ばかり憂きものはなし



壬生忠岑の「有明のつれなく見へし別れより暁ばかり憂きものはなし」は、百人一首でおなじみの和歌。

元の絵は、春日部市の塚本政雄氏の作で、美大の学生が模写し、印刷物として流布しているものを横書きにリメイクしたもの。そのため、「うきものはなし」の文言が「うきものか」と変えられている。

31.ざるのけつはまっかだ

元句：猿のけつは真っ赤だ



箆（ざる）と猿（さる）の違いだけ。単純なものでもユニークな絵に救われている。これを見た子供たち、ちょっとした説明を加えれば、赤い箆に歓声を上げて笑っていた。このようなものが意外と受けるのかもしれない。

32.尻もつねれば赤くなる

元句：チリも積もれば山となる



これも分かり易い地口。元句のことわざは、周知のもの。古くは、『行燈地口語呂合』に「尻つめてて痣となる」という地口がある。

33. 四わんなげくびしをいるばかり

元句：思案投げ首しおいるばかり



四つの椀が男の前に並んでいるので四椀。腕を組んで嘆いている様子。この絵の元絵（右側の絵）は羽村市内にあった提灯店のもので、現在は、羽村市郷土博物館に寄贈され収蔵保管されている。

34. しんぶんかんぷんでわからない
35.新聞漢文でわからない

元句：ちんぷんかんぷんで分からない
元句：同上



No.34 は、ひらがな版の地口、No.35 は、漢字かな交り版。描かれた新聞紙の大きさから判断して左側のひらがな版は、新しいもの。

36.すずめ導成寺

元句：娘道成寺



地口としては、初歩的なもの。元句の娘道成寺は、正式には、『京鹿子娘道成寺』で、歌舞伎演目の一つで演劇的要素よりも白拍子の舞は多くの歌舞伎役者が手掛けてきたもので歌舞伎踊りの最高傑作ともいえる。

37.瀬戸の海にはろはたゝぬ

元句：人の口には戸は立てられぬ



羽村市に残る地口や元句では「…たてられぬ」だが、ここでは、「たたぬ」と結び、省略が見られる。「戸を立てる」とは戸を閉めるという意味がある。

38. そうじのいなり



元句：総司の稲荷

狐が掃除手に箒を以て掃除しているが、北区王子の稲荷神社、通称王子稲荷は、関東総司の稲荷神社と称して、関東にある稲荷神社の総元締めを名乗っている。

稲荷神社といえば、江戸時代初期、「江戸名物、伊勢屋、稲荷に犬の糞」と揶揄されたほど稲荷神社は、大小様々。大は、王子稲荷から小は、農家の庭先にある祠まで、犬の糞ほどもあったとか。

39. そば十郎すきなり



元句：蘇我十郎祐成（すけなり）

曾我兄弟の物語・曾我物語は、能、浄瑠璃、歌舞伎等で取り上げられ、多くの人々から関心の的だったと見えて、江戸時代に地口化されたものがいくつもある。

兄は十郎、弟が五郎で一郎、二郎、三郎のように生まれ順ではない。ちなみに、五郎＝御霊に通じ、強さを表す名前といわれている。

40. 宝の入船



元句：宝の入舟

出舟では縁起が悪い。お金や宝物が入舟になれば懐具合がよくなる。当然のことながら、歌舞伎や浄瑠璃の外題は「入り舟」という文字が使われる。

41. たこさげぢいさん



元句：高砂の爺さん

世阿弥作の能『高砂』は、伝説を掘り起し、住之江の松と高砂の松は共に松の精で夫婦であるという伝説から天下泰平を寿いだもの。

同様の地口で「たこさげのばあさん」、「凧下げの小さなばあさん」というものもある。

42. たこにのやま

元句:宝の山



大きな皿に蛸が山盛りに。蛸似ではなく、ここでは蛸煮と解したい。煮蛸では地口にならないので蛸煮となったものであろう。

43. 達筆をほめて短冊読めぬなり

元句:川柳



えてして、地口文字の解読には苦勞させられる。祭りという晴れの日になんてか、書く人の手が踊り、勢いで書いたものが多いからだ。

右の絵は羽村市の羽村提灯店の元絵にシルバー人材センターで色絵を描き加えたもの。

44. 玉あげ願ほどき

元句:生揚げがんとどき



狐が宝珠を持ち=玉あげ。願ほどき=願い事が成就したときのお礼参り。元句の生揚げとがんとどきは共に狐と縁が深い油揚げと同じ原材料。右の絵は、地元に残る元絵。

45. 玉を見ろ

元句: ざまを見ろ



実際に口に出して言うと『ざまあみろ』となる。羽村市にある地口に「玉見やがれ」=「ざまあ見やがれ」というのが類似句としてある。

46. だるまの大酒

元句：達磨大師



羽村市に残る地口は、だるま大酒（だるまだいしゅ）、元句：達磨大師（だるまだいし）。これを手本に書いた岩走神社の地口は、だるまの大酒（だるまの大酒のみ）と読んだのだろうか。達磨大師が大酒呑みだったかどうか知る人はいない。

47. とろゝの擦古木置き処に困り

48. とろゝの摺古木置場にこまる 川柳



すり鉢を前にした男女、どちらかといえば、女性のほうが似合っているし、絵の出来栄もいい。

49. 浪花節ポンと叩けば十余年

川柳



右側の絵は、羽村市の現行のもので、「ポンと叩けば二十年」。

左側の2枚は「ポンと叩けば十余年」と少し年数が短い。

50. なまくらものお太小

元句：鎌倉の右大将



江戸時代、嘉永2年の『地口双葉草』に「なまくらものお大小よぎとも」の地口が掲載されているが、元句は、「鎌倉の右大将頼朝」で頼朝が夜着を着ている。岩走神社の地口では、頼朝の名前が省略されている。

51. にくまれてながらいいるや冬のはい

川柳



宝井其角の「にくまれてながらへる人冬のはへ」というのが俳句なら、上の句も立派な俳句。

近年、蠅が少なくなったので、地口のような場面はめつきりなくなった。しかし、其角の俳句で思い起こすのは、退くことを知らない元気老人たち。若者からは、私たちの働く場を邪魔する老害だとも言われている。

(注) はい=はえ 標準的には、はえ。生物学では、ハエ目、イエバエ科等の書き方をする。

52. 煮たものふうふ

元句：似た者夫婦



どこにでもありそうで、誰にでも分かってもらえそうな地口だ。江戸期のものに「煮たもの豆腐」という地口がある。

右側の下絵は、羽村市郷土博物館蔵のもの。左の女性が着ている着物の柄は、いわゆる所沢系の色使いである。

53. 鶏を握りこぶしで呼んでいる

川柳



いつも庭先で同じ人がニワトリに餌を与えていると、彼等には学習能力があり、その人の姿を見ただけで集まってくる。実際には、にぎりこぶしは不要だが、そこは川柳の面白さを味わいたいもの。

ところで、庭には、二羽にわとりが…という駄洒落が通じた時代があった。かつて、農家の庭先にニワトリの姿が当たり前のようにあった。そして戦後 70 年、鶏卵の値段はあまり変化していないという。

54. にんじんが一心

元句：二しんが一しん



一心太助風の男が二本のニンジン指差している。元句の「二しんが一しん」とは、「二心が一心」と解した。真言密教では、「三心が一心」というのがある。考えようによっては、魚の「ニシンが一身」ともとれるが、これはありえないし、「魚心あれば水心」とも相容れないので、やはり「二心が一心」に落ち着くしかないようだ。

55. はげ頭なでてよい智恵しぼり出し

川柳



右側の絵は、着物の柄に所沢系の特徴が出ている。だてに歳をとっているのではない証拠に年寄りはそれなりに解決策を見つけ出すもの。

56. 春をまつ凧屋に武者のせい揃い

川柳



川柳にしては、季語も五七五も一応そろった立派なもの。春とは正月のこと。それを待つことから暮れの12月を意味していると解する、常識的に凧あげの季節は正月。右側の下絵は、羽村市郷土博物館蔵。

57. 判官のつつく

元句：判官の切腹



九郎判官義経という言葉があるが、判官といえば、源義経を指す場合がある。ここでは、単に判官のせつつくを一つづくと言っただけで大意はないが、一般に一服（一つづく）というと、一番に思いつくのはタバコ。そして飲み薬。「一服盛る」といえば毒薬。

右側の下絵は、羽村市郷土博物館蔵。

58. 半天の小僧

元句：弁天小僧



「青砥稿花紅彩画（あおとぞうしはなのにしきえ）」と言っても通人にしか理解できない。河竹黙阿弥原作の歌舞伎劇「白浪五人男」あるいは、「弁天小僧」と言った方が分かり易い。白浪五人男とは、日本駄衛門、南郷力丸、赤星十三、忠信利平、そして弁天小僧の五人組の盗賊集団。圧巻は、女装の弁天小僧がもろ肌ぬいで啖呵を切るところがあり、人気者として地口化された。

59. ひょうたん徳利と

元句：相談とっくりと



右側の絵は、羽村提灯店で昭和時代に購入したもので瓶垂れ霞の描き方に特徴がある（個人蔵）。

60. 服はかいたしゑもじはほしい

元句：ふぐは喰いたし命は惜しい



男の着ている着物と地口冒頭の服という言葉や旧仮名遣いのゑ文字から判断して明治・大正時代とみた。ふぐは、海水魚だが、なぜか河豚と書く。高級料亭に縁がない下々は「ふぐは喰わねど高楊枝」を決め込んでいる次第。

61. 武士が通れば道理引こむ

元句：無理が通れば道理引つ込む



文字と絵が合わないところが、素人っぽくていい。絵にある草履を活かすには「武士が通れば草履引込む」としたいところ。

62. ペン小僧引くのです

元句：弁天小僧菊之助



57. 半天の小僧に同じ。

通称「弁天小僧」、正式名称「青砥稿花紅彩画（あおとぞうしはなのにしきえ）の浜松屋店先の場で白浪五人男の一人・弁天小僧菊之助が「知らざあ言って聞かせやしょう」にはじまり、「弁天小僧菊之助たあ俺のことだあ」の名セリフが人気を博した。

63. 蒔かぬ種は生へぬ

元句：ことわざ



岩走神社の地口行灯は、写真のように傘と竹ひごに付けた花飾りの下に取り付けられる。地元では、灯籠と呼ばれ、形も周辺地域のものとは異なり、横長で大きいのが特徴である。右側の絵は、羽村提灯店のもの。

64. みかんの太夫

元句：無冠の太夫



羽村市郷土博物館蔵の地口は「みかんのたねをあつめる」とあり、元句は無冠の太夫敦盛。平敦盛のこと。

岩走神社の地口は、中途半端に省略されているので意味が通じない。

65. 目の上にだんご

元句：目の上のたんこぶ



「目の上のこぶ」とも言う。

地口絵から分かることは、三方に盛られた団子を僧侶が見上げているので、目の上という意味。自分の活動の邪魔になる目上の人等を指して「目の上のたんこぶ」という。

66. もくろり三銭柿八銭

元句：桃栗三年柿八年



元句では、桃と栗は植えてから3年で結実し、柿の実がなるまで8年かかるという。この諺の後に「柚子の大馬鹿13年」とか、「梅はすいすい13年」、「梨の馬鹿めは18年」、長いものでは、「银杏の気違い30年」など、地方により異なる。

67. ゆかたのせき



元句：安宅の関



男が浴衣を着て立っているだけで、弁慶ゆかりの安宅の関にたどり着くのは至難の業。

右側の絵は、羽村提灯店の裸の弁慶。これをヒントに「ゆかたのせき」が生まれたものかもしれない。

68. りんごしゃぶろう



元句不詳

69. わらじが悪りゃあやまろう



元句：私が悪りゃ謝ろう

わらじを私という言い方は、あきる野市深沢の地口で「わらんじゃ本郷へゆくわいな」とわらじ顔の八百屋お七に言わせている。



70. 笑ふ門には福来る



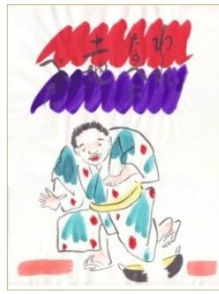
元句：ことわざ・笑う門には福きたる



岩走神社の地口・笑ふ門には福来るは、二種類あり、右側は夜の点灯後のもの。

71.われなべに土地べた

元句：割れ鍋に閉じ蓋



右側の絵は、羽村提灯店で昭和年代に描かれたもので、着物の柄が所沢系の色使いをしている。夫婦を鍋と蓋に例えたもので割れた鍋と修繕した蓋で釣り合いがとれているという意味。

●あきる野市伊奈地区に残る古い地口元絵

1. 足柄で育ち手柄で名をのこし

坂田金時(金太郎)の伝説で知られる山・足柄山

元句：足柄で育ち手柄で名を残し

神奈川県南西部

2. 按摩に杖ない戸を横に

戸を横に＝胴欲に 戸を立てる＝閉める

元句：按摩に杖ないとは胴欲な

3. い婦寿大こく

大黒様がウチワで仰いで煙を立てて燻している。いぶす＝えぶす＝えびす(恵比寿)

元句：えびす大黒

4. 今戸焼のあねさんにうどんは存らぬ

今戸焼とは、江戸浅草の今戸でつくられた素焼きの土器や人形などの総称。今戸焼の姉さんという場合は、不美人のこと。土製の人形なので当然のことながらうどんは食べない。

元句：川柳



5. うなりの天気を頭痛にやむ

うなりとは、絵にあるような凧を揚げるとき、クジラの髭や薄く削いだ籐などを凧糸の上部に付けて風に鳴らすもので、風が吹く日に凧揚げをする天気という意味。

元句の言い方も「他人の疝気…」 「人の疝気…」 などという場合もあり、疝気とは、自分には無関係なのに余計な心配をすること。漢方という疝気とは、腰腹部の痛みのこと。

元句：隣の疝気を頭痛に病む

6. 大津の名物又平が賣りはじめ

大津の名物がキーポイント。残念ながら意味不明。又平という名前にユーモアを感じる。

元句：大津の名物又平が賣りはじめ

7. 大星由屋のぞき

仮名手本忠臣蔵では、実名の大石内蔵助を憚って大星由良之助の名で登場する。

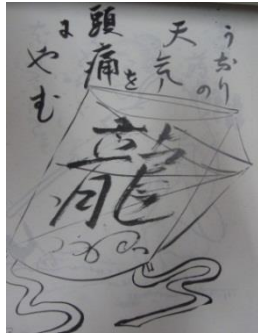
この地口では、大星が湯屋を覗き見しているとの設定が笑いを誘う。

元句：大星由良之助

8. おくやまのたぬき

元句：奥山の狸

意味不明だが、手品師が独楽を回している。手品師とは、見る人即ち、観客を狸のように化かすので奥山の狸と言ったものか。ここでいう奥山とは、浅草の奥山と思われる。



9. か や り 宇 多

元句：流行り唄

蚊遣りとは、草木をいぶして蚊を追い払うこと。地口絵にあるように火鉢で杉の葉や除虫菊等を焚き、蚊からの被害を防止する。かやりもはやりも一字違い。

10. 関羽上使遍てこ

元句：関羽張飛へんてこ

江戸時代の歌舞伎十八番のひとつに河原崎座の「閏月仁景清」があり、中国・漢の時代の張飛に扮した平景清と関羽に扮した畠山重忠が出てくるが、これをへんてこといったもの。

11. 思案する時ハウでまであぐらかき

元句：思案する時は腕まで胡座かき

説明するまでもなく、座り主流の時代、日本人はこのようにして考え事をしたというもの。

12. 鯛はよいもの遣ひもの

元句：旅は憂いもの辛いもの

元句のような思いで旅をした時代があったとは、想像もつかない。昔の旅は水盃を交わしてから出掛けたほど大変だったようだ。



13. 天下たい平文字にまで へんハなし 元句：天下泰平文字にまで偏は無し

天下泰平と書き、この4文字には、偏も旁（つくり）もない。確かに人偏とか寸づくりなどは付かない。変なところに気が付く人もいるものだ。

14. なを蒔くとんでんばばアさ満だ

元句：ノーマクサンマンダバーサラダ

「菜を蒔く屯田場 婆あ様だ」と読み解いたが、元句は、真言密教のお経の一節。お経を聞いていると「のうまくさんまんだあ ばあさらだあ」と何度も繰り返すので、自然と耳に残り、地口になったものと思われる。羽村市の羽村提灯店の地口は「なをまくさんだんだ」（菜を蒔く算段だ）で「婆あ様だ」が省略されている。

15. 猫のじゃれたる古河のなし

元句：不詳

梨は、明治時代から長十郎や、三水（幸水、豊水、新水）があったが、茨城県の古河には古河梨があった。ところが、「古河梨=子が無し」に通じることから敬遠されたという。

16.呑大酒三升五合

元句：南無大師遍照金剛

地口は、見てのとおり、文字だけで平仮名はなくとも意味は分かる。酒徳利を前にした男は、わずかな肴で三升五合の酒を飲むというもの。これだけで灯籠に火が入れば十分に灯籠の役を果たしている。ところが、地口とは、その裏を読んで初めてその面白さに到達するのだ。なお、元句の南無大師遍照金剛は、唱え詞。南無は、梵語で仏に心から帰依するという意味。大師は、弘法大師・空海のこと。遍照金剛とは、簡単に言えば、光明があまねく照らすという意味で大日如来の名号でもある。



17.箱の如くに御座候志てう

元句：かくのごとくに御座候 以上

パソコンは、「かくのごとく」を知らない。「核のごとく」と表記するからお笑いである。漢字で書くと「斯如」。この二字で、かくのごとくと読む。御座候=ございます。江戸っ子庶民がこんな言葉を知っているはずもないし、使うこともなかったはずだが、実は、これも歌舞伎や芝居がその役割を果たしている。お馴染み、仮名手本忠臣蔵の場面、竹槍の先に差し挟まれた書簡「浅野内匠家来口上」の最終行に次のようにある（読み下し文）。

「私ども死後、もし御検分のお方御座候わば、御披見願ひ奉り斯くの如くに御座候 以上」

(注) 志てう=しちょう=紙帳=紙製の蚊帳=以上

18.人は梅よりただほくろ

元句：人は見目よりただ心

梅とほくろを変えただけ。羽村市に残る地口に比べれば、上品とも言える。

19.ひとりですめしまいらせそろ

元句：一筆示し参らせ候

ひとりで酢飯参らせ候と読むだけでは、女が食事をしているに過ぎない。しかし、片肌見せた姿からは、どことなく粋を感じ、その先を想像させられるから不思議だ。

20.船ハ小僧の使なり

元句：：夢は五臓の疲れなり

船=船=舟 どの字も「ふね」と読む。そして小舟に立つ小僧。これだけでは、何のヒントにもならない。羽村市郷土博物館蔵の地口資料の中に「文は小僧のつかへ」というのがあり、調べてみると弘化4年の「地久知画でほん」に元句の「夢は五臓の疲れ」があった。



21. 降るか祢まつだけ

元句：降る金待つだけ

降ると言えば、雨か雪と相場は決まっているが、ある日突然、一万円札がバラバラと降ってきたというニュースがあった。江戸時代でも絵にあるような小判が降ってくるなら大歓迎。まさに、まつだけ。

22. 幕明きの口上蚊屋へむぐるやう

元句：川柳

芝居の幕開きのとき、座頭が幕の前に一席口上を述べる。絵にあるような口上書きを読み上げてうやうやしく頭を下げると、いかにも蚊屋の中に入るような仕草になる。

23. 満んたら不^らうさん癩のた祢

元句：なんたら法師の柿の種

満んたら=曼荼羅（梵語：mandala）　ふうさん=今風に言えプーさんみたいな人か。
癩の種=癩癩を起す原因のこと。

元句は、「なんたら法師の柿の種、拾って食えば意地きたなし」と言って遊ぶもので子供の言葉あそび。黄表紙「南陀羅法師柿種」（安永6年・1777）という本がある。

24. 結びめほどいて見れば長くなり

元句：盗人を捕えてみれば我が子なり

結び玉ほどいてみれば長くなり（新案地口絵手本）というのもあるが、「結び目」のほうが地口としてはいい。山崎宗鑑の犬筑波集に七七調の題句：「切りたくもあり、切りたくもなし」に対して五七五調の付け句「盗人を捕えてみれば我が子なり」がある。



青梅市西分神社の地口行灯

西分神社は、永山丘陵の一角、青梅市西分にある。古い石柱には、村社西分神社と記されているが、この名称は、明治時代以降である。前身は、妙見信仰にもとづく妙見社で地元では、「妙見様」と呼ぶ。隣接して鎌倉建長寺派の宗徳寺があり、山号を「妙見山」と称している。神社創建について二説あり、宗徳寺の守護神として祀られたとするものと、中世にこの地を支配していた三田氏が勧請したという説がある。

例祭は、11月3日で地口行灯を飾るようになった経緯については、定かではないが、地口行灯に記された内容は、大正～昭和初期の感じがする。例えば、元句にキャラメルや金太郎飴が登場するからだ。その他、江戸時代の地口をアレンジしたものも見受けられた。

今回は、32点を五十音順に解説するが、瓶垂れ霞と呼ばれる紫色と赤色の波線にも古さがなく、現代的な連続模様になっているし、地口の内容についても難解なものはない。

1. いしにかわらをふんまえて



元句：一に俵をふんまえて

一つの地口に対して二つの絵柄があり、片や瓦職人とおぼしき人が石と瓦を踏んづけている。もう一枚は、正真正銘の大黒天が瓦と石の上で打ち出の小づちを振っている。

大黒舞の歌詞の中に「一に俵をふん舞えて、二ににっこり笑って、三に……。」とあることから元句にたどり着く。

2. いもはにほへと



元句：いろはにほへと

一般的にイモといえば、サツマイモ。連想するのは、あの臭いオナラ。ここでは、描かれた葉っぱからサトイモととりたいたい。サトイモとオナラの関係は、経験者でなければ、この発想はない。この絵にあるサトイモも立派なガス発生源なのだろう。

3. えびとだいこんくう



元句：恵比寿大黒

男の右手は箸でエビをつまみ、左手の器の中には、大根が描かれ、まさにエビと大根を食べようとしている。「恵比寿大根食う」とか「恵比寿大根」という地口絵ではストレートに恵比寿の絵だが、ここでは、もう一ひねりして庶民が描かれているところがいい。

4. えんまのしたのちからもち



読み：閻魔の舌の力持ち

元句：縁の下の力持ち

「閻魔舌の力持ち」という地口が古くからあるが、この地口では、「閻魔の舌の」と言っている点が「縁の下の」に近い表現になっている。「ウソつくと閻魔様に舌を抜かれる」とは、おなじみの言葉。

5. おおきなうちわ

6. おおきなうつわ

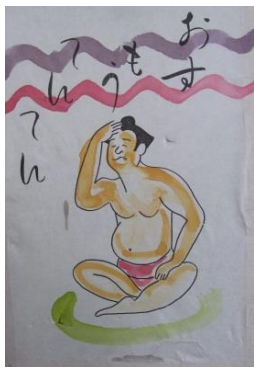


元句：大きなお世話

元句：大きなお世話

いつの時代にも「大きなお世話」と思われる行為はあったに違いない。ところが今、「絆」という言葉を頻繁に聞くようになった。意識改革かなと思っていると、ある日突然「小さな親切大きなお世話」と声高に言う人が現れる。とにかくこの世は住みにくい。

7. おすもうてんてん



元句：おつむてんてん

日本人と相撲。国技と呼ばれるだけはあって地口にも登場することがある。毎年貯めえ門(雷電為衛門)が「一ヶ年定期証書」を手に行している地口絵を瑞穂町で見たことがある。

8. おさつよいとこいちどはおたべ



元句：草津よいとこ一度はおいで

日本人と温泉、火山国日本にとって温泉は、地の恵み。遠くは、箱根、草津へと出掛けた。今や、地下1kmを超えるところまで掘削できるようになり、いつでもどこでもサツマイモが食べられるように、どこでも手軽に温泉気分を味わえるようになった。

9. おなすせんじゅうりょう



元句:お夏清十郎

宿屋の娘・お夏と手代の清十郎との駆け落ち物語。寛文2年(1662)の実話に尾ひれがついて、井原西鶴の『好色五人女』、近松門左衛門の『五十年忌歌念仏』、坪内逍遙の『お夏狂乱』などを生んだ。

10. かかしがわるけりゃあやまろう



元句:私が悪けりゃあやまろう

この地口は、二番煎じで、古くは、弘化4年(1847)の『地久知画でほん』に「案山子が歩行ハあやまろう」(かかしがあるけばあやまろう)というのがある。

11. かきくりいちじくりんごなし



元句:果物尽くし

イチジクは、江戸時代に渡来したもの。かきくり……と語呂感覚で上から下へ絵の順に読む。五種のうち、柿が最もポピュラーで古くから庭に植え、親しまれてきた。

奥多摩では、ナシの古木を見かけるが、石梨とか山梨と呼び、ナシの味はするが、今では、食用にしていなない。

12. 角あれば歩あり



元句:楽あれば苦あり

将棋の駒は角行、飛車、金将、歩の。四つが描かれているが、そのうちの二つには、ルビがふってある。親切心か大きなお世話かは、読み手次第というもの。

文字で書かずに、絵で読ませる工夫が面白い。「福は内、鬼は外」後出のフグとカニの絵も同じ。

13. かむろのつきみ

読み：禿の月見 元句：鮪の剥き身（すきみ）



禿とは、遊郭で上級の遊女に仕える修業中の少女のこと。 剥き身とは、薄くきった肉片、鯛や鮪の切り身を指す。切りみ→剥き身としたところに地口が生きている。

遊び心でみれば、禿も禿も同じ。カムロと読むか、ハゲと読むかの違いだけ。

ちなみに、「剥げる」＝「禿る」。

14. かめのなかからきんかがでたよ

読み：甕の中から金貨が出たよ

15. かめのなかからきんぎょがでたよ

読み：甕の中から金魚が出たよ

元句：飴の中から金太さんが出たよ



大正時代から昭和のはじめにかけて金太郎飴が人気を博した時期があった。今でも子供に夢を、そして大人に郷愁を。金太郎飴本舗は健在。

16. さとうはあまいかのみよいか

読み：砂糖は甘いか飲みよいか

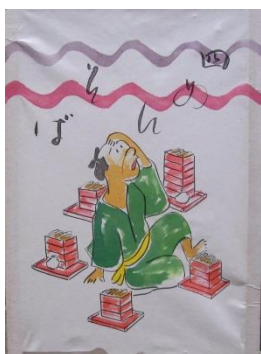
元句：西瓜甘いかしょっぱいか



ここでは、元句自体が地ぐっているので「西瓜＝酸いか」に気が付かないかもしれない。

17. 四めんそば

元句：四面楚歌



「四めんそば」と書かれているから、四面に蕎麦が置かれているかと思えば、数えてみたら、実は五面に置かれている。描き手がゴメンと謝っているようだ。

ちなみに。四面楚歌とは、今、はやりの四文字熟語でおなじみの言葉。中国の歴史書『史記』に基づく故事で四方がすべて敵であるという意味。孤立無援とか孤軍重囲に同じ。

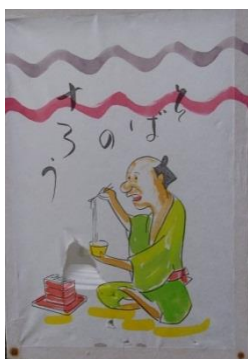
18. そばきりむすめ



元句:舌切り雀

むかし話でおなじみの意地悪ばあさんと親切じいさんの話。元は、室町時代に成立したとされる『宇治拾遺物語』が原典。

19. そばの十ろう



元句:蘇我の十郎

原典は、『曾我物語』で江戸時代の浄瑠璃や歌舞伎に脚色され、曾我兄弟の敵討ちが多くの人々に感銘を与えた。作者や成立年代は不詳とされているが、内容は、室町時代前期の戦記物語で、鎌倉時代から南北朝時代の成立と思われる。

ちなみに十郎は兄、五郎が弟で、生まれた順番とは関係なく、名付け親から一字を貰い受けてたり、五郎は力強さの象徴として御霊の意味で名づける場合があるという。

20. たかみの念仏



元句:高みの見物

他愛のない地口だが、弘化4年の『地久知画手本』には、「たかみの剣術」というのがある。



21. たこさげのお婆あさん

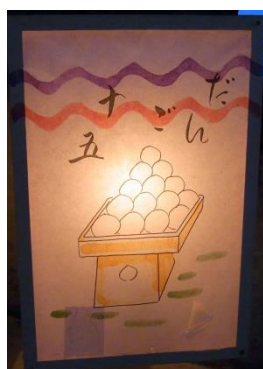


元句:高砂のお婆あさん

能『高砂』の作者・世阿弥は、夫婦愛と長寿を壽ぎ、この作品を世に出した。結婚式の折『高砂や、この浦舟に帆をあげて…』で知られている。

この地口には、凧揚げの凧が描かれているが、海の蛸をぶら下げている絵もある。

22. だんご十五



元句:三五十五

仲秋の名月・十五夜に飾る代表的なものと言え
ば団子。掛け算で表現したところに面白みがある
が、団子の数が14個しか描かれていない。単な
る九九の間違いか、それとも、どこかに隠してあ
るのか、だまし絵か。はたまたお月さんが食べて
しまったのか。

23. どびんにかわらけ



元句:おせんべいにキャラメル

「おせんべいにキャラメル、あんぱんにラムネ」映画館や
列車内での売り子の呼び声も今やあまり聞かなくなつた。

おせんべいは、おせんべいのことです。キャラメルは、今も人気の飴。昨
今のパソコンは、「汚染にキャラメル」しか知らない。

24. にんじんわずか五十円



元句:人生わずか五十年

「人間（じんかん）五十年 化天（げてん）の
うちをくらぶれば 夢幻（ゆめまぼろし）の如く
なり……。」織田信長が好んだ幸若舞『敦盛』の一
節。本来の元句は、幸若舞の一節だが、一般的に
は、「人生わずか五十年」が通用している。

25. ねこにごばん



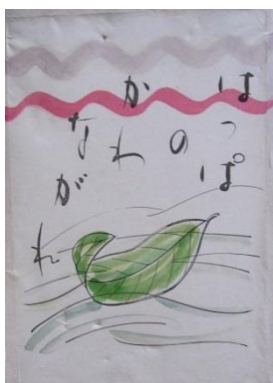
元句:猫に小判

猫が碁盤の上で手招きをしている。まさに招き猫
そのものだが、深い意味はないようだ。

元句の猫に小判は、豚に真珠とか馬の耳に念仏と
同じ。

26. はっぱのかわながれ

元句：河童の川流れ



一字違いなので、聞き損いそうな地口だが、地口と元句の二つの意味が完全に異なるところがいい。面白くも何ともないところがさっぱりしていていいのかもしれない。しかしながら、今の若い人の中には、「河童の川流れ」の意味さえ知らない人がいる。言葉は、生きていると言われるが、どんどん新しいカタカナ言葉が増え、短縮語が生まれて来る。やがて河童は消える運命にあるのだろうか。

27. ふぐはうち かにほそと

元句：福は内、鬼は外

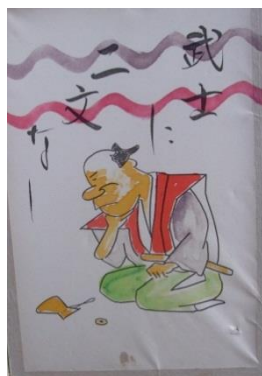


フグとカニ。面白い取り合わせで文字ではなく、絵にしたところがいい。

フグは河豚と書き、カニは蟹と書く。動植物名の表記は、片仮名を用いるのが定番だが、漢字のほうが分かりやすい場合もある。

28. 武士に二文なし

元句：武士に二言なし



江戸時代後半の武士は、経済的に苦境の真っ只中に投げ出されてしまったので、まさに二文に苦しんだにちがいない、

29. 武士のまきわり

元句：富士の巻狩り

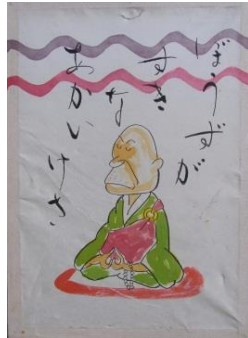


源頼朝は、文治5年(1189)奥州藤原氏を倒し、建久3年(1192)には、征夷大將軍になり実権を握った。その翌年5月、

頼朝は、軍事政権の確立を誇示するため、半月以上にわたり富士山の裾野で盛大な狩猟大会を開催した。このいわゆる「富士の巻狩り」だけで江戸っ子が「武士の薪割り」という地口を考え付いたとは思えない。頼朝の富士の巻狩り中に起こった曾我兄弟の仇討ち事件が、歌舞伎等で取り上げられ、一躍注目の的になり、この地口が生まれたものであろう。

30. へいけのすきなあかいはた

31. ぼうずがすきなあかいけさ



元句：亭主の好きな赤烏帽子

元句：亭主が好きな赤烏帽子

昔ながらの家制度の中で主人の好きなものに家族は逆らえなかった。そこで、黒塗りが当たり前の烏帽子ではなく、赤い烏帽子をかぶりたがる主人に対しても家族は目をつぶるということ。

源氏の白に対して、平氏の赤。僧侶の場合は、袈裟よりも衣に赤、黄、紫の色分けがある。

32. ほうずきさんいくつ



元句：お月さんいくつ

お月さんいくつ、十三七つ……。江戸時代のわらべ歌で、その意味については、諸説あるが、満月になる前の十三夜の月が出たばかりの七ツ時（これを若い月とした）に見ている様子だという。

ちなみに現代仮名遣いでは「ほおづき」。

多摩地域の祭礼で地口行灯や灯籠を飾る寺社一覧

3月10日前後の日曜日	青梅市小曾木 御嶽神社 神社周辺及び参道
3月第四日曜日	日の出町大久野 幸神神社 子供の絵
4月第二日曜日	羽村市内全域 境内社・八雲神社の祭り 各地域に多数あり
4月第二日曜日	青梅市塩船 神明社 参道の左右に並ぶ
4月第二日曜日	青梅市友田 御嶽神社 羽村と同じ
4月第三日曜日	青梅市成木 牛頭天王宮 氏子が描いたもの
4月第三日曜日	青梅市柚木 木下八幡神社 下絵は羽村提灯店のもの
4月第四日曜日	小平市神明宮境内社・八雲祭 境内及び沿道の民家に多数
5月5日	あきる野市深沢 穴沢天神社 江戸・明治期のもの
5月5日	日の出町大久野北原 毘沙門天 お堂周辺のみ
7月第二日曜日	西東京市田無 田無神社境内社・津島神社
7月15日に近い日曜日	瑞穂町 須賀神社（瑞穂天王祭）
7月15日に近い日曜日	東村山市八坂神社・天王さま例大祭 境内に多い
7月中旬	所沢市 野老澤行灯廊火 所沢系地口行灯多数と創作地口
7月下旬の日曜日	福生市 神明神社ほか・八雲神社祭礼 市販、子供絵等多数
7月第四日曜日	飯能市西吾野 我野神社（羽村と同じ所沢系）

8月第一土曜日	小平市灯りまつり 市民の創作地口行灯多数
8月第一日曜日	武蔵村山市中央・日吉神社 中藤・熊野神社
8月10日前後の日曜日	日の出町玉の内三嶋神社 玉の内会館 氏子の女性が描く
8月10日	調布市西光寺 境内に多数。地口クイズあり。
8月14日	青梅市成木 安楽寺 旧盆 子供の絵灯籠
8月26、27日	東村山市諏訪町 諏訪神社
8月26~28日	青梅市根ヶ布 諏訪神社(虎柏神社) 地口行灯と子供の絵
8月第四日曜日	青梅市勝沼 勝沼神社 多数の氏子の創作灯籠
8月第四日曜日	日野市川辺堀之内 日枝神社 子供の絵灯籠
8月最終日曜日	あきる野市五日市 ヨルイチ 所沢系と子供の絵灯籠
8月最終日曜日	あきる野市留原 八坂神社 明治期の地口絵
9月第一日曜日	日野市程久保 神明神社
9月第二日曜日	日野市三沢 三澤八幡神社 びら武製地口絵
9月第二日曜日	日野市高幡 若宮神社・愛宕神社例大祭
9月第二日曜日	日野市大宮神社 参道階段のみ
9月第二日曜日	日野市上田 北野神社 子供の絵灯籠
9月第二日曜日	清瀬市下宿 八幡神社 灯ろう祭り 子供の絵
9月第二日曜日	東村山市 萩山八幡神社 道路や民家には多数あり
9月第二日曜日	東大和市 清水神社 境内に多数あり
9月9日	あきる野市二宮神社・しょうが祭り 境内及び沿道
9月9日に近い日曜日	国立市青柳 青柳稻荷神社(五社稻荷)
9月15日に近い日曜日	あきる野市伊奈 岩走神社 地元氏子が描いたもの
9月第三日曜日	あきる野市草花 草花神社 地元氏子が描いたもの
9月第三日曜日	あきる野市油平 八幡神社 市販品
9月25日前後の日曜日	国立市谷保 谷保天満宮 地元氏子が描いたもの
9月27、28日	府中市 大国魂神社 くり祭り奉納行灯多数(地口ナシ)
9月28~30日	あきる野市阿伎留神社 地口提灯あり
10月1日	羽村市羽西 阿蘇神社 地口行灯展示もある
10月10日前後	青梅市野上 春日神社 市販品と子供の絵
10月10日前後の日曜日	青梅市成木 熊野神社 市販品
11月3日	青梅市西分 西分神社 参道と神社周辺
11月3日	青梅市小曾木 古布市神社 参道階段に飾る
11月酉の市	青梅市 住吉神社 境内のみ

(注1) 酉の市及び複数日を記した日以外は、前日が宵宮にあたる。

(注2) 祭礼日が変更する場合がありますので当該神社等に事前確認のこと。

●参考文献

- 英泉画『ちぐちあんどう』 中島穂高 笑いと創造第3集 勉誠出版 2003年2月
絵で見て楽しむ 江戸っ子語のイキ・イナセ 笹岡良彦 遊子館歴史選書4
江戸ちぐち事典 川越の灯ろう絵 色田幹雄編 文芸社 2008年5月
江戸庶民の四季 西山松之助 岩波セミナーブックス46
江戸文化誌 西山松之助 岩波現代文庫
江戸のパロディーもじり百人一首を読む 武藤禎夫 1998年12月
絵本江戸風俗往来 東洋文庫 鈴木棠三著 1978年
近世の地口絵 国文学 解釈と鑑賞 2009年5月号
くにたちの祭り 国立郷土文化館企画展図録 2001年1月
研究ノート 江戸の残照 一地口行灯の世界一 岡村昌夫 人形玩具研究12 2001年
五節供稚童講釈：江戸年中行事幼絵抄 山東京伝 太平文庫31 太平書屋
ことば遊び 中公新書 鈴木棠三著 1975年
地口あん当宇 西尾市立図書館(岩瀬文庫) 国文研電子図書 国文学研究資料館
地口行灯 絵解きの楽しさ 岡崎学 羽村市郷土博物館紀要 No.27 2013年3月
地口行灯雑記帳 石川博司 ともしび会 2000年2月
地口行灯でござる 武蔵野に伝わる江戸の風物詩 渡辺尚子 季刊銀河No.155
地口行灯と地口言葉 長沢利明 西郊民俗第169号
地口行灯の世界 足立区立郷土博物館 1005年9月
地口行灯の調査記録 岡村昌夫 くにたち郷土文化館・研究紀要 2003年3月
地口絵手本 梅亭樵父 早稲田大学電子図書
地口絵手本 浜野英三郎編 国文学研究資料館 平凡社 2007年3月
神事画譜 ことわざ資料叢書第6巻 クレス出版 2002年6月
新板開化地口画手本 豊瀬賛女編 国文研電子図書 国文学研究資料館
新版ことば遊び辞典 鈴木棠三 東京堂出版 1984年7月
調査報告 東京周辺の地口絵製作者について 吉田義和 人形玩具研究12 2001年
東都歳時記 斎藤月岑 東洋文庫 平凡社 1975,6年
日野の祭幟 日野の歴史と民俗の会 1996年9月
守貞謄稿 喜田川守貞 近世風俗誌 岩波文庫 1999年
我衣 加藤曳尾庵 日本庶民生活史料集成 第15巻 1977年

多摩川を溯った江戸・東京の民俗「地口行灯と祭り」

(研究助成・一般研究VOL. 36—NO. 211)

著 者 岡崎 学

発行日 2014年11月1日

発行者 公益財団法人とうきゅう環境財団

〒150-0002

東京都渋谷区渋谷1-16-14 (渋谷地下鉄ビル内)

TEL (03) 3400-9142

FAX (03) 3400-9141

<http://www.tokyuenv.or.jp/>